
酷い死に方をした転生者（自業自得だけど）

ドアノブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酷い死に方をした転生者（自業自得だけど）

【Nコード】

N8149K

【作者名】

ドアノブ

【あらすじ】

車に轢かれそうな子供を助けたわけでもなく、ある日突然隕石が落ちてきたわけでもなく、自身の自業自得により死んでしまった主人公。神様の暇つぶしのために、転生！しかもあてずっぽうでリカルなのはの世界に！チートな能力を使って原作介入……………
・すると思う。

第1話 神様、転生先を人生ゲームのノリで決めるのはやめてください（前書き）

初投稿になります。キャラクターの性格が変わらないように頑張ります。

第1話 神様、転生先を人生ゲームのノリで決めるのはやめてください

??? 「おい、起きろ」

俺「へ、?どなた?」

目を覚ましたら七福神の大黒天みたいな人が目の前にいた。
ていうか此処どこよ、確か、萩原（友人）とファミレスで飲み食いしながら 騒いでいたはずだが?

??? 「他の客の迷惑だバカタレ」

俺「だって互いにやっと彼女で来たのがうれしくってさ」

今までは自分に恋人がいる事を想像することすらできなかった。
だって思い浮かばないんだもん。
だから萩原と存分に騒ぎたくなったのだ、店員からの注意や他の客の視線? ふふふ・そんなもの効かぬなあ（サウザー風）。

??? 「他の客の迷惑だドアホ、居酒屋に行け」

俺「近くなかったし、ファミレスのほうが飯うまいし。」

??? 「んなことどうだって良い、話が進まん本題に入るぞ。自己紹介するがわしは神だ」

俺「・・・は?」

ナニイッテルノコノヒト。

とりあえず可哀想な人を見る目で見つめてあげよう、かまってほしいのかもしれないし。

ミシミシッ！

??? 「神だ、その目をやめんと地獄の鬼共の下着洗いさせるぞ？

アアアン？」

アイアンクローかましてきました。

俺「OK、わかりましたので放してください。顔の形が変わる、マジで死にそう！」

神「とつくに死んどるぞ、「え？」 貴様はファミレスで暴れた以降の記憶無いだろ？」

・・・確かに無い。WHY？

「居合わせたヤのつく職業の連中に路地裏に連れ込まれていったな、あまりに五月蠅いからキレたのだろ。今頃、貴様等の肉体は内臓や眼球は病院で、その他は海で魚の餌だろうな」

・・・（汗）

神「これからはTPOをわきまえるんだな、そんな自業自得で気の毒に思う事などこれっぽっちも無い貴様に嬉しいお知らせだ」

俺「まさか生きk 「肉体の大半が魚の体の一部だぞ？ ムリ」 神だろあんた!？」

神「神にも得て不得手がある、そもそも、足元にいる蟻（人間） 1

匹のために神がそこまですると思うのか？身の程を知れ蟻んこ」

わぁー神の本音聞いちゃった。宗教家が聞けば、絶対に宗旨替えるだろうなあ。

この人（いや、神か）にとって、地球人類は蟻ですか。

俺「じゃどうすんの？まさかここで雑用させる気？」

神「いや転生させ「マジですか!？」・・・その通りだ、望むならいくつか能力もつけるが？」

俺「お願いします！、えーと（考え中）」

1、真祖の吸血鬼の肉体にしてほしい（月姫のアルクみたいに）

2、容姿の変更、淡く緑がかった銀髪に蒼眼、体はほっそりとスレンダー（CODE REDの黒江さんと同じ）

3、GS美神の横島の文殊（ただし数は無限）

4、ロストチャイルドのケルベルスに変身

5、ムーンタイトズのキャラクターの能力（PS2ゲーム参照）

6、永遠神剣が欲しい（同上）

7、ニードレスのフラグメントもちろん全部

神「・・・貴様オタクだったのか、しかも子供に見せられませんの作品がちらほらと」

俺「いやほら、現実よりもアニメやゲームのほうが面白いし夢があるじゃん？」↑ダメ発言

神「まあ、良い」「自分で頼んでおいてなんだけど良いの？」かまわん中には自分が神になりたいなどとはざく蟻もいるからな。それに比べればマシだ、では違う世界に送るぞ。」

俺「最後に聞きたいんだけど、なんで蟻にここまでするの？

実はとても優しい人？とか思ってるんですけど。

神「ぶっちゃけていうと暇つぶしだ。最近の蟻どもはワシを熱心に崇めんし、まあ崇めたとしても何かしてやるつもりも無いが。最近他の神族が故意か過失か、人間を殺して違う世界に転生させるといのが流行していると聞いてな、ワシも酒を飲みながら見てみたいと思ったのだ」

違う世界とはいえ人生をチート能力でやり直せるのだありがたいと思え。なんて言ってますよこの人。

酒飲みながらって、野球中継見てるオヤジさんじゃないんだから。っていうかデスノートを連想させる理由だな。

神「では送るぞ」

俺「ちなみにどこの世界に」「後でサイコロでも使って決めてやるからとりあえず異空間で待機してろ」「人生ゲームかよっ!」

神「安心しろ、ひぐらしの鳴く頃に、スクールデイズ、学校の怪談の世界も用意しておいてやった」

第1話 神様、転生先を人生ゲームのノリで決めるのはやめてください（後書き）

はじめまして、ドアノブと申します。

いろんな方々の作品を読んでいるうちに、自分も書いてみたいと思
い、今回始めて投稿させていただきました。

文才、一般常識、その他諸々欠けているうえに、グダグダな話にな
る可能性大です。更新も不定期になると思います。

キャラの性格が違う！ 設定が違う！ 原作見直せ！と思われるこ
とがあるかも知れませんが、そういったクレーームでも構いませんの
で、感想があればよろしくお願いいたします。

第2話 襲撃とノーロプバンジーは突然に（前書き）

1話よりも短く、そしてちょっと無理があるかなと思ったたりしています。

第2話 襲撃とノーロプバンジーは突然に

俺「うおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

おはようございます、こんにちは、こんばんは、そしておやすみなさい。

いや眠ったらずい、何しろ俺は今落下中。

あの後、異空間で待機していました。周囲を見ると転生するのを待ってる人たちが数人いましたよ。どうやら自分以外にも集められたようだ。その人たちと話していると、

「番号札1802番の方、準備が整いましたのでこちらへどうぞ」と声がかかった。

・・・暇つぶしのためにどれだけ集めたんだよ。ド○ゴンボールで閻魔様の裁きを待つ死人になった気分だったよ。

床にミミズがのたくったような模様が書かれたところに行くと、身体が光だし、注文通りの容姿になっていた。身長が低いのはこの際眼をつぶろう。

で、受付のおば・・・お姉さんにどの世界に行くのか聞こうとしたら、「それでは、新たな人生をお楽しみくださいませ、」といって、話をする前に俺を転移させやがった！

次の瞬間浮遊感に包まれたかと思うと、落下していた、スチールドラゴンなんて眼じゃないくらいに怖い。

ラピュタから落とされる兵士ってこんな気持ちなのかなあ。

??? (主よ、早く空を飛ばんと地面に激突してまうぞ。)

俺「え、だっ誰だ!」

見回しても誰もいない、念話ってやつか?

確かに今のままじゃヴァイ。

手に二つの白い玉(ビー玉サイズ)を持ち、空を翔るイメージする。玉に「飛」と「翔」の字が浮かび上がり、俺は空を自在に飛べるようになった。

街明かりが見えたので、少し離れた神社に降り立つ事にした。

俺(さっきの声って誰だったんだろ?)

??? (我の事か、主よ)

どこからか声がする。

俺「ひょっとして、俺の神剣か? 名前は? 何処にいるんだ?」

??? 「我の名は、宵闇、永遠神剣第4位「宵闇」我は、主の影にいる」

俺「上位の神剣か、しかも影に潜むなんてすげえな、つと、とりあえず此処が何処なのか情報収集からはじめるか、これからよろしくな宵闇」

宵闇「うむ、我に用があるときは声をかけよ」

どうやら基本喋らないらしい、さてどうしようかな、街を見た感じ日本って感じだったが、異世界って事は戸籍もないしな、後所

持金0だけど転生してすぐに飢え死になんてごめんだぞ。

街に向かって歩き出そうとしたら、寒気が走った、とっさに横に跳ぶと、今まで俺がいた場所に小さなクレーターができていた。土煙が舞い、襲撃者の姿は確認できないが、背を向けて逃げるのはまずいという事はわかる。

土煙がおさまり、敵の姿が見えてきた。女の子だった。

・・・というかあの赤い髪にウサギのぬいぐるみ、ハンマーはどう見てもリリカルなのはヴィータじゃないか！ここリリな世界だよ。

どうやら無印はおわって、A、S 編のようだな襲ってくるって事は、蒐集をしないと主が危険という事か。

悲しいのはいやだね、やっぱり。

・・・この世界に来たのはきつと神のあてずっぽうなんだろうけど、とりあえずこの世界の悲劇をできる範囲で防ぐ事にしますか。

第2話 襲撃とノーロプバンジーは突然に（後書き）

主人公の面前、現在、友人Aと話合っています。

第3話ヴィータさん、あなたの行動と言動は状況を悪化させる要因だと思います

ドアノブ「主人公の名前やっと決まりました、昔やっていたゲームの主人公の故郷の名前を苗字に、名前は以前読んでいた吸血鬼物の漫画の主人公の名前を少し変えています」

友人A「随分遅かったな、後男で白衛っていいか？」

ドアノブ「読んでいた漫画の主人公が男でクロエだったので、黒が
ありなら白もありなのではないかと思ったんです」

友人A「では本編をどうぞ」

ドアノブ「なんかコメントなりリアクションなりしてよ、ちょっと」

第3話 ヴィータさん、あなたの行動と言動は状況を悪化させる要因だと思います

S I D E ヴィータ

はやてを助けるためにリンカーコアの蒐集を開始したのはいいけど、たいしてページが稼げない。相手の魔力が少なすぎる。早くはやてを助けたいのに！

蒐集活動が順調とは言えず、あたしはイライラしていた。

少なくとも多少は足しになれば良いと思い街で獲物を探していると、少し離れたところにある神社に、デカイ魔力を感じた。

大物がいると思い、様子を見に行くと、銀髪の女（だと思う）が1人でぶつぶつ喋ってた、気味の悪いヤツ。

あたしの気配に気づいてないところを見ると、魔力が大きいだけの素人か一般人ってとこかな？

とにかくあたしは、そいつのリンカーコアを蒐集しようと、攻撃を仕掛けた。

一発入れば片がつく、そう思ったが、女は素早く攻撃をよけた、ただの素人じゃないのか、それとも偶然なのか？

わかんねえけど、女の意を決した表情を見て油断してはいけないと思い、相手の出方を伺う事にした。

S I D E ヴィータ E N D

・・・攻めてこないのか？ヴィータの性格からして突っ込んでくると思ってたんだが、今なら話し合いに持ち込めるかな？

しかし、こっちは相手を知っていても、相手はこっちを知らないわけで、いきなり貴方たちの行動では主は救われませんなんて言えないし、まずは目的から聞こうかな、どうかなのは時みたいに関答無用で襲ってきませんように。

とりあえず、両手を挙げて降伏のサイン。

俺「なあ、いったい何の目的で俺を攻撃したんだ？、金なら持っていないぞ」

ヴィータ「（俺？）そんなもん欲しくねえよ、お前のリンカーコアをよこせ！」

再び襲い掛かってきた。戦わずに話すという選択肢は無いのか？攻撃を避けながら何とか話し合いに持ち込んでみよう。

俺「よし、わかった、渡すから話を・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・そういえば俺にリンカーコアってあんのか？

神様に頼んだ願いの中には、リリカルなのは関連のものは無かった。⇒ひょっとして無い？どうしよう。差し出す代わりに話を聞いてもらおうと思ってたのに、最初の段階で頓挫してしまうのか！？

ヴィータ「おい、よこす気があるなら「ごめん、自分にリンカーコアあるのかわかんない」・・・・・・・・・・はあっ！？てめえ、ふざけたこと言ってるじゃねえぞ！」

やっぱり怒りますよねえ、どうしよう。

あーでもない、こーでもないと考えていると、いつの間にか気配が2人、少し離れたところに1人。

ザフィーラ「無事のようにだな、ヴィータ」

シグナム「この街にこれだけの魔力を持つ者がいるとは思わなかった。」

ヴィータ「それがさ、こいつ自分にリンカーコアがあるかどうかわからないなんて言うんだけど」

シグナム「……（シャマル、確かに奴からはリンカーコアの反応が感じられん）」

シャマル（リンカーコアが無い！？無いのにここまで高い魔力を持つなんて一体……）

ザフィーラ「貴様、何者だ、何の目的があつてこの街へ訪れた」

俺「俺の名m「♪」」っと失礼（誰だこんな時に）」

液晶画面を見るとMr. GODと表示されていた。

あの人はギャグを狙ってんのか、人をおちよくりたいのかどっちなんだろうか、とりあえず出よう。

俺「もしもし、なんか用？立て込んでんだけど」

Mr. GOD「言い忘れておったが、一度死んで転生した魂は生前の名を名乗る事は禁止されている。「ちよっ！」文句なら法律を作った歴代の神に言え、とにかく自分で好きな名前を名乗れ、以上だ」

ブツツ ツー、ツー、ツー

！言いたい事だけ言ってきりやがった。

今まさに名乗ろうとしていたのに名乗れないなんてどうすんのよ？好きな名前にすればいい？……俺さあ、RPGゲームで主人公の名前にデフォルトがない場合カッコいい名前にしようとして1時間

以上悩むタイプなのよ。すぐに思いつけなんて不可能。
PULLL! む、今度はメールか、差出人は「Dieu」・・・
なんでフランス語？

内容 ⇒ 思いつかないなら次から選べ。

1、間桐臓硯、2、ハサン・ザッバーハ3、言峰綺礼

全部、悪役の名前じゃねえかあああ！ PULLL! 件名 訂正

内容 ⇒ すまん間違えた、改めて次から選べ。

1、月野 ウサギ 2、チャチャ 3、則巻アラレ

名前のネタが古い上にどれもギャグキャラもいいところじゃねーか！
それとも俺はセーラー服着て敵と戦えばいいのか！？

とりあえず携帯を握りつぶして、ヴォルケنزのほうを見る、・・・
・すいません、その冷たい視線をこっちに向けないでくださいませ。

ザフィーラ「・・・名は」

ヴィータ「無いんじゃ「あるよ！」だったら早く言え！」

俺「し、白衛、刃清白衛だよ」

とっさに昔好きだったキャラクターの名前を拝借した。ああ、ネーミングセンスゼロな自分が憎い。

シグナム「何の目的でこの街に来た？」

白衛「特に目的は無いよ、ただ気の向くままに旅してるんだ、路銀

が尽きたからしばらくこの街に居ると思う、こっちに危害を加えない限り何もしないよ」

さつき始まったばかりの旅だけだね。

それに、この世界に来たのも（多分）神様のあてずっぽうだろうし、お金ないのも本当だし、争うつもりも無い。

ヴィータ「信用できるか！ツツ！？なんだ！？」

シグナム「ヴィータ、つむ！」

シャマル「左腕が・・・あれはバリアジャケット？」

また飛び出してきたヴィータを左腕でつかむ、つかむ瞬間に左腕のみケルベルス化した。

ヴィータ「このっ、放せ！！」

白衛「会話が進まないじゃないか、リンカーコアが目当てなのはわかったけど、集めて如何すんの？さつきも言ったけど争うつもりは無いし、目的の内容によっては協力するよ？」

何か喚いているヴィータを無視して、シグナム達に話しかける、。

シグナム「目的は言えん、協力も必要ない」

簡潔で分かりやすいお返事ありがとうございます。
後なんでこっちにデバイスを向けるの？

シグナム「敵でも味方でもない、不確定要素は取り除くべきだ」

・・・・そうきましたか、こりゃあ話し合いは無理っぽいな、ていうか魔王なのはといい、この人たちといい、何故肉体言語によるお話をするのか・・・。

ラブ&ピースという言葉が無いのだろうか、とりあえず、今は逃げよう、戦おうにもまだ身体にも能力にも慣れてない。

白衛「そっちの都合であの世行きはごめんだね、今度はちゃんと話し合おうね」

シグナム「っ！待て」

シャマル「キャッ！

文殊で閃光をおこし、眼を眩ませている間に、身体を霧状にして俺はその場から離れた。

第3話 ヴィータさん、あなたの行動と言動は状況を悪化させる要因だと思います

ドアノブ「今後の展開を全く考えてないっす」

白衛「少しは計画的に書けよ」

ドアノブ「いろいろ考えたんだけどさ、どうしても君が悲しき結末になってしまうんだよ」

白衛「……あんたの中で俺はいたいという扱いなのか聞かせろ」

ドアノブ「あっ！ご意見、ご感想をお待ちしております」

白衛「しかとすんなあああ！」

第4話 身体と能力と男の娘（前書き）

ドアノブ 「戦闘描写を練習して書いているのですが、難しいです。おまけに高町家、ハラオウン家、八神家のどれに居候させるか迷っています」

白衛 「居候させることは確定してんのか」

友人A 「働いていないからヒモともいうな」

白衛 「辛口なコメントありがとうおよ！」

第4話 身体と能力と男の娘

あれから数日たった、ハッキリ言って追跡されているのでは・・・と不安でたまらない日々だった、むこうにはザフィーラ（犬）がいるし、匂いで追われてたりしないかな？。

とりあえず、隠れ家として、海鳴市の廃ビルに住み着き、海や隣町のほうで能力の練習をしている。

ありがたいことに吸血鬼の身体になって、植物から養分を吸収できるようになったので腹は空かなかった、偶に人間らしい食事が恋しくなるけど。

白衛「問題があるとすれば・・・」

自分の身体を見る、服はボロボロ、髪や肌は吸血鬼の所為か荒れることは無いが汗臭さが鼻を突く。深夜に公園の噴水で（洗剤無しで）の洗濯＆水浴びをするにも限界があるか。

ホームレス生活が板についてきたなあ、しかし、服を買おうにも金持っていないしどうしよう。

白衛「『これができたら百万円!』とかいうイベントやっくらんかね?」

どんな仕事をしようにも、戸籍も身分証も無く、この容姿ではまずアウトをくらうだろうし、誰だよ!こんな姿にしたのは!・・・俺が頼んだのか。

???「ねえ、君い、そんな格好でどうしたの?」

「金無いなら俺たちが奢ってやるから、向こうで遊ばねえ？」

目の前にいかにも俺たちチンピラですと言わんばかりの二人組みがいた。

ひょっとして今のセリフは俺にむけて言ったんだろうか？

二人はニヤニヤと笑いながら、俺の全身を舐め回すように見ている。

なるほど、ナンパされる女の気持ちがよくわかる、これは不快以外のなにものでもない。

チンピラ1「ほら、早く行こうぜ」

こいつらの脳内では、俺がOKしたことになったらしい。

白衛「何時遊ぶことを承諾したんだよ、あんたらに付き合うだけ時間の無駄だ、まず女に声をかけるならそのチャライ格好と態度を直して出直せ」

チンピラ2「んだとガキィ！」

チンピラ1「下手に出たせいで調子付いちまったのかなあ、いいから黙ってついてくりゃいいんだよ！」

「君達の方こそ、いい加減にしたのかな？その娘は行かないといっているんだから」

チンピラ1が強引に腕を掴もうとしたとき、チンピラーズの背後から声がした。

・・・買い物袋を片手に、翠屋の黒いエプロンをつけた男性がそこ

にいた。

??? 「子供に乱暴するのは感心しないな、街中で君たちに向けられる視線に気づいているかい？」

周囲の人間が汚物でも見るような、または迷惑だから失せろといわんばかりの視線を送っていた。

チンピラ1 「うつ!・・・ツチ行くぞ」

チンピラ2 「まっ待てよ!」

??? 「大丈夫かい？」

男性は微笑みながら俺を見下ろしている、翠屋にこんな人いたっけ？

??? 「ああ、ごめんね、突然で驚いてるよね、俺は高町士郎、この近くの喫茶店のマスターをしてるんだ、君の名前は？」

・・・魔王のお父上でした、この世界の人間って外見が実年齢と一致しない人多くね？

あつ俺もいつかはそうなるのか、吸血鬼だし、いつか、見た目は子供、中身は青年（心はいつでも若いまま）になるんだろうなあ。

白衛 「あ、ありがとうございます、刃清白衛って言います」

士郎 「白衛ちゃんだね、服がかなりボロボロだけど何かあったのかい？家に戻って着替えたほうが良いよ？」

白衛 「いえ、家はありません」

廃ビル生活してるし、お金のないし、

士郎「え！・・・君のご両親は？食事はどうしてるの？」

白衛「え、えええと、魚を取ったり、野草を食べたりしてるんですが、両親はもういません」

嘘はついてないな、魚も食べてたし、植物の養分吸ってたし、両親は元の世界にしかないし。

しかし、話していて自分の発言がNGに思えてきてならない、こんな事言えば十中八九・・・

士郎「よし！とりあえず家において、何か暖かいものを作ってあげるよ」

こうなりましたか・・・既に手をつかまれて、断ろうにも、なんとかとても張り切った顔をしている士郎さんを見ると何もいえなかった。

士郎SIDE

白衛「え、えええと、魚を取ったり、野草を食べたりしてるんですが、両親はもういません」

そう聞いたときは耳を疑った。確かに世界中に親を亡くし、一人で生きるしかない子供もいるだろう、しかし、こんなに身近なところにいるとは思わなかった。

日本人離れた容姿で名前が漢字ということはハーフの類だろうか？家の美由希より少し低い身長、なのはよりも2・3歳上といったところだろう。

とにかく、ここで「さようなら」という言葉を出す気にはなれなかった。

士郎「ここが翠屋だよ、さあ、入って」

桃子「あら、あなたどうしたの？その子は？」

士郎「実はさっき・・・」

ボロボロの服のままでは可哀想なので、白衛ちゃんには更衣室で余っている翠屋の制服に着替えさせている、その間に街での出来事、白衛ちゃんの境遇を話した。できれば、後でみんなに、家に住まわせてあげられないか話さないとな。

そう考えていると、長男の恭也が赤い顔をしてこっちに詰め寄ってきた。

いったい何があった？

恭也「父さん、知らない女の子が更衣室で着替えているんだが？バイトを雇ったのなら事前に言ってくれないか？」

あああ、そういうことか。肩に優しく手を置いてやる。

士郎「恭也、安心しろ、ちゃんと警察まで一緒にいってやるから」

恭也「何をどう安心しろっていうんだよ！」

翠屋に恭也の絶望の声が響いた。

第4話 身体と能力と男の娘（後書き）

ドアノブ「まだ、高町家に居候と決まったわけではぬわーい！」

白衛「翠屋まで来たのにUターンして他に行くのかよ!?!」

ドアノブ「悩んでるんだからしょうがないじゃん」

友人A「だめだこいつ、早く何とかしないと」

第5話 ヒロインとの邂逅は悲鳴と共に（前書き）

白衛「5話目でやっとなのはが出てきたな」

ドアノブ「いやぁー、やっと出せた」

なのは「それにしても扱いが酷いの・・・」

友人A「名前が未だに表示されない俺よりマシだろ」

ドアノブ 白衛 なのは「」「かわいそうな奴（人なの）だなあ」
「」

友人A「哀れみの目で俺を見るなあ！」

第5話 ヒロインとの邂逅は悲鳴と共に

どうしたんだろう？更衣室で着替えていると扉が開いたので顔だけ向けると、驚いた顔で硬直している（士郎さんに似てるし多分）恭也がいた。

恭也「す、すまない！」

と言って出て行った。男同士なのにどうしたんだ？着替え終えて出ようとしたら・・・「何をどう安心しろっていうんだよ！」と聞こえた。一体何揉めてんだ？と思い顔を出すと。

士郎「お、似合ってるじゃないか、さっきは息子が覗きを働いたみたいですまなかったなね。厳しく叱っておいたから」

恭也「あれを叱るというのは疑問が湧くんだけだな、父さん？つとさっきはすまない、更衣室はいつも家族くらいしか使わないし、妹たちも今の時間居ないからノックもせずに入ってしまったんだ」

何で顔を赤くしてんのかなこの人、恋人居るのに同性愛にでも走る気か？

白衛「気にしてませんよ、鍵を掛けなかったこちらにも非はありますし」

恭也「そういつてくれると助かる」

白衛「自己紹介がまだでしたね、刃清白衛といいます」

恭也「高町恭也だ、よろしく」

士郎「自己紹介は済ませたかい？今、妻の桃子がおいしいもの作っているから少し待ってくれ、恭也は奥の客席まで白衛ちゃんを案内してあげてくれ」

奥の客席に座り、食事が来るのを待つ。ああ人間らしい食事するのって何日ぶりだろ？

できればシュークリームも食べたいなんて考えていると近くの席から・・・

女子学生1「ねえ、聞いた？例の枯葉剤事件、隣町にも被害が出たらしいよ」

女子学生2「ああ、聞いた聞いた、公園の花も木も植物が一夜にして枯れたっていう事件でしょ？薬剤の形跡は無かったらしいけど」

白衛「・・・・・・・・」↑犯人

うん、気のせいだ、何も聞こえない。よし何一つわからない。

女子学生3「愉快犯なのかどうか知らないけど、犯人の人間性ってきつと最悪なんだろうねえ」

グサツ！

女子学生1「絶対女にもてないキモメンの仕業だって」

ブチッ！

女子学生2「今頃、自分の起こした事件テレビで見て、悦に浸ってんじゃないの？」

ヒクヒクッ！

・・・最近の若者の言葉の乱れはひどいな、俺の心のライフは限りなくゼロに近いぜ。

最初は加減がわからず公園の植物全部から養分吸っちゃったんだよね。

多分戻すこともできたんだけど、公園の惨状に気づいて誰かが通報したのパトカーのサイレンが聞こえてきた、公園には自分以外は数名のカップルどもだけ、独りの俺が一番疑われると思い逃げたっす。顔見られてないよな？

士郎「どうしたんだい？顔面蒼白だけど、ひょっとして具合悪いのかい？」

白衛「だ、大丈夫です、お気になさらず」

士郎「そうかい？とりあえず、胃に優しいものから持ってきたからゆっくり食べると良いよ、デザートにシュークリームもあるからね」

やさしいなあ、こういう人が神だの政治家だのになれば世界はきっと平和になると思うな、うん、美味しい。

（食事中につきしばらくお待ちください）

白衛「ご馳走様でした」

桃子「はあい、お粗末さま、すごい笑顔で食べてたわねえ」

ちゃんとした食事は久しぶりだったんです、しかし、ただ食べて帰るなんてマネができようか？ いや、できない！（反語）

白衛「あの、お礼に何かお手伝いさせてもらえないでしょうか？」

そう言う桃子さんの目が光ったような気がした。

桃子「あらあゝ、それじゃあ少しお店で働いてみない？ ちゃんと給料も出すし、食事が出るわよ？ 大丈夫、接客とレジ打ちだけだから」

なんだろう、なぜか身体がここから逃げろといっている。嫌な汗が止まらない。

桃子「あっ！ そうそう、最近制服を変えようと思って、いろいろ作ってたのよ、試験期間として着てね♪」

取り出したのはメイド服だった。それもスカートが膝くらいまでしかない。

ああ、そうか、恭也さんが顔を赤くしていた理由がやっとわかった。

白衛「あ、あの俺はおT「ああ！ ここは、逆の発想で黒のスーツとというのも有りね！」・・・し、士郎さん恭也さんってああ！」

助けを求めようとしたら客の接客に（逃げて）行った・・・覚悟を決めるしかないのか。

美由希「お母さん、とりあえず、今日は家に泊まってもらって返事は明日聞けばいいんじゃないかな？」

士郎「そ、そうだな、とりあえず、今日は家に泊まってくといいい、遠慮はいらないよ、美由紀、恭也、今日の手伝いはいいから、白衛ちゃんを家に案内してあげなさい」

恭也「わかったよ」

美由紀「お父さんから事情は聞いてるよ、着いたらまずお風呂に入るといいよ」

・・・まだ泊まるのも何とも言っていないのに、この方達の中ではすでに決定事項のようだ。

悪意か善意かの違いだけで貴方たちが昼間のチンピラズに思えてきました。

まあ、御礼もしてないし、まともな食事に取りつけるし給料も出るんだからしばらくはご厄介になろう。

美由希「ここが、私達の家だよ。」

大きな家だなあ、離れに道場あるし、池あるし。

白衛「お邪魔します、今日一日ご厄介になります」

美由希「あはは、そんなにかしこまらなくても良いよ、あっお風呂ここね、バスタオルは扉の近くにあるからね、シャンプーやボディソープは置いてあるのを使ってね」

白衛「ありがとうございます、では入りますので」

美由希「ごゆっくり」

美由希SIDE

美由希「ごゆっくり」

そう言って、私はいったん自室に戻り動きやすい服に着替えて道場に向かった。

今日も恭ちゃんとの稽古が始まる。

なのは「ただいま」

なのはが帰ってきた、後で今日は泊まる人が居るって伝えないと。私は後で、今伝えておくべきだったと後悔することになる。

美由希SIDE END

なのはSIDE

なのは「ただいま」

今日は体育の授業がありました、運動神経があまりよくない私にはきつい授業でした。

ちよっと早いけど、お風呂に入ろつと。

・・・ん？誰か入ってる美由希お姉ちゃんかな？あれえ、翠屋の制服にスポーツパンツ？美由希お姉ちゃんこんなの持ってたっけ？まあ、いいや早く入る。

ガチャ

なのは「お姉ちゃん、ただいま」

??? 「え？」

なのは「ふえ!？」

知らない人がシャワーを浴びてました。足の膝裏くらいまで伸びた淡く緑がかった銀髪に蒼い綺麗な瞳の人でした。

なのは（うわぁー！綺麗な人）

そう思ったのですが違和感に気づきました。全体的に身体はほっそりしていても女性らしい体つきなのに、胸が全く膨らんでいませんでした、小さいのではなく元々無いといった感じで。そして、タオルで腰のほうだけを隠して硬直しているの……つ、つまりこの人。

なのは「……………」

白衛「……………」

なのは「き……きゃあああああああああああああ！！

気付いたら私は、悲鳴を上げていました。

第5話 ヒロインとの邂逅は悲鳴と共に（後書き）

白衛「結局、高町家に居候することに落ち着いたのか」

ドアノブ「いや、男であることがばれて『もう私ここに居ることができません』とか言って他の所に行かせようかと……」

白衛「鶴の恩返しかよ!？」

ドアノブ「上の言葉だけで見るとむしろ、夫の暴力に耐えかねて実家に帰る奥さんみたい感じがするな……まあ鶴の場合、羽も無ければ金に縁も無い鶴だが……」

白衛「お前、自己紹介の時の礼儀正しさ何処に行ったよ!」

ドアノブ「読者様と貴様を同格に扱えとでも？身の程を知れ蟻んこお!」

友人A「……どうでもいいけど、いいかげん俺の名前表示しろよ」

第6話 悲鳴後（前書き）

白衛「今回、サブタイトルになんの捻りも無いな」

ドアノブ「すいません、思いつかなかったんです」

友人A「内容も面白くも無ければ、シリアスでもないしよ、グダグダすぎねえ？」

ドアノブ「お前達、俺のこと嫌いだろ!？」

2人「なにをいまさら」

第6話 悲鳴後

高町家 リビング

恭也「何故、男だと最初に言わなかった!？」

白衛「言う暇も与えてくれなかったのはそっちでしょ!？」

美由希「ふ、二人とも落ち着いてよ!」

あの後なのはの悲鳴を聞きつけて二人が風呂場に入ってきた。そのとき俺の身体を見て、やっと男だと判ったらしくかなり驚いていた。ちなみになのはは自室で寝込んでいる。初めて男の裸体を見た所為か少し熱っばいらしい。

白衛「って言うか、恭也さんは、更衣室で見たから知っているでしょ?」

恭也「ズボンは既に穿いていたし、上半身は髪で隠れていて男と判別することなんて無理だ!」

桃子「まあまあ、二人とも落ち着きなさい、ちゃんと白衛ちゃんの話を書かなかった私たちも悪いんだから」

・・・今思えばあなたが一番話を聞かなかったように思うんですけど? 後、男だとわかったのに君ではなくちゃん付けのままですか?

桃子「この話はこれでお終い! もうすぐ晩御飯もできるから、恭也は手伝って、白衛ちゃんは美由希と一緒になのはの様子を見てきて

「？」

背中を押されて、美由希さんと一緒に廊下に追いやられた。後ろで恭也さんが何か文句を言っているが、気にしても仕方ないと思い、美由紀さんの後に続いた。

美由希「なんか、いろいろとごめんね」

白衛「いえ、こっちもきちんと説明していれば・・・」

美由希「あはは、でもほんとに女の子にしか見えないよねえ、髪はなんで切らないの？短ければ多少はマシになるのに」

白衛「その、耳の後ろでハサミが音を立てるのが嫌いで・・・」

こうは言ったが実は少し違う、ホームレス生活時、さすがに行動するのにウザったかったので髪を肩の辺りまで切ったことがあるのだが、次の日には元の長さまで伸びていたのだ。

何度切っても結果は変わらなかったので、諦めて、紐で束ねたりしている。

まさか切っても明日には元通りになっているとは言えないしこの理由で通そう。

美由希「っと、ここがなのはの部屋だよ」

話しながら歩いているとなのはの部屋の前まで来た。

コンコン

美由希「なのは、大丈夫？御飯食べれそう？」

なのは SIDE

顔が熱くて仕方が無い、眼を閉じててもあの人の顔と身体が浮かんできてもっとに顔が熱くなるの。

なのは（このままじゃ、熱くてどうにかなりそうだろう）

レイジングハート《マスター》

なのは「何？レイジングハート」

レイジングハート《マスターが風呂場で遭遇した人物・・・気を付けたほうが良いかもしれません》

なのは「ふえ、どうして？」

レイジングハート《抑えているようですが、魔力反応が感じられました。恐らく彼も魔導師かそれらに類をなすものでしょう》

なのは「でも、悪い人には見えなかったよ？」

レイジングハート《確かに、現段階で彼を敵対者とみなすのは早計ですが、彼からは、魔力以外の何らかの力も感じます、また私は彼が人間には思えないのです》

なのは「アルフさんみたいな使い魔ってこと？」

レイジングハート《わかりません、しかし、彼から感じられた魔力は人間のものとは思えませんでした》

なのは「うーん、とりあえずお話してみる！」

レイジングハート《正体を知る方法は他に無さそうですね、しかし、十分注意なさってください、マスター》

なのは「うん！」

コンコン

美由希「なのは、大丈夫？ 御飯食べれそう？」

なのは「はい、今行くよ」

なのはSIDE END

・・・吸血鬼の身体って本当に規格外だよな、1キロ先の人間の顔だって判別つくし、数百メートル離れたところに居る人の会話も聞こえる。つーわけで、なのはとデバイスの会話聞こえてしまいました。お話ってバトルの方じゃないよな？

ガチャッ

なのは「あっ！」

白衛「うっ・・・」

微妙に気まずい空気が流れる。美由希さん、ヘルプミープリーズ？

美由希「えーと、なのは、この人は今日家に泊まることになった、刃清白衛さんだよ。・・・もう知ってると・・・思う・・・けど」

さすがにフォローできないみたいで語尾が段々と小さくなっていく。

なのは「た、高町なのはです。ええと、その・・・／＼／＼／

・・・とりあえず、バトルの心配は無さそうだ。
少しかがんで目線を合わせて謝罪する。

白衛「よろしく、さっきはごめんな、（・・・君たちに危害を加えるようなことをしに来たんじゃないから安心してくれ）」

謝罪と小声で誤解（この場合は警戒か？）を解いておこ

なのは「っ！！ い、いえこちらこそ、すいませんでした。あ、あ
の後でお話ませんか？」

白衛「うん、良いよ、まあ、今は晩御飯にしようか、さ、行こ？」

なのは「はい！」

まだ顔が若干赤いけど、笑顔で答えてくれたか、・・・なのはと
行動していれば近いうちにヴォルケンリッター達と接触することになる。

なのはの味方もしたいが、守護騎士たちの行動も何とかしたい・・・
あっちを立てればこっちが立たず何とかならんもんかねえ・・・願
いの内容ももう少し考えれば良かったかもな

白衛（！！　もしかしたら何とかなるかもしれない、あいつと能力次第では！）

なのは「白衛さくん、どうしたんですか？」

・・・とりあえず今は飯にしよう♪

第6話 悲鳴後（後書き）

白衛「思ったんだが、俺、2話でヴィータと交戦して以来、戦っていないような？」

ドアノブ「戦ってないねえ、しかも、2話は戦いと呼んで良いものかどうか・・・」

白衛「だったら、さっさと戦闘シーン書けよ！」

ドアノブ「物語にも順序があるでしょ！べ、別に下手だから先延ばしにしているわけじゃないんだからね！」

友人A「気色悪いから、ツンデレ風味に言うのやめろ！！」

第7話 世界の中心で愛は叫ばないが、翠屋の中でナンパな男は死んじまえと叫

白衛「なんで、ラブストーリーとアクションもののネタをサブタイトルに使った？」

ドアノブ「死んじまえという言葉を書いたら急に数年前に見た映画を思い出したから」

友人A「思い付きにも程があるぞ、後しつこいようだが、俺の名前表示しろ！」

ドアノブ「本名出すのはどうかと思うし・・・」

友人A「じゃあペンネームとか考えろよ！一応ネタの提供とかしてんだから！」

第7話 世界の中心で愛は叫ばないが、翠屋の中でナンパな男は死んじまえと叫

3人でリビングに戻ると和解したと見たのか桃子さんと土郎さんが笑顔で手招きしてきた。

恭也さんが睨んできたのは言うに及ばず。

食事をしながら、海鳴の観光スポットや落ち着ける場所の話をした。その間、ずっと恭也さんが無言の圧力をかけてきたが・・・食事も終わり、庭で夜風を浴びているとなのはがレイジングハートを持ってやって来た。

なのは「白衛さん、聞きたいことがあります。」

夕食前のような緊張した様子は無い、ただ真直ぐにこっちを見つめている。

白衛「答えられる範囲でなら答えるよ」

なのは「白衛さんは、魔導師ですか？」

白衛「いや、俺は魔導師じゃない、確かに魔法によく似た力を使うけど、そう名乗っているわけじゃないし・・・」

なのは「海鳴には、何しに来たんですか？」

白衛「海鳴に来たのは本当にたまたまだよ。まあここに来ていくつか目的ができたけど」

八神はやてを救うという目的が、あとは生活費云々。

なのは「目的？」

白衛「ああ、だがこれ以上は言えない。なのはを信用しないわけじゃないけど、どこに耳があるかわからないからな」

なのは「わかりました、・・・あ！あと1つ白衛さんって人間じゃないんですか？」

・・・随分とストレートに来たな。まあ、ここではらすのは面白くない。

白衛「その答えは、いつか教えるよ、今はまだ秘密な」

そういつて、道場（俺の寝所）に入った。さすがに家の中に止めてもらうのは気が引けた。この時、家の中でも構わないという高町家の面々で、恭也さんが笑顔で俺の意見を尊重していたのが、複雑で印象的だった。シスコンも度を越すと病気の類に思えてくるよ。

俺は、壁の方、自分の影に向けて話しかけた。

白衛（宵闇、起きているか？聞きたいことがある）

宵闇《・・・何用だ、主よ》

白衛（お前の能力について教えてくれ、あとケルベルス化なんだが形態変化や他のアーミットにはなれないか？）

宵闇《・・・私の能力は、闇から闇への移動、影の立体化及び自立行動化、アーミットの形態変化などは、憶測ではあるが、主の能力を駆使すれば可能と判断する》

白衛（つまり、影を扉代わりにして別の場所に転移するということか？もう一つの方はよくわからないんだけど？）

宵闇《その解釈で問題ない、影の立体化はある一定の範囲内にある影を立体化させ、意のままに操る、自立行動化はその影に意志を与えること、また、主が自身の影に主の血を落とすと主の姿形を借りて我自身が行動可能となる》

・・・要するに、ネギま！のエヴァの移動魔法、メルヘヴンのシャドーマン（マニュアルとオート選択可）、あとは、烈火の炎の幻十郎の分身（実態ある上に中身は別人だけど）ってところか、そしてアーミットの問題はクリア。
よし！近々行動開始しよう。

白衛（宵闇、近日中にお前の力を借りると思うからよろしくな）

宵闇《主の望みのままに・・・》

白衛（それじゃあ宵闇、お休み）

宵闇《うむ・・・》

俺は今後のことを考えながら、眠りについた。

しかし、何故だろう、何か忘れている気がしてならない。このままではまずいと俺の身体が警告しているのに肝心の内容が思い出せない。

そして思い出せないまま、俺は夢の中へと旅立った。

翌日

……朝食を終えたあたりで桃子さんがやたらと笑顔なのに気がついた、そして思い出した、このままじゃメイド服着せられちゃう！

白衛「あ、あのう、俺男なんだから黒s「ああ！ごめんなさいね、そっちの方サイズが大き過ぎたから仕立て屋さんに直してもらってる最中なのよ♪」……」

昨日見せてもらった時は、ほぼ同じサイズだったと記憶しているのですが？

そして、表情が申し訳ないというよりも計画通り！といった顔に思えますよ奥さん？

あと他の高町家の皆さん？仕事だの学校だの言ってそそくさとリビングから立ち去るのはやめないか？

白衛「せ、せめてスカートの丈を長くできませんか？」

桃子「これが最長なのよ♪」

間髪いれずに答えるってことは、この言葉予想されていたのか？つまり八方塞、否応無しに覚悟を決めなくてはいけないようだ。

結局……

白衛「いらっしやいませ、ご注文はお決まりでしょうか？」

はい、着ました、着てしまいました、そのデブオタ、ここはメイド喫茶じゃねえ！御主人様なんて死んでも言うか！それに、撮影会を開いた覚えはねえ！カメラやケータイこっちに向けんな！

口コミで噂が広がり翠屋は例年に無い黒字をたった1日でたたき出した。もう全員ヘトヘトだ。

俺も体力的には全く問題ないんだけど、精神が死にそうだ。オタクやナンパな野郎は死んじまえと今なら大声で叫んでしまいたい。とりあえず、今日は終わりだ、売り上げに満足した桃子さんが給料に色をつけてくれたのが、多少メンタル面の回復に役立った。・・・工事現場の親方みたいと一瞬思ってしまったが口が裂けても言えない。

ちなみに、なのはがアリサとすずかを連れて翠屋に来了。2人とも俺を見て、顔を赤くしてじっと眺めている。が、なのはが自分は男だと説明すると

アリサ「アンタ、ほんとに男？生まれてくる性別間違えた？」

すずか「え、ええと、そういう趣味の人もあるって聞きますし、似合ってますよ？」

一方からは侮蔑を含んだ、もう一方からは哀れみを含んだ眼で見られた。

なに？俺が痛い人だと思われたのか？

白衛「断じて違ああう！」

説明するのに随分と時間が掛かった・・・。

桃子さん、笑顔でこっち見てないで説明してください。

第7話 世界の中心で愛は叫ばないが、翠屋の中でナンパな男は死んじまえと叫

ドアノブ「ペンネーム考えてみました」

友人A「おお！どんなものができた？」

ドアノブ「友（苗字）人A（名前）です」

友人A「考える気サラサラ無えだろ！？」

ドアノブ「それでは次回あたり本編に沿っていくつもりなので「シカトこいてんじゃねえ！表出ろコラァ！」よろしくお願いします」

第8話 覚醒召還！とも叫びたいがブーストオ！とも叫びたい（前書き）

ドアノブ「アーミットに変身するときの「覚醒召還」と叫ぶのも格好良いけど、Z－endの「ブースト」も格好いい！」

白衛「確かに変身するときどっちを叫ぼうか迷った」

ドアノブ「今回はいつもより短めです」

白衛「話をどこで区切るのかがわからなかったらしい」

第8話 覚醒召還！とも叫びたいがブーストォ！とも叫びたい

や・・・やつと終わった・・・今日のピークが。

恒例になった翠屋でのアルバイト、今日も今日とて同姓からナンパされ、カメラを向けられる日々・・・ああ、無情。

え？・・・男だと説明すれば良い？言っても信じてくれないし・・・

桃子「うーん、今度はチャイナドレスにしようかしら？それとも、方向性を変えて和服とか・・・」

桃子さん？翠屋は洋風喫茶ですよ？いつからコスプレ喫茶になったんですか？

っていうか、今なのはがヴィータに襲われている頃のはずだ。どういって抜け出そう？DBZの御飯のようにトイレって言うのはいいやだ。

桃子「あつ、白衛ちゃん、ピークも過ぎたし今日はあがっても良いわよ」

・・・今だけはあなたが女神に思えます。そう、今だけは。

急いで着替え（給料で買った服にね）、封鎖結界の近くまで行った。ちょうどフェイトが助けにきていた。

このままだと、仮面をつけた猫姉妹が横槍を入れるはずだ。なのはのリンカーコアを蒐集されるの後々面倒だ。

白衛「さてと、宵闇、いっちょ派手にやりますかあ」

宵闇《承知・・・》

白衛「・・・なんか、お前の口調を聞くと少し不安に思えてくるんだが？」

宵闇《実体化した際に主の性格をトレースするので問題は無い》

さいですか・・・では、Are you ready Guys?
俺は身体を霧状にして、結界の隙間を抜けていった。

フェイトSIDE

間に合ってよかった。デバイスは破損し、怪我しているけど、なのはを助けられた。

ユーノ「ごめん、なのは遅くなった」

ヴィータ「仲間か？」

フェイト「違う、友達だ、民間人への魔法攻は軽犯罪ではすまない行為だ」

ヴィータ「なんだテメー、管理局の魔導師か？」

相手がデバイスを構え、こちらも構える。

フェイト「時空管理局、嘱託魔導師、フェイト・テストロッサ、抵抗しなければ、弁護の機会が君たちにはある。同意するなら武装を解除して・・・」

ヴィータ「誰がするかっ！」「ガキイツ！」ッ！なんだてめえ！」

こっちにデバイスを打ち込もうとした相手を、いつの間に現れたの

か黒いバリアジャケット？ううん、黒い鎧に身を包んだ大剣を持った人が止めた。

フェイト SIDE END

結界を抜けたと同時に文殊とケルベルス化を併用、文殊には、「覚醒召還 フェンサー」と浮かび、ビルのガラスを見てみると、フェンサーの姿をした俺がいた。
どうやら成功したようだ。

ケルベルスは以前ヴィータと交戦した時に、特徴的な左腕を見せてしまったので、他のアーミットの姿になる必要があった。

「変身能力」ドッペルゲンガーはカロリーを大量に消費するから、カロリー切れした時が怖いしな。

他のアーミットになれて少し感動していると、ヴィータがフェイトに向かって殴りかかろうとしているのが目に映り、止めに入った。

ヴィータ「ッ！なんだてめえ！」

白衛「ここは退けよ、鉄槌の騎士、話がある」

ヴィータ「あたしには無え！「主の命がかかっているとしても？」なっ！」

俺の言葉に、ヴィータは射殺さんばかりに殺気を込めた視線をこっちに向ける

白衛「安心しろ、主に対して何もしていないしするつもりも無い、むしろお前たちにはメリットのある話だ」

ヴィータ「いきなり、現れて邪魔しに来た奴の言うことを信用するとも思ってるのか？」

白衛「信用するしないはそちらの自由だ、でもどうせなら安全で確

実性の高い方法を選びたいだろう？とりあえずここから離れるぞ、管理局が居ては話もできない」

ヴィータ「・・・いいぜ、ただし、くだらねえ話しかったり、あたしを騙したりしたら、てめえを殺す」

白衛「OKだ・・・では「待ってください」・・・なんだ？」

やっぱりこのまま行かせてはくれないか、フェイトがバルディッシュをこちらに向けている。

フェイト「その子は、時空管理局が捕縛します。また、貴方にも聴きたいことがありますので、武装を解除し、同行してください」

白衛「断る、俺は管理局が嫌いだ、自分のしている事が正義の行いだと信じて疑わない連中が嫌いだ、特に！」

なのはの後に向けて大剣「デュプレの刃」を放つ、障壁によって弾かれたが、なのはの背後に仮面をつけた男が立っていた。出やがったなコンニャロウ。

いきなり現れた男に驚いているなのはたちに言い放つ。

白衛「背後が疎かになって、足を引っ張りあう組織はな・・・」

第8話 覚醒召還！とも叫びたいがブーストォ！とも叫びたい（後書き）

白衛「そういえば、友さん（仮）はどこ行った？姿が見えないんだけど」

ドアノブ「拗ねて何処かに行った、今頃モロッコあたりかな？

白衛「なんで海外！？しかもその国を選択した理由は！？」

第9話 どんなマンガやアニメにも大抵1人か2人は殺しても死ななそうなサブ

ドアノブ 「まずはじめに、すいませんでした」

白衛 「お前アホだろう」

ドアノブ 「今までリリカルなのはの舞台、海鳴市を間違えて鳴海市と書いていました、シンドレッド様ご指摘ありがとうございます」

白衛 「馬鹿な作者で申し訳ありません」

ドアノブ 「つく！今回は否定できん！第1話〜8話までの誤字は確認しだい訂正します」 m () m

第9話 どんなマンガやアニメにも大抵1人か2人は殺しても死ななそうなサブ

仮面の男「貴様・・・何者だ？」

白衛「相手に尋ねる前にまず自分から名乗ったらどうだ？」

しばらく睨み合うと、埒が明かないと判断したのか、再びなのはに手を伸ばそうとする。

が、ユーノとフェイトに阻まれた。

フェイト「貴方は何者ですか？何故なのはに手を出したんですか？」

仮面の男「・・・」

白衛「相方に助けてもらおうって考えなら無理だぞ」

仮面の男「！！」

ズドン！！

何かがビルの中に突っ込んできた。それは、ズタボロになったもう一人の仮面の男だった。

仮面の男2「ぐっ！・・・くあ」

????「ちよろちよろと逃げ回るな、当てるのも、はずすのも難しくなるだろ」

ビルの横穴から出てきたのは黒い鎧に身を包み、二挺拳銃を構えた人物。顔の右半分に仮面をつけたクラフティ・ハンツマン（宵闇）だった。

仮面の男1「ッ！貴様あ！」

宵闇「仲間意識があるのは結構だが、「バァン！」・・・次に動いたら、その分厚い仮面の風通しをよくしてやるぞ？」

仮面の男たちもものは達も動けなかった。仮面スレスレを通過した威嚇射撃から、もし動けばこいつは躊躇無く当てると確信し、なのは達は自分が言われたわけではないのに恐怖が行動を縛っていた。

白衛（鉄槌の騎士、連中の注意が向こうに向いている、今のうち離脱しろ。一時間後にこの街のはずれにある神社で落ち合うぞ）

ヴィータ「・・・」

俺を信用するかしないか悩んでいるらしい、返答は無かったが、転移していった。

白衛（こっちもそろそろ退くか・・・）

宵闇（主よ、確認するが、我はこのまま高町家で主として過ごせば良いのか？）

白衛（ああ、管理局の眼をごまかしておきたい、しばらくは別行動だ。何かあったら連絡するし、何かあったら連絡してくれ、）
宵闇（承知した・・・）

俺たちは身体を霧にしてこの場を後にした。

アースラ SIDE

クロノ「エイミィ、どうだ？」

エイミィ「だめ、反応ロスト。おかしいよ、魔力反応は表示される

のにサーチャーを飛ばしたら霧で何も見えないし、霧が晴れたと思ったら何も無い上に反応も消えてるんだよ!？」

クロノ「僕達の知らない魔法を使用しているのか？それとも奴ら自身の能力なのか？」

エイミィ「仮面の男たちにも逃げられるし、完全に後手に待ったね」

クロノ「なのはを襲った奴も仮面の男たちもそうだが、あの鎧の二人組みを一番警戒したほうが良いのかもしれないな」

リンディ「とにかくなのはさんを医務室へ、治療が済み次第、事情聴取を開始します」

管理局員「了解！」

アースラ SIDE END

守護騎士 SIDE

シグナム「話がある・・・か」

ザフィーラ「シャル、どう思う？」

シャル「普通に考えれば、罠と見るのだけど・・・」

ヴィータの方に向き直り、確認する。

シャル「「はやてちゃんの命が掛かっている」・・・と言ってきたのよね？」

ヴィータ「ああ、まるで今のはやての状態も知っているみたいな口

ぶりだった、それに安全で確実な手段を取りたいだろうって」
ザフィーラ「ハツタリなのかどうか判断に迷うな・・・どうする？
シグナム」

3人の視線がシグナムに集まる、しばらく沈黙し、烈火の将は決断した。

シグナム「話を聞いてみよう、万が一のこともある、シャルとザフィーラは離れた位置でその男と周囲の警戒を頼む」

シャル「わかったわ」

ザフィーラ「了解した」

シグナム「では、行くぞ」

守護騎士 SIDE END

ふふふ・・・はははは、あーはっはは！

・・・やばい、テンションが異常にあがってる、まあ仕方が無いか。やっどだ、やっど翠屋のコスプレ地獄から抜け出せた！しばらく笑顔という仮面をつけることなく自由に行動できる。

さようなら、キモオタ&ナンパ男共、こんにちは、いらっしやいませ自由なる日々よ。

そして、宵闇よ、君の尊い犠牲は忘れない！ありがとう！そしてさようなら！

思わず、翠屋の方角に向かって敬礼する俺・・・止めよう、子供が指差してる・・・

さてと、約束の時間まで30分以上あるし、ゆっくり買い食いでもしながら行きますか。

??? 「よお、また会ったなあ？カワイコちゃん」

??? 「俺たちって赤い糸で結ばれてんじゃね？ロマンスの神様今

日もありがとう」

・・・ロマンスの神様、私は貴方に対して何か怒りを買うようなことをしたのでしょうか？

いつかのチンピラーズがそこに居た。っていうかチンピラがそんなセリフ吐くな気色悪いわ！

チンピラ1「そんなに熱く見つめんなよお、照れるじゃねえか」

どうやら俺の蔑んだ視線を熱く見つめていると勘違いしているらしい、悪いことは言わんから眼科と精神科に行け。

チンピラ2「そうだぜえ、新築の家も、式だってまだなんだから」

よし、お前は脳外科に行つて来い、つつーかせつかくの自由時間をこいつ等のために消費するなんて勿体無さ過ぎるな。
溜息をつき、チンピラーズに両手をかざす。

チンピラ2「そーんな桃色吐息まで出しちゃってえ」

チンピラ1「あ、あれ？俺ら宙に浮いてねえ？」

チンピラ2「なーに言ってるんだよ、んなことあるわ・・・け」

特殊磁界反発【アンチマグネティックワールド】チンピラーズ

チンピラーズ「「ぎゃあああああああ！！！」」

（結構深い）川のある方向に飛んでいった

白衛「・・・また遭遇するのも嫌だし、まっすぐ神社に向かおうつと」

その日、海鳴市で悲鳴を上げるピーター○ン2人の目撃情報が多数報告されたらしい。

第9話 どんなマンガやアニメにも大抵1人か2人は殺しても死ななそうなサブ

ドアノブ 「次回は守護騎士たちとの会話、会話になるのか？それとも戦闘という名の会話になるのか！？」

白衛 「リリカルなのはって本当にアグレッシブなキャラ多すぎだな」

??? 「本当だよねえ」

ドアノブ 白衛 「……………このオカマさん誰？」

??? 「それはまた次回ねえ（？）」 ばちん！ ↑ウインクの音

2人 「キシヨツ！！」

第10話 俺っていいめっ子？それでもオブライイトに包んでますよ？（前書き）

ドアノブ「本日事故って右手を5針縫う事態になりました」

白衛「そんな状態でよくキーボード打てたな」

ドアノブ「左手は無事だし、右手は人差し指のみ使って何とかね・
・」

白衛「そんなわけで、もしかしたら、更新が少し遅めになるかもしれません」

ドアノブ「ご迷惑をおかけします」

第10話 俺っていいじめっ子？それでもオブラートに包んでますよ？

シグナム「・・・闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッター、烈火の将シグナムだ」

白衛「・・・話し合いの申し込みはしたが、決闘の申し込みをした覚えはないぞ？武器を下ろしてくれないか？」

フェンサーの姿で待っていたら、シグナムとヴィータの2人が来た。
・・・デバイス所持で。

ヴィータはギリギリセーフとしてもシグナムのは通報されるのでは？

シグナム「質問は2つ、貴様の目的、何故我らの状況を知っているのかだ、速やかに答えろ」

白衛「・・・一方的に話すのは会話といわないんじゃないか？時間を無駄にしたくないんだろうけど急ぐと小さな小石に躓いて、全てをおじゃんにしてしまうよ？」

一方的且つ高圧的な物言いに売り言葉を買い言葉で返す。

ヴィータ「なんだとお！」

白衛「お前たちの蒐集はこのままでは、主の死につながるだけだぞ？」

シグナム「ッ！どういふことだ！？我らの行いが主を死に追いやる行為だというのか！」

主の命を助ける為に行う蒐集、それは間違いだと、的外れどころか逆効果なのだと言われ、怒りをあらわにする。しかし、蒐集が完成したら闇の書のバグが主を死に追いやってしまう。

白衛「聞くが、鉄槌の騎士、お前は何か感じているんじゃないのか？何かを忘れていると・・・烈火の将、さっき自分のことを闇の書の守護騎士といったな？闇の書は本当に闇の書という名前なのか？歴代の主の顛末は？」

シグナム ヴィータ「・・・・・・・・」

2人は沈黙する。一方の沈黙は質問に対しての肯定を意味し、もう一方の沈黙は思いつく事が出来ないが故に反論できずに居た。

白衛「闇の書の本当の名は夜天の魔道書、主と共に旅をして様々な魔導師の技術を収集、研究するデバイスだ、だが、歴代の主がプログラムを弄って改悪、転生機能と無限再生機能を持った闇の書が誕生した」

説明を黙って聞いている2人、思い当たる節でもあるのか、時折ハッとした顔をする。

白衛「主以外の干渉を受け付けず、無理に外部操作を実行すると主を取り込んで、別の世界で白紙の状態で再生する、おまけに収集が完了した闇の書を使うには管制プログラムと防御プログラムの認証が必要なのに防御プログラムがバグっているせいで、認証されずに暴走する、歴代の主は言うまでも無く、暴走で命を落とすか、取り込まれるかだろう」

シグナム「で・・・では、主は、闇の書が完成しても・・・」
ヴィータ「嘘だ・・・そんなの嘘だああ！」

いきなり突きつけられた真実に慟哭する2人

・・・な、なんか俺がスッゴク悪いことしてるみたいに思えてきた。

白衛「お、おゝい、絶望に打ちひしがれているところ申し訳ないんだがな、もしかしたらだが、何とか出来r「本当か!？」・・・も

しかしたらだ、I Fだよ、O K？」

ものすごい睨まれてる。言葉の選択肢間違ったら俺殺されねえ？

白衛「正確な時間は知らないが、主が取り込まれてから暴走するまで多少時間の余裕があるはずだ、その間に主が管理者権限で、防御プログラムを切り離して吹き飛ばせばいい」

シグナム「そんなことが「出来なければ主もこの星も滅びる」・・・」

白衛「それと、主にも蒐集のことを話せ、気構えがあるのと無いのでは随分違う、突然難度の高いことを成功させろというよりも、事前に言っておいた方が良い」

ヴィータ「で、でも「お前たちが蒐集を開始した時点で、主にも責任が発生する、例え、自分たちの独断だと言おうが、周囲が、何より主がそれを認めないだろう、鉄槌の騎士、お前の主は家族が罰せられるのを黙っている主ではないはずだろ」・・・」

白衛「まあ、だからこそ、救いたいと俺も思う。管理局のとり方は問題を先延ばしにしているだけだからな、それに連中は一枚岩じゃない」

シグナム「・・・わかった、少なくとも、我々がこのまま蒐集を続けるよりは、希望がある」

白衛「同盟成立と捉えても？」

シグナム「ああ、かまわない」

白衛「それじゃ、そろそろ、こっちも名乗っておくか」
ヴィータ「そういやあ、名前聞いてねえ」「いや、名前なら名乗ったよ」・・・は？」

まあ、この姿で会ったのは初めてだから仕方ないか。

白衛「この姿の時はフェンサー、そして・・・」

変身をといて姿を見せる、2人の顔が驚愕の表情になる。

シグナム「っ！お前はっ！」

ヴィータ「あの時のコアなし！」

白衛「これからよろしくな」

ヴィータ「さっきと身長が合ってたねえ！」

白衛「突っ込むとこってソコ!？」

第10話 俺っていいじめっ子？それでもオブライトに包んでますよ？（後書き）

ドアノブ「結局君って誰？」

オカマ「ああら、数少ない友人を忘れるなんてひどいんじゃない？」

白衛「お前、こんな蒼天の拳に出てきそうな奴と知り合いなのか？」

ドアノブ「そもそも、男を辞めた友人なんて・・・！」

白衛「まさか・・・」

2人「友（仮）さん!？」

友（仮）「出来損ないのペンネームで呼ぶんじゃねえーわようゴラ
アアア！」

第11話 最初のキスは首筋に？（前書き）

ドアノブ 「右手の糸がまだ抜けない・・・」

白衛 「そのせいか、何度も文字を打ち間違えていたなあ」

友（仮） 「なんならあたしが代わりに執筆してあげましょうか？」

2人 「・・・遠慮します」

友（仮） 「なんでよう!？」

2人 「キモ怖いんだよ!!」

第11話 最初のキスは首筋に？

・・・現在の俺、守護騎士達（私服状態）と歩いている・・・両手首に縄をつけられて。

まるで時代劇の市中引き回しの刑に架けられてる気分だ。

白衛「あの、逃げたりしないから縄を解いてくれない？」

シグナム「貴様が逃げないという保証は無い、一応の保険だ。」

シャル「闇の書の侵食を抑えることが出来る、貴女を逃がすわけには行かないんです」

白衛「IFって言ったよね！？かもって言ったよね！？俺ちゃんともしかしたらって言ったよね！？なんで「確実に出来るよ」っていった感じになってんの！？」

話しの後、他の守護騎士たちと合流して、八神家に向かっている。

闇の書の侵食を止める事は出来ないが、侵食速度を緩和させる事なら出来るかもしれないと言ったらマース・ヒューズ准将に拉致られたウィンリィの如く連行された。

縄付きではやてに会うことになるなこのままじゃ・・・

ヴィータ「・・・お前え、鎧の時と雰囲気違うぞ？」

まだそこに拘りますかこの子は・・・っていうか睨むな。

白衛「正直言うとしんどかったよ、口調をぶっきらぼうにするのって難しいなあ」

ヴィータ「そっちが素かよ・・・」

結局、八神家の前まで縄は解かれることは無かった。

ドアを開けて中に入ると、車椅子に乗った少女、八神はやてがいた。

はやて「あ、みんなおかえり〜」

シヤマル「は、はやてちゃん、実はですね、え、えええと・・・」

はやて「どないしたんや？みんな表情が暗いで、後、後ろの居る人って誰や？」

やっぱり言いにくいか・・・

白衛「はじめまして、闇の書の主さん。俺は刃清白衛、魔法使い・・・ではないけど魔法に近いことが出来る者だよ」

はやて「（めっちゃ綺麗な人やなあ）あ、はい、八神はやてといいます。この子達は家の遠い親戚で・・・っ！」

はやての口に指をあてて黙らせる。

白衛「大体の状況は理解してる。そのことよりもまず君だよ・・・」
はやて「ウチですか？」

近くで探ってい見ると本当に魔力量が少ない、魔力の源のリンカーコアが未成熟の所為か魔力の質は上等だが、闇の書の侵食影響（身体機能の麻痺）によって、健康な身体機能も保てていない。

白衛「（・・・やってみますか）・・・いきなりで、ごめんな」
はやて「・・・へ!？」

謝罪するとはやての頭を左腕に抱き、右手で少し肩の服を引っ張り肌をだし、首筋に牙を突きたてた。

はやて「痛っ！・・・つくあ・・・はあ・・・ああ」

シグナム「主はやて！！」

ヴィータ「お前えっ！なんのつもりだ！」

シグナム達が叫ぶ、首から口を離し穴の開いた首筋を舐める。

ザフィーラ「貴様っ！ 罅るかぁ！！」

バゴン！！グキ！

ザフィーラに真横から殴られ壁まで吹き飛ぶ、おまけに首の骨まで折れた。

シャル「はやてちゃん！大丈夫ですか！？今治療を「待って、シヤマル」・・・はやてちゃん？」

はやて「身体が軽い・・・膝までやけど感覚がある。・・・少しやけど、病気が直つとる！」

ヴィータ「はやてっ！ 本当！？」

シグナム「でっ・・・では白衛がとった行動は病気の治療・・・？」

ザフィーラ「・・・」

ヴィータ「・・・壁にたたきつけられた上に、首が折れる音がしたぞ？」

白衛に視線が集まるが、本人は動かない。折れた首は90度直角に曲がっていて、所々出血している。・・・場に嫌な空気が流れる。

シャル「い、生きてるでしょうか？」

八神家「「「「・・・」」」」

ヴィータ「ど、どうすんだよ、ザフィーラ！？はやての病気が直り

かけたのに、治せる奴殺してどうすんだよ!？」

ザフィーラ「……」

はやて「し、白衛さん!? 白衛さ〜ん!!」

もはやパニック状態

白衛「い、いきなりすぎて反応できなかった・・・」

八神家「「「!?!」」」」

白衛が起き上がった。折れた首もまるでビデオの巻き戻しのようになり始めた。

あまりの光景に、八神家は啞然としている。

白衛「ごめんな、事前にどうするか伝えておけばよかったな」

シヤマル「い、いえそれよりも」

ヴィータ「なんで死んでねえんだよ!？」

白衛「あれ位じゃ死なないよ、多分、核ミサイルが直撃しても死なないんじゃないかな？」

はやて「え、ええと、白衛さんて人間と違うんですか？」

確かに、見た目人間だもんな。まあ、今後疑心暗鬼になられても困るし、教えておくか。

白衛「俺は、吸血鬼だよ、ほら」

口を開いて牙を見せる。おおお、驚いてる、（BLEACHの）夜一さん、あなたの気持ちが少しわかります。

シグナム「貴様が人外なのはわかったが、先程主に牙を向けたのは？」

白衛「そのセリフ何気に傷つくな、普通吸血鬼が同族を作る際、二つの方法がある。一つは人間と同じ、もう一つは、「人の血を吸う事だろう?」いや、自身の血を相手に飲ませることで同族が誕生する、血は酒やタバコと一緒に嗜好品に過ぎない」

吸血鬼の繁殖法とさっきの治療が結びつかないのかシャル以外は怪訝な顔をしている。

シャル「牙を通して、血を送り同族を生み出すということですよね?さっきのは血の代わりに魔力を流し込んだ・・・ということですか?」

白衛「その子の魔力に波長を合わせてね、主自身の魔力量では守護騎士達の存在を保つだけで精一杯、なら、他から魔力を補充すればいい」

シグナム「なんと・・・」

魔力の源のリンカーコアが無い別種の力と魔力を使う自分なら出来ると思ったが、出来て良かった。

疾風「ありがとうございます。でもまさか、吸血鬼に会う日が来るとは思わなかったなあ」

白衛「礼を言うのは早いよ、闇の書の侵食が消えたわけじゃないし、管理局も眼を光らせている。これからのことを話し合わない・・・」

はやて「はい、みんなも、ちゃんと話し聞かせてな?家族に隠し事は無しや」

シグナム「わかりました、主はやて」

はやて、「じゃあ、話の続きは御飯とお風呂が終わってからや！今から御飯作るから待っというてな？白衛さんの部屋用意しますから待っててください」

・・・何時から俺は、ここに泊まるといっただろうか？

断ろうとしたら、御礼がしたいといわれ、上目遣いでこっちを見られた。

すいませんことわれませんでした。

はやて「白衛さん、お風呂沸いてますからお先にお風呂どうぞ？」

白衛「いや、男の俺が最初に入るのはダメだろ、他の人が先で良いよ」

そう答えたら、家の中が静まり返った。聞こえるのは鍋が煮える音だけ。

シグナム「お、男だと！？」

シヤマル「見えませんよ！？」

ヴィータ「ありえねえだろ！？」

はやて「女の人にしか見えん・・・ってウチ首にキスされた／／／！？」

白衛「いや、あれはキスって言わないだろ！？」

なんか騒いでばかりだな八神家は・・・。

第11話 最初のキスは首筋に？（後書き）

白衛「高町家に居候したと思ったら、八神家に泊まらせやがった・・」

ドアノブ「おまけにはやての首筋にキスまでしたな」

白衛「てめえが話し作ってんだろ！それと首筋に噛み付くのがキスって言うのか！？」

友（仮）「でもほら、女の子の中には噛み癖のあるキャラって偶にいるじゃない？」

白衛「引っ込んでろ！出来損ないのア○パンマンみたいな面の癖に！！」

友（仮）「あんた、ひどくない？」

第12話 俺の能力って戦闘よりも悪戯むきだよね（前書き）

ドアノブ「感想が更新されました」

白衛「で、どうだった？」

ドアノブ「正直、その発想は無かった！」

白衛「お前、確かとらハ3プレイしたことあったよな？原作や設定も多少は知ってるよな？」

ドアノブ「すんませんしたー！」

白衛「馬鹿の一言の尽きるな・・・」

ドアノブ「これからすずかや他のキャラとの交流も考えます、Xephon様感想ありがとうございます。悪い点に關しましては、これから改善します、よろしければ、また御指摘等あればよろしくお願いします」

第12話 俺の能力って戦闘よりも悪戯むきだよ

シャル「し、仕方ないから、確かめましょう／＼／」

えーと、シャルさん？なんで顔を赤らめてにじり寄って来ますか？何が仕方ないのかもよくわからんし。

はやて「そ、そやねえ、ほら、白衛さんの服少し汚れてますし、洗濯するんで脱いでください？」

白衛「汚れてるって、買ったばかりで目立った汚れも無いんだが？」

シャル「ほら、ここシミになってますよ？ほつれもあるかもしれないし、さ、早く！」

・・・怖い、なんでこんなに恐怖を感じるんだ？

シグナムもヴィータも男かどうか興味があるのかこっちをチラチラと見てくるし、ザフィーラは我関せずって感じで寝てるし。

八神家ってこんなに怖かったけ？もっとアットホームチックな環境じゃなかったけ？

白衛「と、とにかく、俺は真正正銘男だか」その容姿で言っても説得力の欠片ありませんよ！」ら、・・・」

シャルさん、顔近すぎ怖すぎです。

白衛「き、着替えようにもこれ以外に服は持ってきてないし」シャル「身長も近いし、私のを貸してあげますよ♪」

・・・翠屋だ、ここは翠屋と同じ感じがする！

白衛「ザファイラ！助けてくれ！シグナムも主と仲間の愚行を止めろよ！」

ザファイラ「・・・無理だ」

シグナム「ま、まあ、今後行動を共にするのだし、少しは互いの距離を近くする必要があると思うぞ？」

白衛「ヘエエルプ！アイ ニイド ヨオア ヘエエルプ！！」

(I need your help)

十数分の格闘の末、上半身がはだけ、男だと確認できたことを主張したら、渋々（なんですよ？）と引き下がっていった。
良かった、桃子さんよりは良識あるやこの人達。

白衛「で、話を戻して今後のことなんだがな・・・」

食事をしながら、今後のことについて、話し合う。
って言うか脱線しまくりだろ！？

白衛「一度変装して、偽者の主を管理局に発見させようと思うんだ」
シヤマル「はやてちゃんの安全確保のためですか？」

白衛「ああ、蒐集後に、転移して遠回りしながらここに戻ってきてるけど、万一つてこともあるし、管理局には、闇の書の主は別に居るんだって誤認させたい、帰宅するときは俺の能力を使えば気付かれずにここに戻るって、ああ！俺の刺身に手えつけんな！」

人が説明してんのをいいことにこの赤髪ちゃんは、俺の皿から刺身を掻っ攫いやがった！

ヴィータ「良いじゃねえか、代わりにこれやるから」

白衛「備え付けの大根と山葵で刺身とつりあうか！」

シグナム「ハア、いいから話を続けるぞ、敵も戦力を整えてきている、我らが、偽の主を装う余裕があるかどうか分からんぞ？」

シャマル「そうですね、貴方の鎧での姿は第3勢力、協力者の類と認識されているはずです」

白衛「ああ、そっちの心配は大丈夫、ちょっと失礼♪」

面白そうだし、俺は一旦リビングから出て、ヴィータに手招きする。

白衛「おい、ヴィータ、ちょっとこっち来てみ？」

ヴィータ「なんだよ？」

ヴィータ SIDE

なんかよくわかんねえけど、あいつは席を立った、みんなも不思議そうに見ている。

・・・今の内にもう一切れもらってやるか。

白衛「おい、ヴィータ、ちょっとこっち来てみ？」

ヴィータ「なんだよ？」

なんかニヤニヤしながらあたしに手招きしてる。

ゼッテーなんかくだらねえ事考えやがったな。

用心しながら扉を開けると、そこにははやてが居た。

ヴィータ「!？」

リビングに戻ってみると、そこにもはやてが居る。

はやて「ヴィータ、どないしたん？」

ヴィータ「え！？・・・あ、えと」

ど、どうなってんだよ？

ヴィータ SIDE END

はやて「ヴィータ、どないしたん？」

ヴィータ「え！？・・・あ、えと」

フッフ、奴め混乱しているな。

俺の刺身を奪った事へのささやかな報復を思い知ったか！！

・・・え？みみっちい？細かい事あいんだよい！

【変身能力】ドッペルゲンガー、短時間しか使えないが、使い道は豊富だな。

主にいたずらで・・・（笑）。

シグナム「どうしたんだ？」

偽はやて（俺）「ふふふ、悪い夢でも見たんと違う？」

リビングに戻ると皆の驚いた顔、いやぁー爽快だねえ。

シャマル「っ！？はやてちゃんが2人！？」

シグナム「これは！？」

はやて「ウチが立つとる！？」

偽はやて（俺）「これならばれる事も無いやろ、さ、明日から頑張るでえ〜」

はやて「ウチのマネすんのやめてえ〜！」

うん、しばらく、これをネタに遊ぼう。

第12話 俺の能力って戦闘よりも悪戯むきだよな（後書き）

ドアノブ「さあて、そろそろクロノ弄りを始めないとねえ♪」

白衛「それは楽しみだな」

友（仮）「趣味悪いわねえ」

2人「「お前の面ほどじゃねえよ」」

友（仮）「酷いわ！、そんな事言われたら、あたしもうお嫁にいけないじゃない！」

「

2人「「元からいけんわ！！」」

第13話 恭也さん、あなたが私を怒鳴るのはシスコン故ですか？それとも単に

ドアノブ「今回は、思いのほかスムーズに執筆できましたな」

白衛「原作に少し手を加えた程度だからな・・・」

ドアノブ「しかし、桃子さんと恭也君とシャルさんの性格が若干危ない方向に行ってる様な？」

白衛「意図してやったわけじゃなかったのかよ!？」

第13話 恭也さん、あなたが私を怒鳴るのはシスコン故ですか？それとも単に

高町家　なのはの部屋

フェイト「ねえ、なのははあの人たちのことどう思う？」

なのは「あの人たちって、闇の書の？」

フェイト「うん、それと、鎧の二人組みも・・・」

なのは「闇の書の完成を目指してる目的、教えてくれるといいんだけど・・・鎧の人たちはあの人たちに協力するのかなあ？話を聞けるような雰囲気じゃなかったし」

フェイト「強い意志で自分を固めちゃうと周囲の言葉って中々入ってこないから・・・私もそうだったし・・・」

なのは「・・・」

フェイト「でも、言葉をかけるのは、思いを伝えるのは絶対無駄じゃないよ、母さんの為とか自分の為とかあんなに信じようとしていた私もなのはの言葉で何度も揺れたから・・・」

なのは「・・・うん」

フェイト「言葉を伝えるのに、戦って勝つことが必要なら、それなら迷わずに戦う気がするんだ、なのはが教えてくれたんだよ？この強い心を」

なのは「そ、そんなこと無いと思うけど・・・」

フェイト「ふふふ・・・だから強くなるよ、思いを伝えるために」

なのは「私ももつと強くなる、一緒に頑張ろう、フェイトちゃん」

コンコンコン ガチャ

白衛（宵闇）「なのは、お茶とお菓子ここにおいて置くぞ？」

なのは「あつ、白衛さん、ありがとうございます」

白衛（宵闇）「君もゆっくりしてきな」

フェイト「は、はい、ありがとうございます（綺麗だ・・・）」

ボタン

白衛（宵闇）（・・・主よ、こちらは主と敵対関係に位置する管理局の童女が居るが何もせんでいいのか？）

白衛（最終的にその子達の力も必要だからな何もしなくていいぞ、何かあったらまた連絡くれ）

白衛（宵闇）（承知した・・・主よ）

白衛（ん・・・どうした？）

白衛（宵闇）（いや・・・なんでもない、では仕事に戻る）

白衛（宵闇）「・・・主に何も無いと言ったが。「PULLLL!」
・・・ふう」

ガチャ

恭也「白衛!! 休憩時間はもう過ぎているだろう! さっさと戻って
仕事を手伝え!」

白衛（宵闇）（この人間がウザったくて仕方が無い、事あるごとに
文句をつけおって、いつそのこと闇に葬るか?）

物騒なことを考える神剣がいた。

白衛 SIDE

こにゃにゃちは〜!・・・え? 古い? いいじゃん好きなんだから。
現在ヴィータとザフィーラの3人でどっかの世界で魔法生物からリ
ンカーコアをとっています。

リアルでモンハンみたいなことしてるよ俺。

全身トゲだらけの魔法生物と戦ってます、・・・見てるとラフJ・
Dを連想させるなあっていうかさあ。

白衛「なんで、こいつ等俺から逃げて2人のほうを襲おうとするか
な!?!」

ヴィータ「あたしが聞きてえよ! よってたかってこっちに来やがる
!」

最初に遭遇したときは、唸り声をあげてこっちを見下ろしてきた、
でも俺を見た瞬間に蜘蛛の子散らすように逃げ始めた、俺はスレイ

ヤーズのリナか？

んで、逃げてるこいつ等がヴィータとザフィーラを見た途端に襲い掛かったんだよ。

ヴィータ「お前え、こいつ等にトラウマになるような事したんじゃねえのか？」

白衛「初対面だっつーの！」

ザフィーラ「闇の書、蒐集《Sammlung》」

白衛「1人だけ冷静に仕事すんのやめない！？」

COOLにスルーしやがって！

ヴィータ「じゃあお前えは、その姿になんのやめろ！」

白衛「管理局を騙さなきゃなんないの、数回は我慢しなさい、わがまま言っちゃう子にゃあお尻ペンペンかますよ！？」

今の会話で分かるように俺は【変身能力】ドッペルゲンガーを使っているキャラの姿になってます・・・え、前置きどうでもいいからキャラ教える？

ニードレスのブレイドさんです。

言峰にしようかなあって思ったけど、神父といってははじめに思い浮かんだ方をとった。

ヴィータ「なんで、服の下何も着けてないんだよ！？」

白衛「んなもん、本人に聞け！」

ヴィータ「じゃあ本人ここに呼んで来い！」

ザフィーラ「・・・次にいくぞ」

管理局に見つかるまでこんな感じか？

第13話 恭也さん、あなたが私を怒鳴るのはシスコン故ですか？それとも単に

ドアノブ「次回あたりKYクロノを登場する予定です」

白衛「それはいいんだが、本文にあったラフJ・Dって何だ？」

ドアノブ「Zーendに登場するオモシロキャラクターです、ラフジャックダイヤモンドと言います、長いので端折りました」

白衛「なるほど」

ドアノブ「それではまた来週」

白衛「では……っておい！1週間あけるつもりか！？」

ドアノブ「……ツチ」

白衛「舌打ちしやがった！」

第14話 叱咤と説得のつもりだったんだけど・・・いつの間にか言葉の暴力に

ドアノブ「今回の白衛は、アダムの口調を意識してます」

白衛「闇の書の主と誤認させるため&白衛と同一人物だと気づかせないためにな」

友（仮）「でも思ったんだけどさあ、変身してもリンカーコアが無
いのは変わらないのよねえ？」

2人「・・・・・・・・あああ！！」

友（仮）「・・・・・・・・どうすんのよ？」

ドアノブ「へ・・・・・・・・変身したときに擬似的なリンカーコアっぽいも
のも作ってたって事で・・・・・・・・」

2人「「くるしいな（わね）」」

第14話 叱咤と説得のつもりだったんだけど・・・いつの間にか言葉の暴力に

ハラオウン家 リビング

管理局員「市部上空にて、搜索対象の2名と正体不明の男1名を捕捉しました！現在、強層結界内部で待機中です」

リンディ「相手は強敵よ、交戦は避けて外部から結界の強化と維持を！現地には執務官を向かわせます！」

管理局員「了解！」

リンディ「・・・闇の書の主が出てきた？何故、蒐集なら守護騎士達に任せておけばいいはずなのに」

市部上空 強層結界内部

ザファイラ「・・・管理局か」

ヴィータ「でもチャライよこいつ等、返り討ちだ！」

白衛「相手さん戦う気無いみたいだけど？ほら、散開してくしザファイラ「イヤ！上だ！」

あああ、そうだったな、クロノが来るんだった。

見上げるとクロノがステインガブレイドを構えていた。

クロノ「ステインガブレイド・エクスキュージョンシフト！」

白衛「ザファイラ、ヴィータ、俺に掴まれ！」

ザファイラ「つくう！」

ヴィータ「な、なんだ！？」

文殊で爆発を起こして、目眩しと弾幕代わりにする。

クロノ「・・・少しは・・・通ったか？」

白衛「そういったセリフは大抵、失敗している場合が多い」
クロノ「なっ！？何時の間に後ろに！」

【速さの能力】ディーンドライブ

吸血鬼の身体のおかげで、動体視力も速さについていける。

お前のバックを取ることもなんて簡単なんだよ。

俺はクロノに向けて、拳を振り上げる。

白衛「吹き飛べ！【炎の能力】リトルボーイ！！」

クロノ「つくあ！！なんだ！？魔力反応は無かったのに！エイミィ
！」

エイミィ「わかんない！デバイスを使った形跡もないし、もしかしたらその人自身の能力なのかも」

クロノ「厄介だな、魔力を使わないんじゃ、反応しにくい」

エイミィ「クロノ君、武装局員配置終了！OKだよ。後、現場に助っ人を転送したよ！

・・・敵が目の前に居るって言うのに、堂々と通信するってのはどういう神経してんだコイツ。

クロノ「なのは、フェイト！」

白衛「ん？」

クロノが叫んだ方向を見ると、魔王と死神が立っていた。

ヴィータ「あいつら！」

ザフィーラ「・・・」

なのは「レイジングハート！」
フェイト「バルディッシュ！」
2人「セエーツトアップ！！」

桃色と金色の光に包まれ、バリアジャケットを着た2人が現れる。

ヴィータ「あいつらのデバイス、あれってまさか！？」

白衛「カートリッジシステムだな、まあ、予測の範囲内じゃないか？
奴らには無限書庫とか多くの技術者が居るわけだし、1度こっぴどくやられたのに前回と同じレベルや装備で挑むってこたないだろ」

フェイト「私達は、貴方達と戦いに来たわけじゃない、まずは話を聞かせて」

なのは「闇の書の完成を目指してる理由を・・・」

ヴィータ「あのさあ、ベルカの諺にこんなのがあるんだよ、「和平の使者なら槍は持たない」」
ザフィーラ「・・・」

諺と言うよりもそのままって感じもするんだけどな、まあアニメで見てたけど、意味が分ずに首傾げてるよ。

白衛「要するに、話し合いをしにくる奴が武器を持ってくるわけが無い、武器を持ってやって来る奴は敵って言いたいんだと思うぜ？」
ヴィータ「そういうこった、話し合いをしよーってのに武器を持ってやってくる奴が居るか馬鹿」

なのは「いきなり有無を言わず襲い掛かってきた子がそれを言う！？」

ザフィーラ「それにそれは、諺ではなく、小話の落ちだ」

ヴィータ「うっせ！良いんだよ細かいことは」

白衛「教訓的な意味を表す諺と、小話の落ちでは細かくない差があると思うが？」

ヴィータ「どっちの味方だよ！？」

その場その場で立場が有利になった方に決まっているじゃない？↑
最終的に身を滅ぼす人です

ズドン！

結界を破ってシグナムが降りてきた。こちらを向き会釈する。
主だと誤認させるために頼んでおいた行為だけど、効果あるかな？

クロノ「みんな、少し待ってくれ、僕は時空管理局、執務官のクロ
ノ・ハラオウンだ、聞きたいんだが、君が闇の書の主か？」

うん、効果はあったな、でもクロノ君？デバイスこっちに向けて聞
きたいってのは答えなければ攻撃するって意味ですか？

白衛「答えて欲しけりゃ、その物騒な杖を降ろしな、それともそっ
ちでは会話する人間は必ず相手に武器を突きつけんのか？」

クロノ「・・・君の守護騎士達は、各次元世界で魔導師、魔法生物
を襲撃し各世界に被害が発生している、どんな事情があるにせよ主
である君にも責任が生まれる」

ヴィータ「ッ！！」

その言葉にヴィータが反応し、飛び掛ろうとするがシグナムが抑え

てくれた。

クロノ「君は闇の書がどれだけ危険なものか理解しているのか？今まで多くの人の人生を歪めてきた忌まわしき代物なんだぞ」

白衛「じゃあ聞くが、テメエ等管理局は闇の書の情報をどれだけ正確に把握してるんだ？」

クロノ「何！？」

白衛「闇の書が生まれた過程・理由は？どういう能力を持った代物なのか？それについて対処法は？そっちにはデッカイ図書館があるんだから当然知ってんだよなあ！」

答えられるわけが無い、こいつ等が闇の書について詳しく知るのはユーノが無限書庫に入ってからだ、仮に今知ることが出来たとしても、管理局内で今までの被害者や遺族、今回被害にあった者は闇の書の消滅を提案するだろう・・・主もろとも。

白衛「世界の平和って看板掲げてんだ、まさか主ごとぶっ飛ばして、何処かの世界に転生させる問題の先送りを選択するんじゃないかねえよなあ？」

クロノ「つく！」

白衛「それとも何か？こうしなければ更に甚大な被害が出る、そうならない為の些細な犠牲だとしても？犠牲になった連中にとっては迷惑な話だよな、お前ら管理局は偽善者が多いな」

クロノ「違う！管理局はそんな組織じゃない！！世界の平「それは

お前が思っていることだろ、管理局全部署にアンケートして、管理局全体全員が心からそう書いたのなら信じるが、心からそう思う奴らがそうそう居るか？点数稼ぎが目的でそう書く奴も居る、出世や金のため、家族を養うため様々な理由で管理局に入る奴が居る、そういった等の事は頭に入っているのか？」・・・」

白衛「組織ってのは巨大になればなる程自浄効果は薄くなるよな、魔力のランクが低いからと切り捨てられる者、出世のために同僚を闇に葬る者、管理局の保護、支援を必要としない世界への管理局に対する恭順の強要、世界の平和と言えは聞こえはいいが、蓋をキチンと開けてみたのか？」

スッ

白衛「1つとして質問に答えてないのに何故こっちにデバイスを向ける？」

クロノ「話し合うだけ無駄なようだ・・・君を拘束する」

白衛「さっきも聞いたが、闇の書への対応は？」

クロノ「君を拘束し牢に繋いでからゆっくりと考える！！」

・・・自分の父親の死が関係しているからか、喧嘩っばやいな。

なのは「ユーノ君、手え出さないでね！私、あの子と1対1だから！」

フェイト「アルフ、私も、彼女と・・・」

アルフ「ああ・・・私も野郎にちよいと話がある」

向こうは向こうで戦う気満々だな。

そういや、猫姉妹が現れたのは、結界外のシャマルがクロノに見つかったときだが今回、クロノはここに居る。

一体何処から出てくるのか・・・いや、戦闘中に出てきて連中のリ
ンカーコアを蒐集されるのは面倒だ、ここは退くか。

クロノ「時空管理局、執務官、クロノ・ハラオウン、お前の名は？」

白衛「・・・わざわざ、敵が自分の敵に自分の情報を与えると思っ
てんのか？それとも今まで管理局が相手にしてきた連中は、騎士道
精神あふれる犯罪者だったのか？」

白衛（ヴィータ、ザフィーラ、シグナム、戦つてるところ悪いがこ
こは退くぞ局員が外から結界維持をしている、今ならヴィータとシ
グナムで破壊して脱出できる）

シグナム（しかし、相手がそれを許してくれそうに無い。テストロ
ッサとバルディッシュ、中々やる）

ヴィータ（こっちもだ！前とは比べもんにならねえ位に強くなって
やる！！）

白衛（1度、今から指定する場所に戦いながら後退してくれ、後は
俺が連中の相手をする、みんなは俺の後ろ、俺の影に触れていてく
れ、結界の端まで転移させる、シャルと合流してくれ）

ザフィーラ（正気か？それは自殺行為に等しい、奴らに捕まれば貴
様が闇の書の主でない事がばれるのは時間の問題だぞ）

白衛（大丈夫だって、それにここで連中と戦っても、こっちには何
の利益も無い、はやてが闇の書の呪縛から解き放たれたとき、今回
や歴代の主の被害者や遺族は、はやてを憎しみの目で見るだろう、
本人に非があるが無かろうがな、少しでもその目を減らしたい）

なのは達ならその心配は無いと思うが、他の管理局員は信用できない、そのため後の弁護の材料として魔導師をあまり襲わず、魔法生物を中心に蒐集したと言う事実を残しておきたい。

シグナム（・・・分かった、場所を指定してくれ）

ヴィータ（しゃあねーな）

ザフィーラ（・・・本当に勝算または逃げ切れる自信があるのだな？）

白衛（無問題、今回は悪いけど各自転移して自力での帰宅をヨロシク！）

そういつて、指定したのは広い屋上のあるビル。

こっちもクロノの攻撃をかわしながら屋上に着地する。

俺が着くと、シグナム達も、なのは達もやってきた。

クロノ「観念したのか？ならおとなしく投降するんだ！」

白衛「投降？まさか、そろそろ夕食の時間なんで帰らせてもらおう」

クロノ「な、なんだと」

白衛「と言ってもこいつらを先に帰らせて食事の準備をさせなきゃならないから、お前らの相手は俺が勤めてやるよ」

アルフ「へえー、随分と大きく出たねえ」

フェイト「・・・私達を甘く見ていませんか？」

クロノ「だが、好都合だ、闇の書の主を抑えることが出来る」

なのは「っ！みんな、あの人たちが！」

なのは嬢は気づいたか、俺の後ろで影を扉にして消えていくシグナム達。

シグナム「すまん、テストロッサ、勝負は預ける」
フェイト「シグナム!!」

ヴィータ「守護騎士、鉄槌の騎士ヴィータ、あんたの名は？」
なのは「なのは、高町なのは」

ヴィータ「高町なの・・・なん・・・ええい！呼びにくい!!」
なのは「逆切れ!？」

ヴィータ「ともあれ、勝負は預けた！次は殺すかな！」

クロノ「奴らを何処へやった!？」

白衛「家に帰したんだよ、言っただろ、夕食の時間だってな」

クロノ「人をおちよくるのも大概にしろ！」

白衛「おちよくる？」

なのは SIDE

白衛「おちよくる？」

目の前に居るサングラスをかけた闇の書の主さんがそういった瞬間、
まるで、気温が一気に下がったようなしました。

白衛「そっちはどうなんだ、闇の書の事件は今回に始まったことじゃねえだろ、前回起こった時から何年経ったのか知らねえーが、打開策がまるでなくてないんじゃないかねえのか？」

怖い、足がすくんで動けない。

みんなも恐怖を感じているのか動けずに居ました。

白衛「どんなに情報の詰まった図書館があっても活用できてなきゃ、豚に真珠だな。」

クロノ「・・・無限書庫のことを言っているのか？」

白衛「少しヒントをやるよ、闇の書のことを知りたければその無限書庫に行って調べな、何処にあるか分からないから億劫だなんて考えは改めた方がいいぜ？」

そういつて、ビルの影に入り込もうとしました、けど、・・・。

クロノ「ま・・・待て！お前をここで逃がすわけには！」

ズン！

白衛「・・・そういうセリフは、実力が拮抗するか、相手より上になってからほざくんだな」

床を殴ったかと思うと、沢山の手が出てきました、白いというよりも青白くて、爪も鋭くて長く、アルフさんの獣状態のときのようにでした。

でも、私達が恐怖を覚えたのは、別のところ。

白衛「そいつらに負けるようじゃ、この先苦戦するぜ？言いたいことがあったら力をつけな、それからお前らの考えを聞かせろ、力の無い者の正論なんて、薄汚れた連中の理不尽にかき消されるのが落ちだぞ」

その手のひらには、沢山の牙が生えた口がありました。

第14話 叱咤と説得のつもりだったんだけど・・・いつの間にか言葉の暴力に

白衛「最近、シリアスっていうか、重い会話が多いな」

ドアノブ「すいません、努力はしてるんですけど、シリアスとコメ
ディの両立ってムズイっすね」

白衛「あんなもん（口のある手）出してどうすんだ？」

ドアノブ「すいません、ベルチェが好きなんです」

白衛「だめだ、こいつ」

ドアノブ「すいません、白衛は男性愛者なんです」

白衛「真っ赤な嘘だ!!」

ドアノブ「すいません、実はクロノ×白衛、恭也×白衛と言うネタ
を出すつもりでいました」

白衛「却下に決まってるだろ!!」

ドアノブ「すいm「ゴス!」・・・」

白衛「ええ・・・、それではまた次回」

第15話 自分の発言が後々自分の首を絞める事ってありますよね？（前書き）

ドアノブ「今回、白衛は全くと言っていいほど出てきません」

白衛「まあ、短い休憩時間だと思うさ」

ドアノブ「それによって、主人公を変えようと思います」

白衛「おい！」

第15話 自分の発言が後々自分の首を絞める事ってありますよね？

クロノ SIDE

ハラオウン家 リビング

クロノ「……………なんだったんだ？あの手は」

答えを期待したわけじゃなくそう言わずにはいられない、そんな気分だった。

あの不気味な手の大群を呼び出した後、闇の書の主は影の中に消えていった、消えると同時に手が襲い掛かってきた、動きが素早く外見からも恐怖を覚えてしまう。

なのはもフェイトもモニターを見ていたエイミィや母さんも気分が余り良くない。

なのは「お化け屋敷に迷い込んだのかと思ったよう」

エイミィ「…………お化け屋敷の方がまだマシに思えるよ」

リンディ「…………さすがにあの映像には鳥肌がたったわね」

フェイト「…………怖かった」

あの不気味な手は、爪で切り裂く攻撃のほかに、手の平の口で噛み付く、何体か群れを作り隙を突いて関節を決めてくるなど、獣じみた攻撃をするかと思えば人間を相手にしているような技を仕掛けてきた。

攻撃を判断するのが難しく、翻弄されて攻撃を受ける、撃退は出来

たものの辛勝と言ってもいい結果だった。

おまけに戦闘後に周囲を見るとあたりのコンクリートにはまるで、リングを丸齧りしたかのような歯形が大量にあった、噛み付かれるとどうなるか想像したくないし、至近距離で口が開閉し、自分に噛み付こうとする光景はあまり思い出したくないな。

フェイト「……でも少し不思議に思うところがあるんだ」

クロノ「ん……なにがだ？」

戦闘時の映像を出し、指摘したい場面まで早送りにする。

不気味な手の大群が映ってから若干周りの空気が沈んだのは気のせいじゃないだろう。

フェイト「……ほら、ここ私が体制を崩したときに確かに1撃をいれてきた、でもそれ以上の追撃はしてこなかったんだ」

アルフ「単に、追撃するって言う行動が思い浮かばなかったんじゃないのかい？ 知能があるとは思えないし」

エイミィ「でも、隙を突いたり、関節を決める事だっと思っていたよ？ 知能が無ければ難しいんじゃない？ あっ！もしかしたらそういう風にプログラムが組まれてたんじゃないかな？」

クロノ「いや、知能があるにせよ、プログラミングにせよ、ここでフェイトを追撃しないのは明らかにおかしい」

敵に手心を加えて得になることなんて無い、何が目的だ？

なのは「……もしかして、強くさせたいのかな？」

リンディ「?・・・どういふことかしら、なのはさん？」

なのは「闇の書の主さん、言いたいことがあるなら力をつけてから聞かせろって、言ってたから・・・」

力の無い者の正論は、卑怯な者たちの理不尽にかき消される・・・か。

クロノ「名前さえ分からず、魔力を使用せず、様々な能力を使用する上に不気味な手、まだまだ、底知れない何かを隠してそうだな」

なのは「・・・魔力を使用しない？」

クロノ「ああ、奴は魔力を使わず、見たことも無い能力を使ってきたんだ、多分レアスキル類だと思うが、数が多くて判断できない」

なのは「見たことも無い能力・・・ちよつとごめんなさい」

フェイト「なのは？」

なのはは携帯を取り出すと、電話をかけた、意図が分からずみんな不思議そうな顔をしている。

なのは「・・・あっお母さん? うん、今フェイトちゃんのお家だよ、聞きたいんだけど、白衛さんって昨日の夜、翠屋にいた?」

・・・白衛さん?

なのは「そっか、ううん、居たのならいいの、なんでもないよ、そ

れじゃあね」

何かほっとした顔をしてるけど一体何なんだ？

エイミィ「おやゝなのはちゃん、彼氏ですか？」

なのは「ふえ！？ち、違いますよう！今うちに住み込みで働いてる人なんです、／／／」

フェイト「あっ！この前、お茶とお菓子を持ってきたくれた綺麗な人？」

なのは「そうそう！」

エイミィ「？・・・綺麗って女の人なの？」

なのは「いえ、男の人です」

・・・男で綺麗？どんな人物なのか想像がつかないな。

アルフ「その白衛って奴がどうして翠屋にいたことを確認したんだい？」

なのは「えっと、その人も魔導師みたいなものだって言ってる！？」
「え、ええと、魔法と良く似た力を使うって言ってたから、もしかしたらと思って電話してみたの、でも昨日は翠屋で閉店まで居たってお母さんが言ってたので・・・」

魔導師に類するもの？確かに怪しくはあるがアリバイもある、今回の件とは無関係か？

リンディ「それで、どんな人なの？なのはさんの気になる男性は」

なのは「き、気になるって言うか、その・・・／／／」

エイミィ「綺麗っていったけど、どんな外見してんの？フェイトちゃんは会ったことあるんでしょう？」

フェイト「うん・・・男の人には見えなかった」

・・・それは男としてかなり可哀想な部類に入るんじゃないか？

なのは「えっと、身長はエイミィさんと同じ位かな？膝の裏位まで伸びた淡く緑がかった銀髪で、蒼い瞳をしてて、体型はほっそりしてます」

駄目だ、想像できない、その人は本当に男か？

クロノ「・・・男なのになんで髪を伸ばす？」

なのは「ハサミが耳の後ろで音を立てるのが嫌いって言ってたよ」

一体年齢は幾つだ、子供か！？

リンディ「うーん、1度会いたいと伝えてもらえるかしら？魔法に似た力というものがどんなものか見てみたいし、可能なら協力してもらいたいので、協力者は多いに越したことは無いわ」

なのは「わかりました」

リンディ「よろしくね、それじゃあ、どんな出会いだったのか聞かせてもらおうかな♪」

なのは「え!?!」

母さん、いや艦長、今後の対応についての話し合いはどうなったんですか？

リンディ「しばらく休憩にしましょ♪」

クロノ「ハア、まあ確かに、重い雰囲気ばかりでしたし気分転換も必要ですね」

しかし、魔法に似た力か、どんなものなんだ？

クロノ SIDE END

宵闇（・・・というわけで、敵の親玉と話をする事になった）

白衛（ちょっと待てえええい!!）

宵闇（しかし主よ、断れば、怪しまれるぞ、元々、天涯孤独で、仕事以外に用事は無いことになっているのだから仕方あるまい?）

白衛「・・・・・・・・（汗）」

どうすんだよ、この状況・・・。

第15話 自分の発言が後々自分の首を絞める事ってありますよね？（後書き）

白衛「管理局と面会してどうしろってんだよ!？」

ドアノブ「頑張れ!！」

白衛「応援じゃなくて今後の展開どうすんのか教えろ！」

ドアノブ「君なら（根拠は無いが）絶対何とかなるさ! 多分」

白衛「丸投げかよ!？あと絶対の後に多分ってどういうこった!？」

第16話 久しぶりの翠屋は大変なことになってました（前書き）

友（仮） 「思ったんだけど、あんた、男に言い寄られるのが嫌なのに、どうしてそんな容姿にしたのよ？」

白衛 「イケメンにして何の得がある！？どっかの偉い人も言っていたじゃないか『可愛いは正義だ』と！」

友（仮） 「ちゃんと弄られる可能性考慮しなさいよ、イケメンにしておいた方が良かったんじゃない？」

白衛 「第7話のサブタイトルのネタに使ったが・・・R o m e o m u s t d i e ！（色男は死んじまえ）というのが俺の意見だ」

友（仮） 「難儀というよりも我儕な子ねえ」

第16話 久しぶりの翠屋は大変なことになってました

何故だ？どうしてこうなった？

俺は今日、翠屋でハラオウン家の人たちと会う予定で仕事の日ではない・・・はずなのに。

桃子「うん、やっぱり似合ってるわ♪」

フェイト達が来るまでの間仕事を手伝う事になったのだが、いつの間にか新作の制服が出来たので試着して欲しいといわれ、着替えさせられた。

黒スーツ仕立て直すのどれだけ時間掛かってんすか？

美由希「え、ええと、お母さん、さすがにこれは制服とは言わないんじゃないかなあ？」

桃子「でもほら、お客さんの集客量は増えてるわよ？」

店の外を見ると、野郎共が街頭の光に群がる虫のようにビッシリと窓にくっ付いてこっちを見ていた。

というよりも桃子さん、客が来店↓客が長居する↓列が出来る↓長居する客が再び注文する↓列に並ぶ連中が増える↓やっと客が帰る（満足げな顔で）、この悪循環が続いているだけですよ？

ちなみに今俺が着ているのは、美由紀さんが言った通り制服とはいえない。

なぜなら、服がゴスロリだからだ。

店内と店外（外から中を覗き込む馬鹿共）の視線が突き刺さり、徐々に精神のライフポイントが削られていく。

桃子「大丈夫よ、リンディさん達が来たら、仕事抜けていいから、後リンディさん達は優先的に通すようにしてあるから」

・・・それまで耐えろと？

カランカラン

なのは「お母さん、リンディさん達が来たよ」

リンディ「お忙しい時間にすいません、しばらく、白衛さんをお借りしてもよろしいでしょうか？」

桃子「そんなかしこまらないでください、それに白衛ちゃんは今日、非番ですから」

本人の意見を見無視してませんか貴女方？
それとクロノ俺の顔に何かついてるのか？さっきからジッとこっちを見つめて一体どうした？

白衛「なにか？」

クロノ「い、いや！なんでもない・・・です」(なのは、本当にこの人は男なのか!?)

なのは「クロノ君、この人が刃清白衛さんだよ」(本当だよ？どうして?)

クロノ「クロノ・ハラオウンといいます、よろしく」(女性にしか見えない・・・)

白衛「こちらこそ、刃清白衛といいます、よろしく」

・・・何か念話で会話してるな？チラチラと目配せしたり、表情がコロコロ変わるからモロバレだぞ？

握手すると、クロノはジッと自分の手を見つめていた・・・少し頬を赤くして。

・・・おい、俺は同性愛者じゃないからな。こっち来んなよ？

後エイミーさん？殺気を放ってこっち見んのやめてくれ、あんたが脳内で妄想しているようなアブノーマルな展開は断じて発生しないから！

リンディ「あなたが白衛さんね？、はじめまして、クロノとフェイトの母親のリンディ・ハラオウンといいます、よろしくね」

・・・歳幾つですか？桃子さんといい、貴女といい、士郎さんといい、サイヤ人か何かですか？

挨拶を交わして窓際（客寄せの為）に座る。

リンディ「貴方のことについては、なのはさんから聞いたの、魔法に良く似た力を使うと聞いてどんな物なのか知りたくて、私達が扱う魔法とは違う魔法体型かもしれないし、教えてもらえないかしら？」

・・・まあ、1つ位なら教えてもいいか、他は隠すけど。

白衛「俺の使う能力は、言霊ですよ」

リンディ「言霊？」

拳を握り、テーブルの中央まで移動し、皆が見えるようにする。
手を開くと何の文字も書かれていない文殊が1つあった。

白衛「はい、言霊です、1文字をキーワードに自分の思いを念じ、
発動する能力です、又、この文殊の数を増やすことで起こしたい現象を明確化したり、1文字では不可能な現象も可能になります」

リンディ「具体的に言うത്？」

白衛「爆発を起こしたいなら、爆発しろと念じます、文殊には『爆』
の文字が浮かび、爆発します、又、空が飛びたいと念じると『飛』
と『翔』といった具合です」

リンディ「なるほど、言葉、この国の字を使う能力、言霊というわけね、この文殊だったかしら？これは魔力を使わない貴方自身の能力と判断してもいいのよね？」

白衛「はい、この国では妖、悪霊の類が信じられてきました、それ
に対抗するための存在、退魔師、エクソシスト等が使う能力、霊力
を使用する能力です」

リンディ「霊力？魔力とは違うもののなの？」

白衛「例えば悪いですが石油のようなものです、使用する用途に合わせて石油からガソリン、レギュラーやハイオクに軽油または灯油
といった具合に作られるように、魔力・霊力が体内で精製されます。
要は性質が少し違うだけ、中身は大体同じです」

クロノ「なるほど」

リンディ「でも、貴方の文殊は応用範囲が広そうね、攻撃にも防御にも使えるのだから」

白衛「欠点は、飛翔といった効果の持続を要求されるものは時間制限がつき、文字の浮かんだ文殊が碎けるまでの間しか効果が無い事、ある一定以上の強さを持つ対象には効果が期待できない事です」

エイミィ「ある一定以上の強さ？」

白衛「対魔力のように、対霊力を持った相手や、術に長けた者には効果が薄かったり、無効化されたりします」

リンディ「・・・ねえ、私達は時空管理局といって、各世界の平和のために活動している組織なの、貴方も入って見ない？」

・・・首輪をつけるつもりか？

俺の能力目当てと人員の確保といったところだろうな、管理局の人手不足は深刻だな。

白衛「嬉しい申し出ですが、俺は旅の途中なんです、此处で働いているのも路銀稼ぎと恩返しが目的です」

リンディ「まあ、待ってそう結論を急がないで、何も今すぐ返事が欲しいわけじゃないの、なのはさんも民間協力者として手伝ってくれているわ」

無印の時に貴女が協力したくなるように仕向けたように思えますがねえ。

この人は電話での悪徳商法とかしたら荒稼ぎしそうだな。

リンディ「それに私達は今この街、いいえ、この世界の運命を左右する事件と対面しているの」

知ってますよ、一応関係者ですから。

白衛「成功率を上げるために、戦力は多いに越したことは無い、ですか？」

リンディ「気を悪くしたのなら、謝るわ、でも今は少しでも優秀な人材が必要な、今回限りでも構わないし、出来る限りのお礼はするわ」

白衛「・・・お願いがあります」

リンディ「なあに？」

白衛「こちらが指定した場所と時間に来て、最後までこちらの話を聞いてください、こちらは1人で来ます、そちらは何人でも構いません、その時にこっちの素性、状況をお話します、もし話を聞いて協力できないと判断されるのであれば、俺は貴方達を敵対者とみなします」

ハラオウン家「「「「!?!?」」」」」

白衛「では失礼します、後ほど場所と時間を連絡します」

フェイト SIDE

以前、なのはの部屋にお邪魔した時に優しく微笑んでくれた人。

綺麗な人・・・それが会って初めに思ったことだったと思う。

魔法に良く似た能力についても驚いた、魔法以外にもいろんな術や技術があるんだと感心した。

でも・・・管理局への入局を勧めたあたりから雰囲気が変わりだした。

目を細め、こちらをジッと見ていた。

まるで怒っているように感じたのは何故だろう？

今は、あの人がいなくなった席で話し合っている。

クロノ「どうしますか艦長？」

リンディ「こういう意図があるのか読めないわね、判断に迷うけど、応じましょう」

クロノ「いいんですか！？今は時間的な余裕はあまり無い、戦力の増強ならまたグレアム提督から「クロノ、あの子は素性と状況を話すと言っていたわ」・・・」

リンディ「そして、話を最後まで聞いて私達が協力できないと判断するなら敵対する・・・つまりあの子がこちらに協力するのではなく、私達があの子に協力しなければならぬ何かがある、且つ私達が協力しなければ、彼にとって私達は邪魔な存在ということよ」

なのは「そんな・・・！」

エイミィ「そして、私達が今対応している事件はただ1つ、状況説明が欲しい事件も1つというわけですね」

リンディ「えええ、彼が新たな火種を運んできたという可能性を除けば・・・だけど」

PULLLLL!

PULLLLL!

ピッ

なのは「あっ！白衛さんからです、場所は、っ！以前フェイトちゃんと戦った公園です！時間は今日の夜23時です」

リンディ「なのはさん、ご両親に今日は私達の家泊まるということ伝えてきてくれるかしら？」

なのは「え？」

リンディ「気になるんでしょ？彼のこと」

なのは「は、はい、／／／」

リンディ「一緒に行きましょ、もちろん、フェイトもね♪」

フェイト「・・・え!？」

エイミィ「会話中ずーっと白衛君の顔見てたよ、なのはちゃんに親友にして恋の好敵手現るかぁ・・・ヒィ!」

エイミィ、人をからかうのはやめようね？

わたしとなのは、あとついになのはのお兄さんが睨んでました。

第16話 久しぶりの翠屋は大変なことになってました（後書き）

白衛「誰にもフラグを立てた覚えは無いが？」

ドアノブ「なのはは風呂場で、フェイトはなのはの部屋で微笑んだ時」

白衛「あれ事故じゃん！？あん時悲鳴上げたかったの俺の方だよ！あとフェイトは俺じゃなくて宵闇だろ！？」

ドアノブ「外見はお前じゃん？ま、男としては嬉しいだろ？シスコン2人からは睨まれると思うが」

白衛「それが嫌なんだよ！！」

第17話 どういつもこいつも、俺の身長が低いことに何か文句でもあるのか!？」

ドアノブ 「今回は、協力要請と状況説明にかこつけて白衛の設定説明みしたいになってしまった」

白衛 「おまけに後半はセリフばかりだ」

ドアノブ 「すいませ「バキッ!」なにすんだよ!？」

白衛 「えっ・・・あ! すまん、第14話のあとがきみたいなこと言うつもりかと思って」

ドアノブ 「本当にBLの方向に持ってってやろうかなコイツ」

第17話 どういつもこいつも、俺の身長が低いことに何か文句でもあるのか!?

臨海公園 P M 22..30

白衛「来たか・・・」

臨海公園で待っていると、ハラオウン家となのは、ユーノがやって来た。

まあ、予想通りといえばその通りの面子だ、他に思い当たる主要人物はいないし、ただ少し離れた所から此处を囲むように10人以上の魔力を持った者の気配がする。

敵対した時のための保険だろうな、人数の指定はしなかったわけだし許容範囲かな?

リンディ「こんばんは、約束の時間には早いけど話を始めましょうか?」

白衛「はい、まず初めに謝罪をさせてください、なのは、フェイト、クロノ、ユーノ、本当にすまなかった」

フェイト「・・・あなたが謝る理由が分かりません」

クロノ「一体何のことについて謝っているんですか?」

白衛「・・・この姿なら分かるだろ?」

【変身能力】ドッペルゲンガー、俺はアダム・ブレイドの姿をとったもちろん、全員驚いていた、状況がシリアスの所為か爽快感は無いな。

なのは「・・・うそ」

ユーノ「魔力は感じられなかった、おそらく彼自身の変身能力だ！」

ジャキツ！

クロノ「そっちが本当の姿か・・・僕達を騙していたということか！？」

デバイスをこちらに向けて、物凄い形相で睨んでくる。
元の姿に戻り、1つ1つ説明をしていく。

白衛「いや、こっちが本当の姿だ、あっちは、闇の書の主だと誤認させるためのカモフラージュ、騙したかどうかと聞かれると、半分半分だな、今まで話す事はしなかったし、今回の話し合いが無ければこの事件の終わりまで、黙っていたかもしれない」

なのは「で、でも、白衛さんは昨日、翠屋で働いていたってお母さんが！」

白衛「なのは、それは俺の持っている神剣、そちらで言うデバイスのような存在が居てくれるからなんだ」

フェイト「神剣？」

街灯の下に立ち、指を噛んで自分の影に血をたらす。

すると、影の色が濃くなり、次第に、影が立体化をはじめた。

俺と向かい合わせに立つと、色がつき始め、俺と瓜二つの宵闇がそこに居た。

白衛「……？宵闇挨拶は？」

宵闇「……お初にお目にかかる、我は宵闇、永遠神剣第4位 宵闇という」

リンディ「名前からして、剣の形をしていると思ったのだけど……神剣はみんなこういうことが可能なの？それと、永遠神剣って一体何？」

白衛「自ら選んだ所有者に絶大な力を与え、その代償としてマナ、魔力を集めることを求める武器です。神剣と呼ばれていますが、その形状は剣に限らず、杖もあれば槍状の神剣もあります。神剣には第十位から第一位までの階位が存在し、数字が小さくなる程強大な力と、明確な意思を持っているんです」

クロノ「そんな武器があるなんて！」

白衛「また、自ら所有者を選ぶため、所有者候補に話しかけるまで何の変哲も無い武器や、装飾品だったりするから発見されにくいんです、所有者以外には話す事も無ければ力を貸すこともありませんか」

エイミィ「……今この神剣さんは、話したけど？」

白衛「偶に、こういう変り種も居ます」

宵闇「……主よ、その言い方には、不満がある」

白衛「とにかく、俺が戦いに出ている間、宵闇が俺に成りすまして

アribai作りをしてくれてたんだ」

クロノ「それは分かったが、さっきの変身能力や、この間の炎を使ったのは文殊じゃないのか？」

うーん、ニードレスの欠片【フラグメント】とムーンタイズの能力は説明が難しいな、第2のキリストが使っていた能力といっても納得しないだろうし、ムーンタイズと一緒にたにしますか？

白衛「あれは俺の種族が使う能力だ」

なのは「種族？・・・！白衛さんって本当に人間じゃないんですか！？」

ハラオウン家「「「「！？」」「」「」」

リンディ「人間じゃ・・・無い？」

クロノ「どう見ても人間にしか見えない、リンカーコアが無いことを除けばだが、あの守護騎士達のような存在でもなさそうだし」

エイミィ「ま、まさか、オバケとか言わないよね？」

この前の手の大群がトラウマになっているのか、全員青い顔になったな。

白衛「違うよ、「・・・ほっ」まあ・・・幽霊も実在はしてるけどね「ええ！？」・・・」

エイミィ「う、嘘だよ、幽霊なんて居るわけ無いって、ああいうの

は、作り話、御伽噺の世界にしか居ないって！そんなものは現実には存在しないよ！」

白衛「・・・存在の全否定は傷つくな、御伽噺の住人が目の前に居るってのに、あと御伽噺の代表の魔法を行使する人が言うセリフじゃないんじゃない？」

フェイト「た、確かにそうかも・・・？御伽噺の住人？」

主にホラー専門ですけど。

白衛「・・・西洋風の荒れ果てた城、暗雲漂う空、城の奥底に置かれた棺桶、首に小さな穴の開いた人間、はい！ここから連想できるものは？」

エイミー「バ、バイ○ハザード！？」

白衛「それ、御伽噺じゃなくてホラーゲームじゃん！？」

あ、映画化もされたんだっけ？、怖くて見てないけど。

なのは「ひ、ひょっとして、吸血鬼・・・ですか？」

白衛「当たり前、ほら牙があるだろ？・・・ん？」

驚いてるのはに牙を見せていると、エイミーが右腕を縦に、左腕を横に交差させてこっちに向けている、なんだ？スぺ○ウム光線か？

エイミー「ほ、ほら！十字架だよ！？なのはちゃんから離れなさい！夜を指定したのもその為だったのね！？」

エイミィを除く全員「・・・・・・・・・・」

クロノ「エ、エイミィ？それで十字架というのはかなり無理があるぞ、それに、昼間に1度会ってるんだから昼夜の関係は無いと思うぞ？」

エイミィ「・・・・・・・・」

白衛「ちなみに、十字架もニンクも効かないし、海も渡れるよ？人間に浸透している吸血鬼の弱点で、迷信か、ドラキュラ伯爵固有の弱点が広まってるだけだよ？」

なのは「え！？そうなんですか？」

白衛「そうなの、あと、真祖っていつて生まれた時から吸血鬼だった奴は殺しても死なないような奴ばかりだよ？肉体が消滅しても、時間を掛けて肉体を再生させるから」

エイミィ「そんなのどうやって戦えって言うの！？敵対した時点で負け確定じゃん！」

リンディ「確かに敵に回したくない種族ね・・・」

白衛「あゝ、脱線したから話を戻しますけど、俺達は1人1人、特殊な能力を身に着けるんだ、1人につき1つの能力をね」

リンディ「？・・・あなたは確認しただけで4つは使用していたけど？」

白衛「もし、ランプの精が目の前に居て、願いを1つだけ叶えてくれるというなら、どんな願いにします？」

リンディ「願い・・・！そういう事、随分反則的な能力ね」

アルフ「どういうことだい？」

フェイト「どんな願いをするの？」

リンディ「恐らく、彼の能力は、他の人の能力を使う、覚えるといった能力なのよ、能力という願いは1人に1つしか叶えられない、彼の願いは、願いを無限に叶え続けると言っているようなものよ」

リンディさんの説明を受けて、みんな啞然としている。

クロノ「なんて反則な・・・」

白衛「まあ、大体あってますよ、1度見たり、体感した能力は覚えることが出来ます。ただ、魔法使いを相手にしたことは無いので魔法を覚えられるかどうかは分かりませんが」

エイミィ「なんか、頭が痛くなってきた・・・」

クロノ「我慢してくれ、僕だって、結構参ってるんだ」

リンディ「貴方の素性については、大体分かったわ、それで、状況の方はどうなっているの？」

白衛「現闇の書の主は、幼くして、両親を亡くした心の優しい少女、小さな頃から闇の書と共に居たため、リンカーコアと密接につなが

っています、健康な身体機能を奪うほど・・・」

全員 「「「「「「「!？」」「」「」「」

白衛「そして、闇の書が起動したことで、今までの比でない魔力量を闇の書に注がなくてはいけなくなりました。しかし、リンカーコアが未発達の子の魔力量では十分ではなく、身体の麻痺も徐々に進行している状態です」

リンディ「その子を救うために、協力して欲しいということかしら？」

ユーノ「何故、最初から説明をしてくれなかったんだ？そうすればもっと早く・・・」

白衛「第1の理由は、貴方達は組織、管理局だからです。以前クロノにも言ったけど、組織は巨大であればあるほど自浄作用が薄い、局内の中にも欲深な奴は居るはずだ、それが人ですから。手柄目当てにしろ、闇の書の利用にしろ、出てこられたら邪魔になります。そして、第2の理由は闇の書に対する被害者達の感情が問題です」

フェイト「感情？」

白衛「闇の書は、今まで多くの人の人生を狂わせてきました。歴代の主達は、善悪様々ですが、リンカーコアを蒐集する際に命を落とす者や暴走によって多くの命が消えていきました。当時の被害者や遺族達が闇の書の場所を知ったら、どうするか・・・」

クロノ「・・・復讐か」

白衛「たとえば、今の主が自分達の人生を狂わせた歴代の主とは違う人物だとしても、感情面で納得するのは難しいでしょう、貴方達組織は、上層部に報告義務があるはずです。上層部が以前と同じ選択をしたら従わざるおえない立場のはずです」

リンディ「・・・」

白衛「失礼ですが、今までの管理局の対応は問題の先延ばしでしかありません。責任が自分に降りかからない限り、重い腰を上げない、その場その場で1番手っ取り早い方法しか選んでないんですよ上層部は」

ユーノ「上層部に手出しをさせないためにも、闇の所の情報を渡すわけには行かなかった？」

白衛「付け加えるなら、闇の書だとも分かってても迂闊に手を打つことが出来ない状況だと認識させたかった」

エイミィ「確かに、迂闊な行動を取れる状況じゃなかったね、仮面の2人組とか鎧の2人組とか、正体不明の連中が多すぎて、事態の内容が把握しきれてなかったし」

鎧の方は俺と宵闇ですけどね（まだ黙ってよ面白いから）。

リンディ「聞きたいのだけど、あなたは現闇の書の主である少女とはどんな関係なの？そこまでして救いたい理由は？」

白衛「友達かな？1番しっくり来る言葉は、それに、やっぱり悲しい事なんて無い方がいいと思ったんですよ」

リンディ「……」

なのは「……白衛さん」

白衛「まだ生まれて20年、永遠にも思えるこれからの人生、辛いことや、悲しいこともたくさんあると思う。でも、願うなら、悲しいことは、友達との永遠の別れのみにしたい、永久の別離まで共に笑い合っていたいんだ」

全員「「「「「「……」」」」」」

白衛「俺が話す素性と状況はこんなところです。出来れば協力してもらえるとありがたいんですけど」

なのは「リンディさん!!」

リンディ「わかってるわ、なのはさん、協力します、それに、敵になつたらとんでもない被害になりそうだし」

クロノ「確かに……」

白衛「助かります、俺の能力、人を助けるのに向いてる能力が少なくて困ってたんです。闇の書の主には今度会わせます」

フェイト「でも、まだ仮面2人組と鎧の2人組が行方をくらましてる、そっちの方も何とかしないと」

宵闇「鎧の方は問題ない、あれは、主と私が変身した姿だ」

全員「「「「「「……はぁ!?!」」」」」」

白衛「うーん、見せた方が早いかな【覚醒召還】コンセプション！」

俺は左手を掲げ、紅の光が辺りを包む。

皆が眩しさで目を細め、光が収まるとケルベルスになった俺が居た。

白衛「これは形態が違うけど、剣を持った奴にもなれるよ」

アルフ「変身前と身長があってないじゃないか！」

白衛「お前もそこに突っ込むか！」

いつか、フェイトに化けてイタズラしてやる！

第17話　　どいつもこいつも、俺の身長が低いことに何か文句でもあるのか!？」

白衛「お前、協力を取り付けたのはいいけど猫姉妹の件とかどうすんの?」

ドアノブ「大丈夫! 宵闇にフルボッコさせて、行動不能にさせとくから」

白衛「その場合の会話とかちゃんと考えてあるんだよね?」

ドアノブ「やだなあ、考えてないに決まってるじゃないか!」

白衛「1度、頭ン中クリーニングに出して来い!」

第18話 洗剤やシャンプーの性質を持った料理ってどうよ？（前書き）

ドアノブ 「今回は、有名なアニメのセリフが出てきます」

白衛 「セリフが思いつかなかったからってパクルなよ」

ドアノブ 「今後の展開考えんのに苦労してんのよ！ 少しくらい多めに見てよ！」

白衛 「逆ギレすんな！」

第18話 洗剤やシャンプーの性質を持った料理ってどうよ？

八神家 P M 23..00

何故だ？どうしてこうなった？

・・・え？以前もこの出だし使ったって？

それは失礼、しかし、現在の俺はある危機的状況に直面している。そうだな、例えるならゲームの選択肢を慎重に選んでいたはずなのに、気づけばB A D E N Dルートになってましたって感じかな。

シャマル「どうしたんですか？さあ、お代わりは沢山ありますからね♪」

シグナム、ヴィータ、ザファイラ、はやて「……………」↑無実の人が処刑されるのを黙って見ている、もしくは見ない振りをする人達

白衛「よし、ちょっと待ってみようか？何だこの罰ゲームは？」

確か、なのは達と臨海公園で別れて、すぐに八神家に帰宅。

そうしたら、闇の書が残り100ページを切ったので、今までの労いをおかねて、少し豪華な料理を作っていたらしい、……………考えなくても分かると思うから、誰が作ったとか聞かないでくれ。

マジでヤバイ、身体全体が食べるなど警報を鳴らしている。

とらハ2のヒロイン、愛さん（無印のときの動物病院の先生な）もそうだが、どんな漫画やアニメにも1人は居るのか！？ポイズンクッキングを作る女性というのは？

白衛「シャマル、申し訳ないんだけどな、俺は」

シャル「あっ！そっか、お茶が必要ですよね？淹れて来ますから待っててください」

パタパタ

とても楽しそうな足取りでキッチンに向かって行ったな。

人の話しは最後まで聞きなさい、通信簿に落ち着きが無いって書くぞ？

俺はシグナムに手招きした。

白衛「シグナム、聞きたいんだけど、シャルは味見してた？」

シグナム「・・・」

沈黙が物語ってるよね？

ある人気ゲームに出てくる、主人公の幼馴染の兄さんも言っていたけど・・・うまいだの何だのと能書きゃいいから味見しろよ！

シャル「はーい、お待たせしました♪」

コト

全員「「「「「・・・」」」」」

はやて「な、なあシャル、これなんや？」

シャル「何って、お茶ですよ？」

限りなく小豆色してるんですけど？

原料は一体何使った？聞きたいような、聞きたくないような。

ボコボコッ！

泡立ってる、魔女が笑いながらかき回してる魔女鍋を連想してしま
うな。

あ、何処からか1匹のハエが飛んできた・・・ハエがたかるお茶っ
て飲みたくないよな？

プーン・・・ポト

お、お茶の上を通過した途端に息絶えた・・・。
効果は抜群だ！
と、ポケモン風に言ってみたが・・・。

白衛「シャル、俺には放射性廃棄物を飲む習慣は無いぞ？」

シャル「違いますよ！れっきとしたお茶です！さっき淹れたばかり
ですよ！」

シグナム「さすがに、このヘドロは廃棄した方が良さそうだな」

シャル「お茶です！」

ヴィータ「そだな、そのまんまにしてたら、次の日にはハエのヘド
ロ漬けが出来てそうでイヤだし」

シャル「お茶ですってば！！！」

ザフィーラ「白衛、今日は随分遅かったが蒐集していた訳では無さ

そうだな、何をしていた？」

シャル「うわあああああん！」

キッチンの方に泣きながら走って行ったか・・・。

気の毒だが俺は自分から毒をあおる様なマネはしたくない。

シグナム「それで、どうしてたんだ？」

白衛「管理局の人間が接触してきた、協力するってさ」

全員「「「「！！」」」」

バン！

ヴィータ「信用出来ねえ！」

白衛「俺も接触してきたのが彼女達じゃなかったら、そうだったよ」

ザフィーラ「・・・奴等か」

白衛「実際、はやてを主として覚醒させるには、蒐集を完了して、暴走を起こす必要があるだろ？失敗するつもりは無いけど、その場合の根回しが必要だ、保険があるに越したことは無いよ」

ヴィータ「だからって！！」

白衛「管理局は信用できないけど、1度刃を交えた相手が信用にた
るかどうかは判断できるだろシグナム？」

シグナム「……………」

白衛「今回の事件は、俺達と、俺達が戦った戦艦アースラのメンバーのみで担当するって約束させたよ、他の連中からの介入は無い」

シグナム達は、管理局側がはやてに対して、拘束行為を行うのではなく、救命行為に尽力し、他部署からの横槍は入れさせないとリンディさんから約束を取り付けたと聞いて、とりあえず、了承はしてくれた。

良かった、これで、了承してくれなかったらどうしようかと思った。

ザフィーラ「1つ聞きたい、何故やつらはお前の居場所が分かった？」

白衛「俺が八神家に居候する前に居候していた家があるんだが、そこがあの白い子の家だったんだ、路銀稼ぎにその子の親の経営する喫茶店のバイトしてんだ」

シグナム「今まで、あまり管理局と鉢合わせしなかったのは……」

白衛「向こうに置いてきた俺の身代わりが情報を流してくれたから」

ヴィータ「あの銃を持った奴か？どんな面してんだ？」

白衛「俺と同じ顔だよ、ヴィータ達で言うところのデバイスみたいな奴なんだけど、実体化することも出来るんだ」

ヴィータ「どんなデバイスだよ……」

白衛「今度紹介するよ、今は、まだ向こうに居るからさ」

宵闇は、翠屋のシフトの都合上、勝手に居なくなるわけにはいかず高町家にUターンさせた。

ちなみになのはに「貴様の兄を葬っても良いか？」と真顔で聞いていた。

・・・予想はしていたけど、いびられてたんだな。

なのはも多少、いびられている場面を目撃していたのか、苦笑いしていたな。

はやて「白衛さん、その管理局の人達と会う日はいつです？今度友達のすずちゃんか友達が友達を紹介してくれるんです」

あつ、そうか、本当なら今頃発作が起きたから病院に居るはずなんだ。

お見舞いイベント潰しちゃったよ。

まあ、なのは達が来るんだし、そのときに紹介して、次の日でもリンディさん達に会えばいいかな。

白衛「ん、分かった。その友達が来た次の日でも大丈夫だよな？」

はやて「ええ、大丈夫です」

白衛「じゃあ、向こうの人にはそう伝えとくよ」

よし、話しも纏まったし・・・どうしようか、この料理？

はやて「さ、さくってお風呂に入ろかな」

ヴィータ「あ、あたしも！」

シグナム「私は庭で素振りをしてきます」

ザフィーラ「……シグナム、付き合おう」

ほう、逃げますか。

では逃げられないようにしてやんよお！

白衛「君達は、この場から動けない、俺が言うんだから『絶対に』」

【有言絶対実行】アブソリュート、死なば諸共ってね♪

シグナム「う、動けん!？」

はやて「なんでや!？」

ヴィータ「白衛、動けるようにしろ! あたしはまだ死にたくねえ!」

白衛「逃げたら、俺だけが食わないといけなくなるじゃないか、よく言うだろ? 『我等、生まれた時は違えど、死すべき時は同じと願わん』 ってさあ」

有名だよ、歴史的にも、アニメ的コードギアスねにも。

ヴィータ「こんなくだらねえ死に方ごめんだ!」

白衛「そういや、作った本人は何処行った? 「聞けよ!」」

ザフィーラ「キッチンの方に行ったままだな」

はやて「泣き止んでるとええんやけど・・・?」

白衛「なんか音が聞こえるな」

キッチンの方から、何かを切ったり焼いたりする音が聞こえる。

まさか・・・みんなの顔を見渡すと俺と同じ事を思ったのか
顔が引き攣っておいでです。

しばらくして、やはり産業廃棄物製造者が得意満面な顔してやって
来やがりました・・・新たな料理を持って。

シャル「見てください!私だって、これくらい出来るんですよ?」

みんな、「ああ、やっぱり」、といった顔してますね。

まあ、見た目はまともだけどさ、さっきのヘドロ茶の威力を見ると、
外見〓美味しさと考えるのはマズイ気がしてなんのですよ。

シャル「さあ、白衛ちゃん、召し上がれ♪」

結局俺かよ!?!あとお前ら、あからさまに助かったって顔してんじ
やねえ!

シャル「ほら、こんなに美味しそうなんですよ?」

美味しそうって、今回も味見してないのかよ!?!
ヴィータ!こっちに向かって手を合わせんな!!

シャル「さあ!」

白衛「・・・ゴクリ」

バク モグモグ ゴクン

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

シャマル「ど・・・・どうですか？」

はやて「し、白衛さん、大丈夫ですか？」

シグナム「ヴィータ、洗面器と氷枕を、ザフィーラは薬箱を持ってきてくれ」

ヴィータ「いや、まだ動けねーから無理だ」

白衛「・・・・・・・・・・美味しい」

全員「「「「・・・・・・・・え！？」「」「」」

はやて「ほ、本当ですか！？」

ヴィータ「しっかりしろよ！そんなわけねえだろ！！」

シグナム「無理に嘘を吐かなくてもいい、優しい嘘は人を傷付けるだけだ！」

ザフィーラ「正直に言っても誰も咎めん」

シャマル「みんな酷いです！ パクツ・・・ほら美味しいじゃないですか！」

いや、どれもマジでまともだ。

すごく美味いってわけじゃないが、普通に食える味だ。

白衛「本当に美味しいよ！みんなも食べてみろって」

ヴィータ「だったらさっさと拘束解けよ！」

白衛「ああ、忘れてた、みんな自由に動けるよ、俺が言うんだから『絶対に』」

はやて「どれどれ、・・・！ほんとや、美味しい！」

シグナム「・・・ほう」

ヴィータ「へえ、まともじゃん」

ザフィーラ「ふむ」

シグナム「あとはこれが、まぐれじゃない事を祈るだけだな」

シャル「シグナム、酷いですよ！」

いや、これなら、これからのシャルの料理も安心かな？

・・・・・・ドクン

・・・ん？

・・・・・・ドクン

・・・なんだ？

ビキー！

白衛「ぐふっ！・・・き、来た」

・・・遅効性かよ。

ヴィータ「ん？どうした？」

シグナム「具合でも悪いのか・・・具合？」

はやて「ま、まさか・・・」

ザフィーラ「・・・」

シャル「え？ええ？」

数分後、シャルを除く全員が、テーブルに突っ伏していた。

気分的には巢に殺虫薬入りの餌を持ち帰った、Mr. コックローチ。

シャル「うう、どうしてですか！？私は大丈夫だったのに！」

ヴィータ「シャルの胃袋に結界がはって「そんな器用なこと出来ませんよ！」・・・じゃあなんで無事なんだよ？」

はやて「ものすごい頑丈な胃袋してんのやろなあ、チタン製やろか？」

なんでシャルは平気だったんだ？

同じもの食ったよな？

みんなそれぞれ思い思いに箸を伸ばしてたわけだし、1つの皿のみがアウトってわけじゃ無さそうだ・・・ひょっとして。

白衛「シャル、お前、この料理の中で食ったのどれ？」

シャル「え、これだけですよ？みんなに沢山食べて欲しいですから」

謎は全て解けた！グランパの名に賭けて！！

白衛「シャルが無事だったのは、1品しか食わなかったからだろ
うな」

シャル「え？」

シグナム「つまり、2品以上を口に入れたら・・・」

はやて「さっきみたいになってまう、と」

ヴィータ「・・・洗剤かよ」

白衛「念のために聞くけど、油の代わりに洗剤使ったり「しませんよ!!」だよねえ」

まあ、シャルの料理下手は長い時間かけて矯正していく方針で決定したが、しばらく、今回の事態を引き起こした犯人には、暫くの間、キッチンへの出入り禁止令が下ったのは言うまでもない。

第18話 洗剤やシャンプーの性質を持った料理ってどうよ？（後書き）

ドアノブ 「次回か次々回でアリサとすずかを出そうかと予定しています」

白衛 「以前翠屋で会ったきりだな」

ドアノブ 「どんな風にフラグを立てるのか！？また風呂場か、もしくはトイレか！？」

白衛 「立てるにしても、もっとまともな立て方考えろ！」

第19話 翠屋の仕事Ⅱストレスの原因だと思うのは俺だけ? (前書き)

白衛「今回、かなり無理矢理&グダグダ感が強いな」

ドアノブ「返す言葉ありません」

白衛「これからの展開も考えてないんだろう?」

ドアノブ「アイ○ンマンかハ○クでも来てくれないかな?」

白衛「どっちも洋画出身だ!魔法相手にどうしろってんだよ!?」

ドアノブ「もしくは、○ズ・ライトイヤーでも・・・」

白衛「おもちゃが出てきて何か解決すんのか!?

第19話 翠屋の仕事Ⅱストレスの原因だと思うのは俺だけ？

なのは SIDE

こんにちは、高町なのはです。

私は今、お友達のアリサちゃんのリムジンに乗って、すずかちゃんのお友達の家に向かっていきます。

アリサ「すずか、はやてとはどうやって知り合ったの？」

すずか「うん、図書館で知り合ったの、本の話で盛り上がったちゃって」

なのは「へえー、どんな子だろう」

すずか「優しい子だよ、遠い親戚の人と一緒に暮らしてるんだって」

フェイト「楽しみだね」

すずか「あ、アリサちゃん、次の信号を右に曲がったらすぐだよ」

アリサ「わかったわ」

プレゼントも持ったし、喜んでくれるといいなあ。

アリサ「それにしても、なのはの家に居候してるあの女装店員、今日も相変わらずだったわね」

あはは、本当は、白衛さんのデバイス・・・神剣って言うんだっけ

？宵闇さんが姿を真似てるんだけど見送りに出てきたときにはもう、メイド服だったもんなあ。

すずか「でもアリサちゃん、最近白衛さんの話ばかりしてるよ？八割は悪口だけど」

アリサ「んな！」

フェイト「そうなの？」

すずか「うん、男なのに綺麗だ、とか、今歳は幾つなのかなとか」

アリサ「ち、ちよつとすずか！ち、ちがうわよ！男の癖によ、男の癖に女顔過ぎるのよ！！」

それに、あの顔でしょ？絶対実年齢よりも若く見えてるはずよ、純粹な興味よ！」

なのは「確か、20歳って言ってたよね？」

フェイト「うん、生まれてまだ20年って言ってた」

アリサ「絶対に見えないわよ・・・どんなに多く歳を見積もっても中学生くらいにしか見えないわ」

すずか「成人してたんだ・・・私達が成人したら、どうなってるんだろう？」

うーん、皺のある姿が想像出来ないよう。

っていうか、すずかちゃんもアリサちゃんも結構白衛さんの事気になるみたい。

むう、何かもやもやする。

フェイト「すずか、この家？」

すずか「うん、そうだよ」

アリサ「じゃあ、降りましょうか」

リムジンから降りて、呼び鈴の目の前にまで来ました。

カチ ピンポーン・・・・・・・・

アリサ「・・・出ないわね」

すずか「おかしいなあ、時間はピッタリだし、家で待ってるって言ってたし」

ガタガタ！

なのは「？何か家の中から音がしない？」

バリーン！ ドタドタ！

フェイト「確かにしてる」

アリサ「ひょっとして、泥棒！？」

なのは「じ、じゃあ早く警察に！！」

フェイト「待って、・・・声が聞こえる、少し近づこう、すずかと

アリサは念のためここに居て」

フェイトちゃんがそう言う。「私も行くわよ!」ってアリサちゃんも付いて来ちゃいました。

フェイト（なのは、気づいた? この家、結界が張ってある）

なのは（うん、でも、なんではやてちゃんのお家に?）

念話で話していたら、知っている声が聞こえてきました。

シャル「なんですか! ? どうしてお茶を出しちゃ駄目なんですか! ?」

白衛「いや、だから、お茶は俺が淹れるから、冷蔵庫のケーキを出すなりリビングに案内するなりしてろって!」

シグナム「シャル、お前のお茶はまたの機会でいいだろう?」

シャル「せっかく、はやてちゃんのお友達が来てくれる大切な日なのになんで何もさせてくれないんですかあ! !」

白衛「お前はその大切な日に、あのヘドロ茶を出す気か! ?」

シャル「ヘドロじゃありません! 普通のお茶です! !」

白衛「普通のお茶は小豆色じゃないし、泡立ったりしないし、ハエが集ったりせんわ!」

・・・ど、泥棒の心配は無かったみたいだけど、呼び鈴に気づかないくらい口喧嘩してるみたい。

なんで白衛さんがここにいるの?

なのは SIDE END

白衛「っていうかはやて、そろそろ友達が来るんじゃないか?」

はやて「あっ！ホンマや、少し時間過ぎとる」

白衛「さっき呼び鈴が鳴った気がしたし、少し見てくるよ、シグナム、くれぐれも、シャルから目を離さないようにな？」

シグナム「承知した」

シャル「最近私に対して、みんな扱いが酷くないですか!？」

ポイズンクッキングさえ作らなければほとんど完璧なのにな、天は二物を与えず、お荷物を与えたか？

まあ、呼び鈴は確かに鳴ってたし見に行くとしますか。

ガチャ ガン！

・・・今なんか扉に当たったな、まあ気にしない方向で。

白衛「扉に密着して何してたんだ？お前等」

アリサ「ッ！人の頭に扉ぶつけておいて他に言う事ないの!？」

白衛「いつも通り開ける扉に人がくっ付いているなんて誰が想像するんだよ？」

まるで完全に俺の方に非があるみたいに言ってくるじゃないの、このツンデレは。

アリサ「っていうか、あんたどうやってここに来たの!？車で来た私達よりも早いつてどういうことよ!」

なのは「ま、まあまあ、とりあえず何事も無かったんだし、入ろうよ」

フェイト「そ、そうだね」

とりあえず、3人の頭を撫でる。

うん、コブにはなっていないな。

白衛「はやても待ってるから中に入りな、一応、冷やすものもってきてやるから」

3人「「「お、お邪魔します／＼」」」

白衛「そういや、すずかはどうした？」

3人「・・・あっ!!」

白衛「置いてきぼりは可哀想だよなー、おーよしよし」

すずか「え、ええと、泣いてませんから頭を撫でなくても・・・／＼」

あのあと、すずかを呼んでリビングに行くと、シグナム達とフェイトが睨み合っててどうしようか途方にくれたよ。

病院でのお見舞いと展開が似てたから、互いに念話で会話しながら自然に振舞うように言ったは良いけど・・・。

なぜでしょうか？なのは、フェイト、アリサ、はやてがジト目でこ

っちを見えますよ？

白衛「・・・どうしたの？怖い顔して」

4人「」「」「なんでもありません！こういう目つきです！！」「」「」

・・・俺は何か怒らせるような事したのか？場を和ませようとしてるだけなのに。

あとそのセリフはヴィータのセリフじゃないの？

白衛「あゝシグナム、シャマルは？」

ここに居ないから不安を覚えるんだが？

シグナム「念のため、通信妨害を頼んでおいた、？さっきまでそこに」

シャマル「はゝい、おやつを持ってきました♪あと私特製のおも」
「だがそれはやめろ！！」「」

シグナムがシャマルを羽交い絞めにして、その隙に俺がおやつを奪い取ってはやて達に渡した。

ヘドロ茶は、氷の能力で凍結してゴミ箱にポイだ。

ドタバタとしながらも、楽しい時間が過ぎていった。

アリサとすずかが帰り、なのはとフェイトも帰ることになったので外まで見送っている。

なのは「じゃあ、はやてちゃんが闇の書の主なんですね」

白衛「ああ、定期的に魔力を分け与えるために一緒に居るんだ、お

まけに蒐集をしないと闇の書が癩癩起こすから大変だけどさ」

フェイト「でも、闇の書を完成させたら暴走して・・・」

白衛「その暴走するまでの間にはやてが管理者権限を使用して防衛プログラムを切り離し闇の書のバグを掃討する。そのためにみんなの力が必要なんだ」

フェイト「クロノも言ってましかど、どれだけの時間があるかも分からないのに、出来るんですか？」

白衛「シグナムにも言った言葉だけど、出来なければはやてもこの星も滅びるさ」

原作メンバー十俺だから戦力的には原作よりは上の方だし大丈夫だと俺は思ってるけど。

白衛「まあ、きみたち管理局とは敵対しなくなったんだし、明日にはアースラで作戦の説明するし気楽には言わないけど、肩の力抜いてこよう」

2人「はい！」

白衛「それじゃあ、また明日な・・・！？」

そう言って、俺は八神家に戻ろうとして、違和感に気づいた。

・・・気配が減っている、シャルの気配がない？

続いて、シグナム、ヴィータの気配も消えて、最後にザフィーラの気配も消えた。

！！・・・くそ！あの猫姉妹の事をすっかり忘れていた！

いや、管理局と協力関係になったことで奴らが介入する事はなくなったと油断していたのかもしれない。

白衛「フェイト、アースラに連絡してれ、闇の書が完成したようだ、結界の準備をしてくれって、クロノたちが来たらこっちに来てくれ」

フェイト「はい！」

なのは「私ははやてちゃんのところに行きます！白衛さんは？」

白衛「俺も同じ、けどちょっとシメる奴らが居るんだ、ほんの少し遅れる」

あのニャンコロ供には少し痛い目にあってもらおうか？

白衛「それじゃあ、行きますか、来い！宵闇！！」

すると影から剣の形をした黒い塊が出てきた。

所々、紅い文字が走っていて、見た者は禍々しいと思うだろう。

なのは「え！？あれが宵闇さん？」

フェイト「本当に、剣の形なんだ」

白衛「今は時間との勝負だ、見てないで行動しろ！」

2人「は、ハイ！」

宵闇に血を与え、実体化させる、？何を微笑んでんだ

宵闇「いや、主と共に戦場を駆ける、神剣として喜ばしく思えてな、人間供に愛想笑いを浮かべるのも皿を洗うのもウンザリだ、ふふふ、やはり神剣はこうでなくてはな！」

・・・すまん、事件が片付いたとき、なんか望みがあれば聞くから。

白衛「さあ、始めようか」

宵闇「果て無き狂気に終焉を・・・」

第19話 翠屋の仕事Ⅱストレスの原因だと思うのは俺だけ? (後書き)

ドアノブ「現在迷ってる事が2つあります」

白衛「んだよいきなり」

ドアノブ「1つはリインフォースを原作どおりにするか、原作無視で生き残らせるかってことです」

白衛「確かに迷うところだな」

ドアノブ「2つ目はPSPで発売された魔法少女リリカルなのはA's ポータブルの話を書くかどうか迷っております」

白衛「戦闘描写の苦手なお前が書けると思えるなら良いんじゃない?」

友(仮)「でもあんた確か、ザフィーラとシグナムしかクリアしてないわよね?」

ドアノブ「……」

白衛「まあ、どうするかはお前が決める、書いた場合9割近くの確率でグダグダになるだろうけど」

第20話　もうちょっとボコリたかったけど、時間の都合上やめて、あとでボコ

白衛「サブタイトルの意味が分からないんだが？」

ドアノブ「いや、猫姉妹がムカつくから徹底的にボロツカスにしてやりたかったんだけど、時間が無いときにそんな事出来ないじゃん？だから事件後、あらためとフルボッコにしようと思って・・・」

白衛「粘着質な奴・・・」

第20話　もうちょっとボコリたかったけど、時間の都合上やめて、あとでボコ

リーゼロッテ　SIDE

11年前に起きた闇の書の暴走、お父様の友人のクライド君、つまり、私達の弟子（クロ助）の父親が死んだ。

それからずっと、私達は独自に闇の書の転生先を探していた。

血眼になって探してやっと、現在の主である八神はやてを見つけた。でも、闇の書は完成前の状態で確保しても意味を成さない、主と共に捕らえたとしても主を取り込んで、転生してしまう。

目の前に、あの悲劇を引き起こしたきっかけがあるのに手を出せないのは歯痒くて仕方が無かったな・・・。

でも闇の書の永久封印する方法は出来上がっている、あとは闇の書の完成を待つだけだった。

闇の書が起動して、八神はやての容態の悪化、守護騎士達の蒐集行為の開始、ここまでは計画通りだった。

でも、途中から、あの鎧の2人組や銀髪の女が出てきてから計画は狂い始めた。

蒐集当初は、魔導師も魔法生物も見境なく蒐集していたのに魔法生物しか襲わなくなった。

魔法生物の居る世界を監視していても、いつも私達管理局が監視していない世界で蒐集している、こちらの人員の数が限られているとはいえ、まるでこちらの情報を知っているかのように行動し始めた。八神家に設置した監視カメラを見ると、闇の書のページは驚く速さで埋まっていた。

あの女にも闇の書に対して、何かの手段を持っているみたいだけど話を聞いていると確実性に欠ける。

多くの命と世界の命運が掛かっているのにギャンブルでもしているつもりなのか？

不安を覚えたあたしと、アリアはあの女が居ないのを見計らって、守護騎士達のリンカーコアを蒐集して、闇の書を完成させた。

八神はやての友人の姿をして、絶望を抱かせた。

あとは暴走する前にデュランダルで凍結させて次元の狭間か凍結世界に放り込めばもう2度とクライド君のような犠牲者を出す事はない。

アリア（よし、あとは暴走前に永久凍結させればいいだけよ）

ロッテ（じゃあ、一旦お父様のところに行って報告しようか？）

今までの苦勞がやっと報われる、何よりお父様の願いが叶う。

もう2度と闇の書の犠牲者が出る事は無くなる、その事を考えると自然と笑いがこみ上げてくる。

でも、転送用のゲートを開けようとしていると、今まで感じた事がない程の怖気が走った。

白衛「何処に行くつもりだ？やるだけやってトンズラか？」

宵闇「まあ、こやつ等に正面から挑んでくるという度胸があるとは思えぬがな」

振り向くと、あの女が2人居た。

双子だろうか？分からないけど、これだけは分かる。

私達は、無事ではいられない、完膚なきまでに叩きのめされ、破壊される。

戦いに勝ったら、それで終わり・・・じゃない。

きっと私達は殺される、2人から発せられている殺気は私達が存在している事を許さないと断言しているように思えた。

リーゼロッテ SIDE END

白衛「何とか言ったらどうだ、それとも仮面と同じで口が無いのか？」

宵闇「主よ、そんなに殺気立っていては喋る事すらかなわんのではないか？」

白衛「チッ！」

抑えているつもりだったんだが、抑えきれていなかったか。

宵闇「まあ、主の気持ちは良く分かる、我と主は繋がっておる故な、それに主には注意したが、こやつらの行動には虫唾が走る！」

仮面の男1「お、お前達は何故、「ズン！」・・・」

白衛「やっと口を開いたな、だが質問するのは俺だ」

片方の仮面の顔スレスレに拳を放つ、手加減してはいるが仮面にはヒビが入り背後の壁は崩れた。

白衛「お前らは監視カメラで俺達の計画も知っていたはずだ、何故お前らの計画を強行した？」

仮面の男1「ふん！あれが計画だと？笑わせるな、ギャンブル性が強い行き当たりばったりな策ではないか！そんな事をせず、「主」と凍結封印して次元の狭間にポイってか？」なっ！」

白衛「以前、管理局の執務官殿にも言ったんだけどさ、お前らのエ

ゴで犠牲になった奴は災難だよな、こうしなければ被害が拡大する、これは必要な犠牲だといって、他人の勝手に人生の幕を下ろされるんだから、じゃあ今はやてに向かって言えるのか！？お前の犠牲で世界は平和になるんだって言ってみろ！！」

仮面の男1・2「・・・・・・・・」

白衛「手を下す方は楽だよなあ！悲劇の主人公ぶって偽善だの何だのと嘯いて世界のため人のためと大義名分掲げてやってることは幼い子供を永遠に孤独にすることだけなんだから！」

仮面の男2「ッ！貴様に何が分かる！？あの人がどういう思いで決断されたのかも知らないくせに！！」

白衛「そこが悲劇の主人公ぶってるって言うてるんだよ！何故、転生先を探すと同時に、封印方法ではなく、解決策を探さなかった！？闇の書の特徴を知って諦めたんじゃないのか！？」

仮面の男1「黙れええええ！」

片方の仮面が突っ込んできた、接近戦を挑むってことはロツテのほうか、迎え撃とうとしたら宵闇が前に出ていた。

宵闇「フム、どちらが以前ぶちのめした方が判別がつかんが、今回は文句言わずに相手をしてやろう、死ぬか生きるかは貴様の力次第だかの？」

白衛「あれま、先を越されたか・・・「バン！」ん？」

顔に何か当たったと思ったら、もう片方、多分エリアの方が俺に魔

力弾を撃っていた。

と言っても、当たったところで痛くも痒くもない。

仮面の男2「化け物が!!」

白衛「ま、否定はしないよ」

俺が近づこうとすると相手は後退し、壁に追い詰められると空を飛び距離をとって攻撃してきた。

白衛「時間が惜しい、ちゃっちゃと終わらせる。殺したくはあるけど殺さない、殺さないが、1発だけ殴らせろ！」

グシャ！ バリン！

本気で力を入れたら、こいつが即死してしまう、懷までもぐり、加減して顔面をアップで殴った。

仮面は砕け、変身魔法が解け、猫耳少女の姿になった。

宵闇「こちらも片がついたぞ主よ、全く歯応えは無かったがな」

向こうにも猫耳少女がズタボロになって転がっている。

おいおい、容赦ねーな、まあ別にこいつら好きくないし構わないんだけどね。

クロノ「白衛!!これは一体どういうことだ!?!」

やっと到着か・・・

白衛「こいつらが仮面の2人組の正体だ、詳しい事はこいつ等の飼
い主に聞いてくれ、使い魔らしいからな」

クロノ「・・・やっぱりか」

白衛「闇の書の管制人格は俺が何とか抑えとくから、飼い主に余計
な事させるなって釘を打っておいてくれ、計画の途中で介入された
んじゃないまったもんじゃない」

クロノ「だいじょう・・・いや、愚問だったな」

白衛「それじゃあ、なのは達の所に行きますか、宵闇」

宵闇「うむ」

俺達は影を使ってなのは達の所に転移した。
すると・・・！！

管制人格「闇に染まれ・・・」

白衛「なのは、フェイト、無事か・・・ってタイミング悪！！」

宵闇「転移が仇となったな・・・回避が間に合うかどうか分らん」

なのは「白衛さん！フェイトちゃん！」

白衛「宵闇、なのはを頼む、俺はフェイトを！」

宵闇「承知！」

管制人格「ディアボリック・エミッション」

管制人格が拳を突き出すと、黒い電流が走る黒い球体が巨大化し、こちらに迫って来た。

なのはとフェイトを抱えて、その場を離脱する、影に転移していたら衝撃まで一緒に転移してしまう！！

白衛「喋るなよ、舌を噛むぞ！」

・・・やっぱりタイミングが悪かった！振り切れない！！

俺達はなのはとフェイトを前方に放り投げ、宵闇と文殊で防御結界を張った。

俺達は押されながらも防ぎきった。

宵闇「塵も積もれば山となるか、今まで集めたリンカーコア1つ1つはちっぽけでも666もの数となればそれなりの力を持つようだな」

白衛「・・・手が痺れた」

なのは「痺れたって・・・」

フェイト「規格外・・・」

なんだかんだで、この身体ってチートだよな。

そこ！キチ○イとか言うなよ？

・・・待てよ？舞台が八神家か病院の違いだけで原作とほぼ同じだよな？ってことは！！

白衛「なのは、フェイト！結界内に一般人が迷い込んでないか確認

を取ってくれ！宵闇も影を使って探してくれ！」

宵闇「承知した・・・」

なのは「え、ええ？」

フェイト「どうしたんですか！？」

宵闇「主よ、居たぞ、昼間の童女共が迷い込んでおる。誰も居らぬ街に困惑しておるな」

フェイト「わらめ？」

白衛「女の子って事だ、つまりアリサとすずかが結界内に居る、保護しないと巻き込まれる可能性もある、助けるぞ」

2人「ええ！？」

フェイト「は、早く助けないと！」

宵闇「飛行しようが、転移しようが魔力反応で気づかれるなら影から転移するぞ、その方が早い」

なのは「え、こ、この中に入るんですか？」

宵闇が展開した影のゲート、まるで少し大きな水溜りのように時々波紋を広げている。

怖いのか、しり込みしている二人に俺は・・・。

白衛「大丈夫だって、人体に悪影響なんて無いから、ほら、ト○ロ

の○イかさ○きになったと思って」

真っ黒黒助でておいで。

2人「無理!!」

宵闇「時間が無いのだ、早く行け!!」

ドガッ!

2人「きゃあああああああ!!」

宵闇、蹴り飛ばすんじゃなくてせめて、押してやれよ。

第20話 もうちょっとボコリたかったけど、時間の都合上やめて、あとでボコ

白衛「ジブリネタ使うなよ・・・」

ドアノブ「どうしても書きたかったんです」

白衛「あと、宵闇の性格がドンドンアグレッシブになってる気がするんだが？」

ドアノブ「気にしたら負けだよ？」

白衛「何にだ!？」

第21話 感動するシーンに涙ぐんで悪いか! (前書き)

ドアノブ「今回、かなりグダグダです」

白衛「しかも、最後の詠唱は丸々パクリだよな？」

ドアノブ「だって、すごく気に入ってたんだもん。使いたかったんだよ!」

白衛「少しは自分で考えろよ」

第21話 感動するシーンに涙ぐんで悪いか！

アリサ SIDE

一体何がどうなってんの？

はやての家を出て、すずかと街を歩いていたら突然空が暗くなって、気づいたら私達以外誰も居なくなっちゃった。

建物の中も灯りはついてるのに、誰も居なかった。

まるで、世界で私達だけが取り残されたように思えてしまう。

それに・・・「ズガン！！」

さっきから遠くのほうで爆発音が聞こえる。

ホントに一体何なのよ！

とにかく、すずかと音のする方から遠くに逃げようとしたら後ろから聞きなれた声があった。

なのは・フェイト「きゃあああああああ！！」

アリサ SIDE END

なのは「こ、こわかったよう」

フェイト「酷い・・・」

宵闇「時間が無いのに無駄に時間を浪費する貴様等に非があるのだ、後押しをしてやっただけ有難く思え」

白衛「よし、2人とも無事だな」

しかし、アリサとすずかの影から出るとは思ってたな。

アリサ「なのは、フェイト!？」

すずか「白衛さんも・・・2人？」

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん、ええと、これはね「今は説明よりも避難させる事を考えろ、奴がこっちに向かってきてる、宵闇、悪いけど頼む」

宵闇「承知した、童女共、我に掴まれ」

アリサ「なっ!どうなってんのよ、どうしてあんたが2人居るのよ!？」

宵闇「説明は後でしてやる、今は1刻を争うのだ」

白衛「なるだけ、丁寧に運んでやりな」

宵闇「善処しよう」

グワシッ

アリサ「ちよっと!善処するとか言ってるんで首根っこ引っ掴むのよ!?!私達は猫じゃないのよ!!!」

宵闇「ふん、よく吼える童女だ、運んでもらえるだけマシであろう?それともこの危険地帯に置き去りにして欲しいと?」

アリサ「誰もそんなこと言ってないでしょ!」

何よコイツ！喋り方は尊大って言うか古臭いって言うか、態度はとても大きいし、あくもう！訳わかんない！・・・ちよつと何よこの黒い水溜りみたいなの。

アリサ SIDE END

おゝい、口喧嘩してないで避難してくれ。

白衛「どっか、戦闘に支障の出ない所に避難させてくれ」

宵闇「では、すぐに戻る」

そういうと、2人を影のゲートに無理矢理引っ張り込んでどっかに行った。

なのは「・・・見られちゃったね」

フェイト「・・・うん」

白衛「いつかはこうなってたと思うぞ？付き合いの密度が濃ければ濃いほど秘密がばれる可能性が高くなるってことだからな、むしろ墓まで隠し通せる秘密の方が少ない」

フェイト「そうだけど・・・」

白衛「まあ、全てが終わってどう説明するかは君らが決めな、ありのままに話せば受け入れてくれると思うけどね、友達なんですよ？」

2人「・・・はい！」

白衛「さてと、そろそろ真面目に行きますか」

顎をしゃくって、上を見ると管制人格が来ていた。

・・・？攻撃してこないのは何故だ？

管制人格「・・・お前か、白衛」

白衛「俺を知ってんのか？初対面のはずだけど？」

管制人格「我は、騎士達の心とリンクしている。だから蒐集を手助けし、主を救わんとした貴方の事も知っている。・・・騎士達同様、信頼しているが、主の願いを叶える邪魔をするのなら容赦はしない。出来ればすぐに立ち去って欲しい」

白衛「一応はじめまして・・・聞くけど、はやての願いって何よ？こんな世界が夢であって欲しいってか？」

管制人格「ああ・・・愛する騎士達を奪った者達に永久の闇を・・・主には穏やかな夢の内では永久の眠りについて「自己解釈で勝手に決めるなよ」・・・どうということだ？」

白衛「シグナム達とリンクしてるって言ったな？じゃあはやてが、世界の終わりなんて望む子かどうか分かるだろ」

管制人格「しかし、主は願った、大切な家族を傷つけたこの世界が悪い夢であって欲しいと」

白衛「誰だってそうだよ、少し上手いかなかったり、辛い事があると逃げ出したくなる。逃げ出したくて、こうだったらいいのにと、世界なんて滅べばいいって現状を回避するありえない可能性を

考え縋ってしまおう。」

管制人格「……………」

フェイト「……………」

^{アリシア}死者が蘇るという可能性に縋った^{ブレシア}母親を思い出したのか、フェイトの表情が暗いな。

俺は、フェイトの頭にポンと手を置き、撫でながら話を続けた。

白衛「お前の主は、そんな後ろ向きな奴だったか？ 違うだろ、中にはやてが居るんだよな？ もう1度はやての願いを聞いてみろよ」

管制人格「……我は主の願いを叶えるだけ」

なのは「そんな願いを叶えて、はやてちゃんは本当に喜ぶの？ 願いを叶えるだけの道具でいて、貴女はそれで良いの!？」

突然地鳴りがし、地面から炎柱が飛び出した。

……崩壊が始まったか。

白衛「暴走するまで間違った願いを叶えるつもりか、主の願いを叶えるという言葉が反故になるぞ、主の願いを正しく叶えろよ」

管制人格「私は、主の願いを叶える魔導書「だったら、はやてが独りだった時に願っていた事は何だ!？ 家族と過ごすことじゃないのか!？」…………私もしきに意識を失う、意識のあるうちに主の願いを叶えたい」

《Blutnd Dolch》

管制人格「闇に、沈め」

・・・説得は暖簾に腕押しか、じゃあ、実力行使で止めてやる！

白衛「この攻撃は、俺達に当たらない、俺が言うんだから『絶対』に」

煙が晴れると、俺達が無傷で立っていた。

1つも掠らなかつた事に管制人格は驚いてる。

白衛「説得しても止まるつもりが無いのは分かった。だったら、お前の行動を阻むだけだ。はやてが目覚めるまでな！」

地面を蹴り、奴の正面まで跳んだ。

まさか飛んでいる自分の所まで跳躍してくると思わなかったのか、驚いた顔をしてる。

白衛「【炎の能力】リトルボーイ！！」

管制人格「盾」

防がれはしたものの、盾ごと後方へ吹き飛ばした。

管制人格「炎を纏った攻撃・・・Bランク程度の魔力と推察、他の魔力的反応は皆無、なのにこの威力・・・まさか腕力のみで我を圧倒したのか？」

白衛「敵が目の前にいるんだ、悠長に戦闘考察している暇は無いんじゃないのか？」

俺は奴に向けて手をかざした。

【磁力の能力】マグネティックワールド 特殊磁界 管制人格

管制人格「!?!」

白衛「もう1度吹き飛ばせ! 【圧力の能力】インパルスプレス!!」

なのは「い、今の何したんですか!?!」

白衛「空気を圧縮して放ったんだよ、目に見えないだけあって防ぐのも難しい……!?! 避ける!」

なのは・フェイト「え!?!」

管制人格「穿て、ブラッディダガー」

吹き飛ばした管制人格が素早く体勢を立て直し、俺達の死角から攻撃してきた。

なのはのほうに首を向けなかったら気づかなかったな。

【有言絶対実行】アブソリュートは言葉を短くしても間に合わない、
……なら!!

白衛「【覚醒召還】コンセプション! ケルベルス!!」

2人を背後にかばい、ケルベルスに変身してアーミットの装甲で攻撃全てを受けきった。

なのは「白衛さん!」

フェイト「大丈夫ですか!？」

白衛「大丈夫、傷1つないよ、それにしても、早くはやてが目覚めてくれんかね？」

何か不安になってきた、俺が介入した事で原作とズレが生じてるのか？

管制人格「貴方のその鎧は厄介だな、固い上に並大抵の魔法は弾き返してしまう。貴方1人だけでも手を焼くというのに」

なのは「アクセルシューター、シュート！」

フェイト「フォトンランサー、ファイア！」

管制人格「3人がかりとはキツイ」では6人がかりなら貴様を拘束可能か?・・・そういえばもう1人いたか」

アルフ「こらあ!今私達をカウントしなかったな!」

宵闇がアルフ、ユーノと一緒に転移してきた。

宵闇「主、童女共は戦闘の余波が届かぬ場所に置いてきた、こやつ等は転移の際に見かけたのでここまで連れてきたぞ」

白衛「ご苦労様、アルフとユーノも来てくれてありがとうな」

ユーノ「あはは、アルフはともかく、僕は戦闘では補助的なことしか役に立たないけどね」

アルフ「あいつ、私らを省きやがった！絶対ぶっ飛ばす！！」

なのは「？・・・闇の書さんの動きが止まったよ？」

はやて「あの！外の方・・・管理局の方！うちは、そこにいる子の保護者、八神はやてです」

なのは「はやてちゃん！」

フェイト「はやて！」

はやて「なのはちゃん、フェイトちゃん！？ホンマに？」

なのは「うん、なのはだよ。色々あって闇の書さんと戦ってるの」

白衛「はやて！！」

はやて「白衛さん！！」

白衛「ちゃんと目覚める事が出来たんだな」

はやて「はい！！・・・でも魔導書本体からのコントロールは切り離れたんやけど、その子が走っていると管理者権限が使えません。今そっちに出てるのは自動行動の防御プログラムだけです。何とかその子を止めてください」

白衛「OK、要するに、魔力攻撃を加えればいいんだろ？宵闇！」

宵闇「承知」

精神面で繋がっているだけあって俺が望む事が分かるらしい、宵闇は剣の形になり、俺の手に収まった。

ケルベルスを解除し、宵闇を構えて魔力を集中させる。すると、足元に巨大な漆黒の魔方陣が展開された。

ユーノ「見たことも無い魔方陣、それにすごい魔力！」

アルフ「なんてデタラメな」

白衛「闇よ、我が眼前の障害を打ち貫け！サクリファイス！！」

呪文名を唱えると、魔方陣から黒い魔力砲撃が発射された。

・・・なんかスターライトブレイカーに似てるな。

まあ、こっちは口径を絞って周囲の被害を抑えてあるし、威力も数段上だけど。

白衛「これで、はやてが管理者権限を使用できるな、・・・ん？なのはどうした暗い顔して」

なのは「・・・なんでもありません」

白衛「いや、そんな人差し指同士を合わせてイジケタ表情してたら気になるんですけど？」

直撃によって起きた黒煙から光が放たれる、とても直視できる光量じゃないな。

眩しさに全員が目を閉じ、光が収まり目を開けると、光を放つ光球の周囲に守護騎士達がいた。

なのは「ヴィータちゃん！」

フェイト「シグナム！」

シグナム「・・・我ら、夜天の主に集いし騎士」

シャマル「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

ザフィーラ「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

ヴィータ「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

光の球がひび割れ砕けると、中には杖を握ったはやてがいた。
杖を空に向け、叫ぶ。

はやて「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風・リインフォース、
セットアップ！！」

杖から黒白の光が飛び出し、はやてのバリアジャケットが形成して
いく。

形成が終わり、みんなと喜び合ってる、・・・うん、やっぱり感動
のシーンは何度見ても泣けてくる。

はやて「なのはちゃんとフェイトちゃんもごめんな、うちの子たちが
色々迷惑かけてもうて」

なのは「ううん」

フェイト「平気」

はやて「あれ？白衛さんは？」

シャル「はやてちゃん、あそこ」

はやて「白衛さん、どないしたんで・・・」

い、今こっち見んな。

チクショー！涙が止まんねー！

昔から、感動する小説やドラマを見ると自然と涙が出てくる。

男の癖にキモイってよく言われたっけ・・・。

ヴィータ「?・・・あっ！コイツ泣いてやがる!!」

白衛「うるせー！ほっとけ!!」

お前もさっきまで泣いてたろーが!!

あとクロノ、時間があと十数分しかないんだからさっさと降りて来いよ!!

はやて「ヴィータ、笑ったらダメや。ホンマに心配してくれてたんやから」

シャル「そうですよ？ヴィータちゃん」

シグナム「白衛、感謝する」

白衛「無事なら良い・・・」

クロノ「すまないな、水を差してしまうんだが、時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

白衛「やっと来たか、KYボーイ、時間が無いんだから早く来いよ」
クロノ「いや、まさかあんな珍しいものを見ることが出来ると思わなかったものでね」

くっ！KYを無視して、ここぞとばかりにからかってくる。
こいつは俺の中の悪戯対象のブラックリストに載せておく。
事件後、必ず悪戯してやる！

クロノ「巫山戯るのはこれくらいにして、あそこの黒い淀み、闇の書の防衛プログラムがあと数分で暴走を開始する。僕らは例の作戦でそれを止めなくてはならない」

白衛「だったら、俺をからかわずに時間を大切にしろよ！真っ黒クロ助！！」

クロノ「誰がだ！？」

はやて「ま、まあまあ、2人とも落ち着いてください」

シャル「確認します、バリアは魔法と物理の複合式が4層」

フェイト「バリアを抜いたら、本体に向けて私達の一斉砲撃でコアを露出」

なのは「あとは、ユーノ君たちの強制転移魔法でアースラの前に転送」

白衛「あとはアルカンシエルを放つだけ、・・・1日早まったな、本当なら明日実行するはずだったんだけど、まあ、ここまで来たら

もう少しで大団円だ」

クロノ「メンバーの指揮は白衛、君に頼みたい」

白衛「いや、クロノかシャルマルが指揮してくれ、俺はそういった経験は皆無だ。君の方が適任だよ」

シャルマル「分かりました」

さて、あと気がかりなのは・・・。

白衛「・・・はやて、身体は大丈夫か？」

戦闘後に魔法を初めて使った影響で倒れてしまうから、少し心配だ。はやて「大丈夫ですよ、みんなやリインフォースがいてくれますから」

宵闇「主よ、心配なら加護を付与したらどうだ」

白衛「加護？」

宵闇「主の魔力をここにいる全員に分け与える。そうする事で、全員の戦闘力が一時的に跳ね上がる。主はこの中でも飛び抜けて魔力量が多い、全員に、身体強化、攻撃補正、防御補正をしても主にとって負担にはならん、成功率を上げるなら、全員に主の魔力を供給させた方が良い」

俺の魔力の使い道ってなんかドーピングにしか使っていないような？

なのは「そういえばはやてちゃん、どうやって補給するの？」

はやて「えっ!? あ・・・その・・・く、首以外はダメなんですか
? / / /

フェイト「・・・首？」

宵闇「全員に加護を施す場合は、生命を司る言葉を紡げば良い、1
人1人に噛み付くよりは効率的だ」

白衛「生命を司る言葉って言われてもな・・・うん! 俺と宵闇にピ
ツタリの言葉があった」

クロノ「では、白衛が全員に魔力付与を与えたと同時に作戦開始だ
!」

全員「はい!!」

白衛「それじゃあ行くぞ!!」
俺は自分の気に入っている言葉を紡ぎだした。

It is twinkling stars in the s
ky of the lacquer black. (漆黒の空
に瞬く星よ)

Witness and exist a considerab
le, black maiden. (大いなる黒き乙女よ、照
覧あれ)

The light in daytime is made t

h e t e m p o r a r y. (昼の光は仮初めにして)

M o t h e r N i g h t w r a p s u s. (母なる夜は我
らを包む)

H a v i n g a b l a c k l u s t e r a l o n e t h
a t d o e s n ' t s e p a r a t e b l a c k w h i t
e (あやめもわかたぬ黒光りこそ)

W e r e s t a n d l o v e. (我らは憩い愛おしいむ)

H o w e v e r , t h e d a r k i s t o o w i d e.
(けれども闇は広すぎて)

H o w e v e r , t h e d a r k i s t o o q u i e t.
(けれども闇は静か過ぎて)

W e s t a b t h e h a n d t o t h e d a r k a
n d e x t e n d i t. (我らは手を差し伸ばす)

I f t h e e x t e n d e d h a n d t o u c h e d t
h e h a n d (伸ばした手が、手に触れたなら)

T h e m i r a c l e i s c a l l e d a l i f e. (その奇跡を、命と呼ぼう)

言葉が終わると同時に、俺達は自分の得物を構えた。

第21話 感動するシーンに涙ぐんで悪いか！（後書き）

ドアノブ「突然ですが、ここで注意を1つ」

白衛「この馬鹿作者、英文を翻訳サイトで検索したそうで、合っているかどうか確かめてないときた」

ドアノブ「申し訳ありません、そのあたりご了承願います。次回あたりには完結するかなあ？」

白衛「書いてるのお前じゃん、ちゃんと計画立てて書けよって言ってるだろ」

第22話 すいません、こんなに強力だとは思わなかったんです（前書き）

ドアノブ 「アカルト様、ご感想をどうもありがとうございます。永遠神剣関連のネタは今後番外編で考えております、黎明等を出そうかは現在思案中です」

白衛 「こんな馬鹿作者に感想をくださってありがとうございます」

ドアノブ 「今回はかなりグダグダな駄文ですが、生暖かい目で見えていただけると幸いです」

白衛 「今回はじゃ無くて、今回もだ、も！」

第22話 すいません、こんなに強力だとは思わなかったんです

クロノ「・・・始まる」

はやて「夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム・・・
闇の書の闇」

シャマル「白衛ちゃん、さっきの様な砲撃はまだ撃てますか？」

白衛「ああ、全然余裕だ。」

シャマル「では、白衛ちゃんは合図をしたら砲撃をお願いします」

白衛「了解だ、とっておきでぶっ飛ばす。っと来たみたいだな」

黒い淀みの中から闇の書が出てきたが飛び出てきた、見た目は今まで蒐集してきた魔法生物の特徴的な部位を足し合わせたって感じに見える。

頭頂部の女性体がミスマッチに見えてしまう。

おっと、見てないで俺も準備しないとな。

アルフ「チェーンバインド！」

ユーノ「ストラグルバインド！」

バインドって拘束だけが目的じゃないんだな、周囲の触手のバリケードを断ち切ってる。

ザフィーラ「縛れ、鋼の軛！！」

ザッファイーよ、君のその攻撃はゲームでも思ったが、拘束用には思えませんか？

ヴィータ「ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

なのは「ヴィータちゃんもね！」

ヴィータ「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン！！」

グラーフアイゼン《G i g a n t f o r m》

いつの間にかちゃんと名前で読んでる、なのはを仲間として認めたってことか。

ヴィータ「轟天爆碎！ギガント・シュラーク！！」

あ、バリアを破壊した・・・ごめんヴィータ、もうお前の事を密かにマ○オと呼ぶのはやめるよ、極力ね。

なのは「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます！」

レイジングハート《L o a d C a r t r i d g e》

なのはさん、貴女運動神経ほぼゼロなのに良くそんな杖捌きができますね？

レイジングハートを頭上で数回、回転させ構える。

なのは「エクセリオン・バスター！」

数本の触手が迎撃しようとなのはに伸びたが、レイジングハートが防いだ。

なのは「ブレイク、・・・シュート!!」

初発に4本だった砲撃が4本の中央から伸びた砲撃で1つとなって障壁に激突。

よし、また障壁の破壊に・・・なのはさん、ヴィータさん？なんでこっちに得物を向けます？

2人「何か失礼な事言われたような気がした」

白衛「言ってませんよ!？」

鋭いな、ニュータイプですか？

シャマル「次、シグナムとテストロッサちゃん!」

シグナム「剣の騎士、シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン、刃と連結刃に続くもうひとつの姿」

剣の柄と鞘をあわせ、カートリッジが1つ消費される。

剣が光を放ち、長弓の姿になったレヴァンティンが現れた。

レヴァンティン《Bogenform》

魔力の弦を引き、生成された矢をつがえる。

シグナム「翔けよ、隼!」

レヴァンティン《Sturmfallen》

矢が発光し、障壁に向かっていく。

障壁に突き刺さると同時に爆発が起き、障壁は粉々に砕け散った。

フェイト「フェイト・テストロッサ、バルディッシュ・ザンバー、行きます！」

カートリッジを3発消費し、斬撃を飛ばす。

残っていたバリケードをなぎ倒しながら闇の書の闇に向かっていく、バリケードを倒した事で威力が軽減されたのか、障壁を破るまでは至らなかったが。

フェイト「撃ちぬけ、雷神！」

バルディッシュ《Jet Zamber》

バルディッシュを上段に構え、一気に振り下ろす。

障壁と刀身がぶつかり、一瞬は止められたものの障壁を闇の書の間ごと切り裂いた。

障壁が全て破壊されたことで、ようやく障害と認識したのか、砲撃を撃とうと砲身に向けてきた。

ザフィーラ「盾の守護獣ザフィーラ、砲撃なんぞ撃たせん!!」

三角形の白い魔方陣が展開され、砲撃を撃とうとしていた触手が海から現れた白い柱に串刺しにされる。

しかし、1匹だけ足掻いてザフィーラに向けて砲撃を放った。

ザフィーラ「ぬう!？」

防ごうと防御の姿勢をとったザファイラの目の前に黒い壁が現れた。砲撃は黒い壁に当たった瞬間、砲撃を打った触手の影から飛び出し、触手は自身の攻撃で活動を停止した。

宵闇「影ある場所は我が世界、闇の淵は我が安らぎの場、闇ある所、影ある所は我の意のままなり、影は我にとって世界であり、世界に入り込むための入り口であり、出口でもある」

ザファイラ「転移の門か・・・礼を言う」

宵闇「ふん、・・・こちら準備は整った。主いつでも良いぞ」

宵闇は影のゲートを2つ展開し、こちらに向ける。

白衛「よし、【炎の能力】アグニッシュ・ワッタス炎神の息吹！」

マイクロウェーブ超分子振動を影のゲートに通して自分に向けて送る、同時に【熱エネルギー吸収能力】を使用し、力を蓄える。

はやて「彼方より来たれヤドリギの枝、銀月の槍となりて撃ち貫け！石化の槍ミストルティン！！」

シュベルトクロイツを振り下ろすと同時に、7本の槍が闇の書の闇に突き刺さる。

突き刺さった箇所から徐々に石化して行き、全体が石化し崩れ落ちた。

アルフ「うわぁ・・・」

シャル「な、なんか凄い事に・・・」

崩れた本体は身体の統一が取れないのか、今まで蒐集してきた魔法生物達が犇めき合っている。

エイミィ『やっぱり並みの攻撃じゃ通じない！ダメージを入れたそばから再生されちゃう！！』

クロノ「だが、攻撃は通ってる。計画変更は無しだ！行くぞ、デュランダル！！」

デュランダル《OK・Boss》

クロノ「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて永遠眠りを与えよ、凍てつけ！！」

デュランダル《E t e r n a l C o f f i n》

魔方陣から雪のような光が舞いちり海面に落ちる。落ちた瞬間に海は凍り本体を氷付けにする。

本体は氷付けにされてもなお鳴動し、こちらに向かおうとしている。

なのは「いくよ、フェイトちゃん、はやてちゃん！」

シャル「白衛ちゃんもお願いします！」

頷きあい、俺達は本体を見据える。

なのは「全力全開！スターライトオ！！」

フェイト「雷光一閃！プラズマ・ザンバー！！」

はやて「・・・おやすみな、響け終焉の笛！ラグナロク！！」

3人「「ブレイカー！！」「」」

桃色、金色、白銀の魔力砲撃が本体に直撃した、多くの生態部品が
あちこちに散らばっている。

煙が晴れ、本体コアが残骸を集めて再生しようと脈動している。

白衛「往生際が悪いぞ、おとなしく消えろ！！」

右拳を握り、衝撃に備えて左手を右肩に添える。
握った右手を上空のコアに向けて構える。

白衛「終わりだ！第四波動！！」

放ったと同時に視界が白くなった。
あれ、ひょっとして、溜め込みすぎた？

クロノ「っ！なんて威力だ！」

フェイト「さっきの砲撃のじゃない！」

シャマル「リンカーコア抽出・・・捕まえ、た！」

ユーノ「長距離転送！」

アルフ「目標軌道上！」

3人「「転送！！」「」」

あとはリンディ提督に任せるだけか。

アースラ

リンディ「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！」

アースラクルー「了解！」

モニターには転送魔法によって転送されてきた、闇の書のコアが移っている。

自身との因縁の深い闇の書、やっと、終止符がうたれる。

ファイアリングロックシステムに鍵を差し込み、後は回すだけで良い。

リンディ「アルカンシエル、発射！！」

再生を続けるコアに向けてアースラから閃光が放たれる。

多くの人の人生を狂わせた元凶は文字通り宇宙の塵となった。

エイミィ「効果空間内の物体、完全消滅、再生反応ありません！！」

リンディ「・・・もうしばらく、反応区域を観測します」

エイミィ「了解・・・ふう」

地上

エイミィ「というわけで、現場の皆、お疲れ様でした、状況無事に終了しました！」

なんかやっと終わったって感じだな、心地の良い疲労感が残ってる。

みんなも笑い合ってるしまあ、とりあえずはハッピーエンドかな？
・・・あ！！

エイミィ「このあとまだ、残骸の回収とか市街地の修復とか色々あるけど、みんなはアースラに戻って「あのー」何、白衛君？」

あ、なんかやっと君付けで呼んでもらった気がする。

白衛「え、えーと非常に申し上げにくいんですけど、俺の放った砲撃の余波で、街が瓦礫になってるんですけど・・・大丈夫だよな？」

第四波動を撃ったは良いが、熱エネルギーを溜め込みすぎてとんでもない事になってしまった。

ここは原爆投下後の広島か長崎か？

エイミィ「大丈夫だよ、結界は張ってあるし、修復班が向かってるし、君の罪状に書き加えられる項目が1つ増えただけだから」

白衛「え、何？初耳なんですけど！？無罪放免じゃないの！？」

クロノ「さすがにそれは無い」

白衛「ではサラバだ」

クロノ「逃げるな！」

全員「あはははは！！」

第22話 すいません、こんなに強力だとは思わなかったんです（後書き）

白衛「・・・で？」

ドアノブ「で？ ッて何？」

白衛「リインフォースの件考えたのか？」

ドアノブ「（・口・）」

白衛「・・・今完全に忘れてたって顔しなかったか？」

ドアノブ「し、してないよお？」

白衛「そう言うせりふは目を見て言えよ！」

第23話 え、宇宙空間に電車は無い？ 銀河鉄道を見て出直しなさい！（前書き）

ドアノブ「最近妙に忙しくて、中々更新できんな」

白衛「忙しいって、帰ったらソツコでゲームしてるじゃん」

ドアノブ「ネタや使える技や魔法探してんのよ！ あんたの為でしょ！？」

白衛「そんな昔やってたCMの様なセリフ言われてもな」

第23話 え、宇宙空間に電車は無い？ 銀河鉄道を見て出直さない！

こんにちは！私高町なのはです。嘘です。毎度おなじみ白衛でございます。

あのあと、皆でアースラに戻った。いや、エイミーさんの言葉を聞いたら行く気は無かったんだけどね。

はやては俺の魔力付与もあって倒れる事は無く、少し眠気がするからと仮眠を取っている状況。

守護騎士達はその付き添い兼護衛をしているし、管理局チームはそれぞれの仕事をするなり休憩をとるなりしている。

で、俺なんだが、なぜか個室で待機していると言われた。しかも見張り付き。

ただっ広い部屋に1人だけポツンといると訳も無く不安になることってありませんか？

え？見張りがいるдарって？見張りなんて景色と同化していて置物にしか見えん！

プシュッ

自動ドアが開き、新たな管理局員が入ってきた。

管理局員A「おい、交代だ」

管理局員B「ああ」

再び部屋の景色と化したよ。

ムッ！いかん生理現象がおきてきた。

白衛「あのー、すいません。お手洗いにいきたいんですけど・・・」

この部屋広いののにトイレらしき扉が見当たらないし。

管理局員A「え！・・・あっはい！至らずに失礼しました！こちらです！！」

トイレの無い部屋に待機させた事を謝罪されてもねえ。

あと管理局員さん？右足と右手が同時に出てますよ？何故に緊張する必要があるので教えてください。

管理局員A「こちらです、こ、ここに居りますのでどうぞごゆっくり・・・ってそっちは男性用ですよ！？」

白衛「男性用の方であってますよ「え？」俺男ですよ？」

管理局員A「バ、バカな・・・」

ああ、そう言うこと、女と思って緊張してたのか、さっきの謝罪も配慮不足ではなくエチケット方面の意味で謝ってたのね。

部屋に戻ったときに部屋の雰囲気为重苦しくなっていたのは置物（管理局員A）の所為だと思う。

うん、俺は悪くない。

しばらく重苦しい雰囲気が続くとクロノが入って来た。

クロノ「待たせてすまない、今回の件をどう上層部に報告するか話し合っていて長引いてしまった」

白衛「やっと、この重苦しい空気ともおさらばか、で、はやて達はどうなるんだ？保護観察処分の後、そのまま管理局お抱えにして使

い潰すつもりか？」

クロノ「・・・そんな事する訳無いだろう、君の中の管理局はどれだけ腹黒い組織なんだ？」

実際裏で管理局が糸を引いてる事件があるだろうに。

最高評議会の脳味噌連中とかが最も良い例だな。あいつら見てるとプリズム・アークの3賢者とダブるぜ。

白衛「一応事件後の事考えて魔法生物のみ蒐集してたんだけど、人に迷惑は極力かけてませんよって弁護がたてられない？」

クロノ「そう言ったんだが、君と協力する前は魔導師も蒐集していたから、その分の罪状が数えられたんだ。それらを踏まえて、保護観察処分になった」

白衛「まったく、自分らは裏でこそそこそ賄賂だの何だのしてるくせに、こういう時だけは厳正な正義の局員顔するんだから上層部っていやだね？」

クロノ「僕に振らないでくれ、それで肝心の君への処罰なんだが、管理局に入局すれば無罪放免にするという決定が下った」

白衛「だが断る！」

うん、1度言ってみたかったんだ。

クロノ「頼むから断らないでくれ、一応君の人となりは理解しているつもりだ。この条件を蹴った場合、管理局から指名手配されてしまうんだ。そうなれば、どの次元世界だろうと居場所はなくなっ

しまう」

言う事聞かないと殺しちゃうぞってか？

要求の仕方が質の悪い子供のように思えてくるわ。

白衛「・・・いくつか条件を飲んで欲しい」

クロノ「条件？」

白衛「1つ、管理局の依頼は君かりンディ提督が選んで判断した物のみ、上層部からの依頼は一切受け付けない、言っとくけど上層部から君を経由してもダメだからな。2つ、健康診断等を理由にした病院関係、研究所関係への出頭には一切応じない、3つ、ランクの高い依頼は内容にあわせてはやて達の観察期間を短縮する事」

クロノ「・・・とりあえず、理由を聞かせてくれ」

白衛「1つ目は、上層部の依頼なんてあいつらの欲望の手助けをしているようなもんだ、きつと碌でもないことが多いに決まってるからヤダ。その点、君等なら信用できる。2つ目は、俺が吸血鬼だって事は報告したんだよな？少しでも長く生きたい奴や研究欲豊富な連中は群れて集まってくるから絶対に行かない。3つ目は、元々の元凶は歴代の夜天の魔導書の主の1人がプログラムを改変した事が発端だ。そうしなければ今のはやて達は居ないって意味では感謝だが、はやてはとぼっちりを受けた言わば被害者だ。これ位しても罰は当たらん」

クロノ「少し待ってくれ、さすがに僕1人の一存で決められない、2つ目と3つ目は通ると思うが1つ目が・・・驚いた全部通った」

白衛「それじゃあ、嘱託の方でよろしく」

クロノ「何？正式な局員として入局しないのか？」

白衛「嘱託の方は、民間協力者って形になるんだよね？そっちの方がくだらない出世のための小競り合いに巻き込まれる可能性は低くなると思うから、そう言う意味じゃ気をつけろよ有望株さん？」

クロノ「茶化すな、まあ、理由は分かった。しかし嘱託魔導師は試験を受ける必要がある。」

その事はなのはやフェイトに聞くといい」

白衛「入局しろって言ってきたのに、正式な手続きを踏めと？」

クロノ「そう言うな、管理局の組織編制や法律など覚えておく必要なものもあるだろう」

白衛「なのはは覚えてんの？」

クロノ「さて、それじゃあ艦内を案内しながら皆のいる食堂に行くぞ」

無視^{スルー}しやがった！！危ねえなのは、白い魔王と呼ばれる日も近い
か？

クロノに連れられて艦内を歩いているが、戦艦とはいえ想像していたよりも広いなアースラは、場所覚えきれるかな？

食堂に着いたら皆食事してたよ、って言うかアルフ、食いすぎ。

なのは「じゃあ、白衛さんも嘱託魔導師になるんですね」

白衛「ああ、試験を合格しないと全世界に指名手配するってクロノが脅すもんだからさあ」

クロノ「いつ僕がそんな非人道的な事を言った!？」

リンディ「クロノ、仮にも執務官なんだからそう言う発言は・・・」

クロノ「母さ、艦長、信じないでください!」

シグナム「それで、試験の内容はどうなっている？」

フェイト「戦闘技能、儀式魔法、筆記試験の3つをクリアしないとダメ」

シャル「戦闘技能と儀式魔法は大丈夫でしょう、決戦のときの能力を見れば誰も文句は言わないはずですよ」

白衛「問題は筆記試験か」

ヴィータ「残念だったなあ、白衛」

白衛「まだ受けてもいないのに不合格と決めつけるのやめない!？
っと、なのは、フェイト、どういう問題が出るか教えてもらいた
いんだけど」

フェイト「わかりました」

なのは「レイジングハート、問題集があったよね?」

レイジングハート《Yes, it is》

白衛「それじゃあ、よろしく、ん？はやてはまだ寝てるのか？」

見渡したがはやてとリインフォースの姿がない。

ザフィーラ「ああ、・・・リインフォースが付き添っている」

シャマル「やっぱり、初めて魔法を行使したから疲れたんでしょうね、でも、少し休めば目覚めますよ。足も徐々に良くなるはずです」

表情が暗いですよ皆さん。

まあ、原作通りに行くつもりなんて無いんだけどね。

白衛「・・・リンディさん、艦内で魔法を使うのは禁止されていますか？」

リンディ「事前に言ってくれるなら問題ないわ、けど、何をするの？」

白衛「リインフォースが皆と居られるようにバグを取り除きます」

全員「え！？」

ヴィータ「あいつの状態をなんで知ってんだ！！」

白衛「お前らの沈んだ顔見れば想像が付くよ、せっかくここまで来たんだ、誰1人として欠けずにハッピーエンドを迎えたいでしょ？」

シグナム「しかし、できるのか？夜天の魔道書は本来の姿を失ってしまっている」

白衛「多分大丈夫なはずだよ。とりあえずリインフォースのところに行こうか」

はやてとリインフォースの居る部屋まで歩いている。全員で歩くと広い廊下も狭く感じるな。

部屋に着き、俺は宵闇を呼び出す。

リインフォース「みんなそろってどうしたんだ？」

白衛「宵闇、来てくれ」

声をかけると、影から剣形態の宵闇が姿を現した。

シグナム「しかし、その剣がお前と同じ姿になるとはこの目で見るまで半信半疑だったな」

白衛「神剣は位が若ければ若いほど、もたらす力も強大になるからな、特に第3位以上の神剣は必ず所持者を半不老不死にするし」

クロノ「何だと!？」

まあ、その反面、性格に難があったり、本能剥き出しで所持者の事をガン無視した神剣もあるんだよな。

俺は文殊を取り出して、バグの抽出を試みた。
しばらくすると、リインフォースの身体から黒いモヤのようなものが出始めた。

フェイト「これは？」

白衛「これが夜天の魔導書を狂わせたバグだ。よし、あとは文殊で・・・「バキン！」うおっ!？」

文殊でバグの消去を念じたら、文殊が砕け散った。

どうやら、文殊はバグを抽出する力はあるけども、消去させるまでには至らなかったようだな。

文殊って魔導師というなら、少なくとも10人分の魔力が込められているのに随分根性のあるバグだな。

リインフォース「ありがとう、でも、もういい」

白衛「このまま、消えるつもりか？」

リインフォース「今まで、数えるのが馬鹿らしくなるほど多くの人々の命を奪ってきた。償っても償いきれない。主には守護騎士達が居る、きっと幸せになれるだろう。いずれまた暴走する私は消えた方が良く」

白衛「主や守護騎士達の事を考えて行動する事が悪いとは言わないが、お前自身はどうなんだ？歴代の主達を殺したいと思ったわけじゃない、プログラムのバグによって勝手に勝手に行動してしまうだけ・・・お前だって辛かった筈だ」

リインフォース「・・・」

白衛「管理局が定めた処分や法律だって人間が考えて、妥当だと判断して施行されたもんだ。もし、今回の裁定に納得が出来ないのなら気の済むまで償い続ければいい、自分で自分を許せるまでな。バグは俺達を取り除いてやるよ」

宵闇をバグに向けて突きつける。

魔力を込めると刀身が波打ち、波紋から黒い蝶の群れが現れた。

白衛「闇より生まれ、闇を喰らいし黒死の蝶よ、我が怨敵を屠れ、
『魔力を貪る者達』^{マジック・イーター}」

剣から蝶達が舞い、モヤに飛び掛る。

あっという間に蝶の群れがモヤを包み、バグを喰らい尽くしていく。
モヤが消え去り、蝶達は刀身に舞い戻ると刀身に沈み込むように消えていった。

クロノ「い、今のは一体なんだったんだ？」

白衛「今の蝶は、魔法的なものなら何でも喰らってそれを魔力に変換してしまう能力だよ。吸血鬼の1人が使ってた能力」

ユーノ「な、なんか、ロストログアみたいな能力だな」

白衛「ロストログアよりは平和的でしょ？ 周りに被害及ぼしてないんだし」

みんな若干引き気味になっていると、ヴィータが俺に話しかけてきた。

ヴィータ「もう、こいつが消える必要は無くなったんだな？」

白衛「ああ、ゆっくりと仲直りしていきな」

ヴィータ「お、おう」

リインフォース「・・・私はここにいてもいいのか？ヴィータ、将达よ」

ザフィーラ「当たり前だ」

シャマル「あなたが居ないと、はやてちゃんが悲しみますよ」

ヴィータ「身勝手に居なくなったりすんなよ。でないとゼツター許さねーからな！！」

リインフォース「ありがとう、あり、が、とうう」

白衛「よし！これで誰も欠けることなく事件終了だな、なのは、あのツン子達に事情を話すんだろ？話したあと、みんなでクリスマスパーティーでもしようか？」

なのは「つ、ツン子って、アリサちゃんが聞いたら怒りますよ？」

フェイト「でも、良い考えだ、クロノもエイミイもみんなでパーティーしよう？」

クロノ「聖夜を祝う吸血鬼っていうのは・・・いいのか？」

白衛「そこ！KYな発言は控えるように。将来奥さんの尻に敷かれますよ？」

クロノ「どうしてそうなるんだ！」

エイミイ「でもクロノ君、この際細かい事はいいんじゃない？確かにめでたいんだからさ」

シャル「それじゃあ、腕によりをかけて美味しいものを作りますよ！」

シャルは恐怖の言葉を放った！！

白衛、守護騎士達は石像のように固まった！！

なのは達には効かなかった！

はやては未だ眠っている！

なのは「わあ！楽しみです！」

フェイト「どんな料理が出るんだろう？」

そっか、現時点で俺達以外はまだ食べた事が無かったのか。

……仕方があるまい。

そろーり、そろーり……ガシッ！

シグナム「何処へ行くつもりだ？白衛」

白衛「いやあ、終電が近いからそろそろお暇しようかと……ダメ？」

ヴィータ「てめえ、言いだしつpegがトズラとは良い度胸じゃねえか！」

守護騎士の皆さん、ここは病室ですよ？

デバイスを出すのはいけないんじゃないじゃありません？

シャル「何で逃げるんですか！私の料理に不満でも！？」

白衛「無かったら逃げたりするか！」

とりあえず、シャルの料理のレベルはみんなに伝わった。

パーティー開始直前まで、シャルは八神家の押入れにでも突っ込んでくかな？

第23話 え、宇宙空間に電車は無い？ 銀河鉄道を見て出直しなさい！ (後書き)

ドアノブ 「今後の展開を考えるのに時間をください、そして私にもクリスマスプレゼントをください」

白衛 「良い大人が何要求してんだよ・・・」

ドアノブ 「あ、後今回出てきた『魔力を貪るもの達』マジック・イーターはムーンタイズには出てきません。以前プレイしたPCゲームの技とDグレのノアが持ってた蝶みたいな外見を使わして貰いました」

白衛 「要するに、パクリにパクリを重ねた代物だ」

ドアノブ 「すいません」

第24話 あいつらに追いかけられると、自分がリアル鬼ごっこに参加した気分

ドアノブ「えー、前回感想を頂きましてセリフの前にキャラ名があると読みにくいとのことでしたので、今回キャラ名を入れずに書きました」

白衛「豆腐様、どうもありがとうございます」

ドアノブ「今後も入れないつもりですが、以前と比べ読みやすくなったかどうか感想を頂ければな〜と思っております、どうかよろしくお願いいたします」

第24話 あいつらに追いかけられると、自分がリアル鬼ごっこに参加した気分

走れ、走れ、走れ、走れ、走れ、走れ、走れ、走れ、
走れ、走れメロス！

・
・
・
じゃない俺！

ゲット○ツカーズのネタを試してみたものの、現在の危機的状況が変わることは無かった。

くそ！こんな事になるのならあんなにクロ助をからかうんじゃないかな
ったぜ。

1時間前 アースラ 俺が待機していた部屋

「白衛、1つ聞きたいんだが？」

「何かね？　ワトソン君」

「誰がワトソンだ! ? どうして僕は簀巻きにされてるんだ! !」

目の前のクロノはカンダタストリングでグルグル巻きにされていた。

「いや、もうすぐパーティーじゃん？ただ単に飲み食いするだけじやつまらないからここはクロノ執務官殿に生に、ゴホンゴホンッ、いや率先して場を盛り上げてもらおうと思いいこの聖祥学園の制服かっこ女子の方かっこ閉じるを着てもらおうかと」

「今生贅って言おうとしたな！？あと口でかつことか言う事に意味があるのか！？そして何故僕がそんなものを着なきゃいけないんだ！？」

「え？・・・あゝハイハイ！つまり体操服が良いと「誰がそんなこと言った！？」そうか、フェイトの体操服が着たいとはシスコンここに極まれりか・・・」

「君に耳は付いているのか、それとも耳が壊れているのかどっちだ！？その哀れみをこめた視線を止めろ！！くそっ、どうして切れない！」

「その糸を切れるのは神だけだ！！」

「かっこよくこっちを指差して訳の分からんセリフのたまっていないでさっさと開放しろ！！」

「ぶっちゃけて言うとき、高町家とハラオウン家と八神家、それとアリサとすずかでパーティーするわけだが、高町家には桃子さんが居る、つまり俺が何らかの恥ずい衣装を着させられる可能性が高いつて事だ。それを回避するために身代わり（スケープゴート）が必要なのだよ。ドゥーユーアンダースタン？」

「何故君の身代わりにならなくちゃいけないんだ！？」

「よく考えて見ろ？さっき述べた連中の中で野郎は俺、お前、土郎さん、恭也さんにユーノ、ザフィーラだぞ！恭也さんや土郎さん、ザフィーラにこの服はサイズ的に無理だし着た所を想像したくも無い。俺は死んでもゴメンだね」

あの3人が背丈を合わせたオーダーメイドの聖祥学園の女子の制服を着る・・・。

おえっぷ、怖い想像してしまった。ある意味シャマルの料理といい勝負するぜ、インパクトが半端じゃない。

「だったらユーノでもいいじゃないか!!」

まあ、そうなんだけどさ。

「最終的に考えて、面白いリアクションが期待でき尚且つからかい甲斐のある方が選ばれました! やったね! これで日本の経済は安泰だ!!」

「僕がその制服を着る事で日本の経済にどういう影響を及ぼすんだ!?!」

プシュ

「白衛さく、って、どうしたのクロノ君!?!」

「クロノ、どうしたの? 何か悪い事したの?」

「クロノ君、写真とっても「却下!」「ちえー」

「なんとも形容しがたい状況だな」

なのはにはやて、フェイト、エイミー、シグナムが入って来た。

俺はこうなったいきさつを話した。

「あ、あはは、さすがにお母さんもパーティーでは・・・させるかも」

「だろ? だからクロノを生贄にしつつ女装癖に目覚めてもらって今後俺の身代わりになってもらおうとしただけなのに。元々女顔なん

だし」

ブチッ！

「いやいや、それはだけって言葉で片付けられんと思いますよ？」

「そもそも、お前も人のことが言えた容姿ではないだろ」

「・・・シグナム、今から白衛と訓練室で模擬戦をしてもいいぞ」

「・・・はい？」

ナニイツテンノコノコ

「ほう・・・」

ニヤリ

シグナムさん、目を輝かしてこっちを見つめないで。

そこの年少2人組も期待に満ちた目でこっちを見るな。

「・・・どうやら白衛はあまり乗り気じゃないみたいだな。よし、白衛を先に捕まえた者に1度だけ可能な範囲で好きな景品を贈呈しよう。白衛と模擬戦なり1日過ごすなり好きにするといい」

クロノ、おまえそんな黒い笑顔が出来たんだな。

一瞬、言峰神父を思い浮かべたぜ。

そして皆さん、随分と欲望に素直でいらっしやいますねえ、にじり寄ってくんな。

はやて、携帯を取り出して応援を呼ぶ気ですか？

「クロノ！お前、勝手にそんな事していいのか！？リンディ提督に許可もらえよ！また訓練室が壊れるぞ！！」

「艦長は本局の方に出向いて今は僕が艦長代理だ。そして仮に訓練室が壊れたとしても大丈夫だ。執務官の給料を見くびるなよ？弁償してもお釣りが来る」

「金にモノを言わせやがった！？」

「というわけだ、白衛、おとなしく捕まれ」

「白衛さん、えっと、一緒に1日・・・／／／」

「・・・わ、私は模擬戦かな？」

「ど、どっちも捨てがたいの。・・・と、とりあえず捕まえてから」

「おのれ！クロノ、覚えているがいい！いつの日か貴様の姿でゴスロリ服着た写真を管理局中にばらまいてやるからなああああああ
！」

「逃がすか！！」

「「「待てー！ー！」」」

はやて、お前の車椅子にはどんな仕掛けがしてあるんだ？

なのは達と変わらない速度で追っかけてくるってどんな改造施した？

「・・・すごい捨て台詞言ってたね」

「・・・管理局に入れたのが間違いだと早くも思えてきた」

そして現在、俺はアースラの中を逃げ回ってるわけだが・・・。
気配を殺して壁から少し顔を出して廊下の様子を見る。

「居たか!？」

「いや、まだ見つからない!」

「転送ポートはこちらの制御下にある。他の次元世界への逃走は不可能だ! しらみつぶしに探せ!!」

何で管理局員まで参加してんだよ!!

さつきからやたら管理局員共が俺を捕まえようと詰め寄ってくる。
っていうかエンカウント率が高すぎる。

クロノお前をからかった事、少し後悔しているよ反省はしないがな
!!

「あの子は絶対女の子だ!」

「・・・はあ？」

「そうだ! きつと、家が特殊で男として育てられたんだ!!」

「いや、この際男だろうが女だろうがどっちでも・・・」

「こいつ、どっちでもいけるのか・・・」

「確かに、それはそれで・・・」

管理局・・・とことん腐った組織のようだな、違う意味で。

「ん? あー!」

げっ！なのはが現れた！

俺は素早く曲がり角を曲がり、【変身能力】ドッペルゲンガーであるものに変身した。

なのはがやって来たが、俺の姿が見当たらないのかキョロキョロとしている。

フフフ、目の前に居るんだけどね。

「なのは、居た？」

なのはの後にフェイト、はやて、アルフと守護騎士達がやってきた。お前ら暇なの？

「さっきここを曲がったはずなんだけど・・・」

「居らへんね・・・ここからはずっと直線やから姿は見えると思うんやけど」

「また、ヘンテコな能力使ったんじゃないの？」

失敬な奴め！

「あら？」

「どうしたん、シャマル？」

「いえ、こんなところにポスターなんて貼ってあったかしら？」

ギリ

「つか、この先って訓練室とかシャワー室とかで、食堂とかじゃないよな？方向逆だし」

「・・・確かに不自然だな」

「・・・何故でしょう？このポスターを見ていると怒りがこみ上げてくるんですけど？」

「あゝ、それは・・・」

はやてがポスター（俺）を見る。

ポスターはジャイ子に手料理を食べさせられて悶え苦しんでいるのび太が書かれている。

そしてのび太に台詞のふきだしがあり、「能書きやいいから、味見しろ！」と書かれている。

「こんな場違いなポスター要りませんよね？燃やしておきましょう」

え？ちよつと、何でそんな結論に！？

デザインもう少しマシなのにすればよかった？

「なんか、ポスターが震えてる」

「・・・・・・・・」

じいーーーーー。

メツチャ見てるうー！

シグナムが手を伸ばしてきた。

「ふむ、いたって普通の素材です。局員の誰かが間違って貼ったの
でしょうか？」

ぐっ、ぷぷぐぐっ！

わ、脇腹をつまむな！ダメだ、形態を保ってられない！！
は、早く、手を離してくれ！

「さっきのはエアコンの風だったのかな？」

「そう・・・なのかな？」

「まあ、この辺に居る見たいやし、みんなで手分けして探そか」

「そうしよう」

グシャ ポイ

・・・何とかやり過ごせたか、助かった。

しかしシグナムめ、キッチンと俺をゴミ箱に捨てるとは・・・！

ガラガラガラ ガサゴソ

ん？

「よし、こここのゴミ回収して清掃完了だ」

「さっさと済まして俺達もイベントに参加しないとな」

「このままダストシュートで焼却炉だったな」

なんですと!？

「そのはずだ。よし行くぞ」

あ、あれ、ひょっとして、俺は、今から生まれたばかりのドラえも
んと同じ体験すんのか!？

第24話 あいつらに追いかけると、自分がリアル鬼ごっこに参加した気

白衛「思ったんだが」

ドアノブ「ん？」

白衛「前回のサブタイトルで銀河鉄道の事いつてるけど、あれって、電車じゃなくて汽車だよな？」

ドアノブ「いいじゃな、列車は列車なんだから！」

白衛「銀河鉄道ファンの方スイマセン」

第25話 俺は断じて潔白だ！・・・ってなんか汚職政治家みたいだな（前書き）

ドアノブ「最近仕事が妙に忙しい・・・」

白衛「仕事行く↓仕事が終わって家帰って寝るのサイクルが多いな」

ドアノブ「何で1日は24時間しかないのだ！？ペルソナみたいに
もう1時間位多くあってもいいじゃないか！！」

白衛「それでも、仕事の時間が増えるだけだと俺は思うぜ？」

ドアノブ「言わないで！なんとなく想像付くから！！」

白衛「というわけで、投降のペースが遅れるかもしれません」

ドアノブ「読者様には大変ご迷惑をおかけしますが、なにとぞご容
赦を、後、今回も少し書き方を変えてみました。以前に比べ読みや
すいかどうか感想を頂ければ幸いです」

白衛「では、本編をどうぞ」

第25話 俺は断じて潔白だ！……ってなんか汚職政治家みたいだな

「あゝ、さっぱりした」

危うくドラえもんと同じ運命を辿りそうになったな。

俺はゴミ袋から脱出してゴミ清掃員を瞬時に気絶させ、シャワー室に駆け込んだ。

ゴミ箱に入っていただけあって異臭がしてたんだ、俺の身体から。幸い誰も居なかったのでゆっくりとシャワーを浴びたよ。

しかし、一難去ってまた一難。

グウウウウウ。

「腹減った」

冷静に考えて決戦の日から俺は水かお茶以外何も口にしていない。植物の養分を吸おうにも観賞植物すら見当たらない。

「食堂行って何か食わねば、このままじゃドッベルゲンガー変身が長続きしない」

管理局員に化けて何とかやり過ごしているものの今のままじゃ何時変身が解けるか分かったもんじゃない。

食堂に移動したら、俺は目の前が真っ暗になった。

何故なら、カウンターにはこう張り紙がされていた。

『今日の営業は終了しました。材料不足のため次回の営業は食材が補給されるまでお待ちください』

……ここまで食事にありつけないとは何か作為的なものを感じるな。

食堂を出て廊下をさまよっていると複数の足音が聞こえてきた。

「そろそろ、艦を一周したけど居ないね」

「何処にいるのかな？」

「案外ゴミ箱の中とかにいるんじゃないか？」

「流石にそんな所には隠れないんじゃないかしら」

「ともかく、終了時間は今日の日没まで、早く探さないと奴との模擬戦が流れてしまう」

「まあ、予想しとったけど、監視カメラを使用すのは禁止なんやな」

なのは、フェイトにヴィータ、シャル、シグナムとはやてだった。というかヴィータよ、君は一体俺をどういう人物と認識してるのかな？

「あのー、その管理局員さん？」

「少しいいだろうか？」

何かな？産業廃棄物製造者&戦闘^{シグナム}狂よ。

「何でしょうか？」

とりあえずテキストに受け答えしてこの場を離れよう。

何とかカロリーを補給しないといずれは捕まっちゃう。

「緑がかった銀髪をした女の子を見ませんでした？」

・・・こいつらとは1度話をしなければならんらしいな。
が、今は逃げよう。面倒くさいことは避けよう。

「い、いいえ、見てません。仕事の最中に見かけたらお知らせしま

すので失礼します」

「では見かけましたら食堂にいらしてください？ 私がお茶を淹れておきますから」

「少し休憩にしましょうか？ ずっと走り回ってたし」

・・・よし、これでしばらくこいつらは食堂から動かない。

後は、日没まで逃げ切れば・・・ん？

シグナム、何で後ろに回る？

ガシッ！

「あのー、何で自分はバインドをかけられ、後ろから羽交い絞めにされてるんですか？」

「貴様が白衛だからだ」

「何故！？」

「シャマルのヘドロ茶の事知ってんのはあたし等守護騎士と白衛だけ、初対面の人間がシャマルの料理の酷さを知ってる訳ねーかな」

「あれだけ顔を引き攣らせてたら流石にわかりますよ？」

シャマルさん？ 笑顔なのに纏ってるオーラが黒いですよ？

あーあ、捕まっちゃった。

この後、なのは、フェイト、シグナムが自分が捕まえたと言張しあっていた。

バインドはなのはとフェイト、シグナムが背後から拘束と協力し合っていたので如何するか揉めたらしい。

結局、監視カメラで映っていた映像から最初に触れたシグナムが捕まえたという事になったようだ。

模擬戦はパーティーの次の日に嘱託魔導師の試験で勝負する事になった。

翌日

俺はアリサの屋敷に向かっていた。

なのは達は先に出発したからもう着いてるだろう。

そういやあなのは達は家族やアリサ達に魔法の事は話した、もちろん俺の正体も。

いやゝ驚いたね、恭也さんが小太刀を持って俺の前にやって来たときは。

血を吸うつもりなんて無いって言ってもずっと首に刃を添えてくるんだから、なのはが止めに入るまで。

恋人が吸血鬼だからってそこまで反応しなくてもいいと思うんだよねえ。

「シスコンという病気をこの世から消し去る術はないものかなあ」

「なに人の家の前で訳分かんない事言ってるのよ」

アリサとすずかが玄関前にいた。

「いや、ちょっと現代病といっても過言ではない病気の除去について」

「そんな事^{あんた}吸血鬼が考えたって感染の拡大に繋がるだけよ」

「俺は病原菌^{ネズミ}媒体かなんかか!？」

「こんにちは、白衛さん。なのはちゃんたちはもう着いてますよ?」

「よっ、すずか、ってことは俺が最後だったのか」

部屋に入ると、高町家、ハラオウン家、八神家の面々が集合していた。

・・・この大人数を入れてもまだ部屋が広く感じる。
どんだけ広いんだよ、パーティー用の部屋か?

そんなことを考えていると、リンディさんの音頭でパーティーが始まっていた。

「やあ、白衛君」

「士郎さん、今まで話さずにすいませんでした」

「いや、君の判断は正しいと俺は思うよ、絵空事とされている魔法や異世界、御伽噺の存在が実在している。言葉にすれば三文小説のようだがもし、世間が実際に目の当りにすればいろんな混乱が起きるだろうからね」

「そう言ってもらえると助かります。恩人に言えないのは心苦しかったので」

ボディーガード
用心棒をしていただけあって、人間の心の機微や欲深な人間の行動に察しがついているので正直有難かった。

「それで、実は個人的に頼みがあるんだ。」

「頼み、ですか？」

「ああ、正直俺は、人手不足とはいえ、子供しかも自分の娘を戦わせる管理局というものがあまり快く思わない。だが、あの子がなんにも強く希望を口にした事は今まで無かった。だからあの子が管理局に所属する事に反対はしない、賛成もしないがね」

そりゃあ、自分の子が戦闘に駆り出されて良い気分になる親は居ないだろう。

駆り出される事がやむを得ないなら、少しでも無事を願う他無い。

「出来る限りの支援、という事でしょいか？」

「ああ、此処に居るみんなから聞いたがこの面子の中でも秀でて強いと言うし、友達のために動ける君やハラオウン家の人達なら安心

できる。あの子は俺に似たのか頑固なところがあってね、俺達は魔法なんて出来ないし心配なんだ」

まあ、実際この人の負傷が原因で今のなのはが居るわけだが、この人に非がある訳じゃないし。

「・・・何時も同じ任務になることはありませんが、同行可能なときは出来る限り手助けをしますよ」

なのはが撃ち落されるまでに性格を矯正出来ればいいんだけどな。

「すまない、本当なら旅を続けたかっただろうに、こんなお願いをしてしまつて」

あ、そうか、旅をしてるって、リンディさんに言っただけ。入局勧誘を断るための方便だったんだけど、まあいいか。

実際、この世界の人達と関わりを持つ前なら旅をしてたろうし。

「士郎さん、俺は吸血鬼です。時間は沢山あるのだから旅はまたいつか続ければ良い、けど貴方達との時間は有限です。そして、旅をするよりも大切な事だと俺は思ってますよ」

「白衛君・・・」

「ただ1つだけ、あの子は、どこか自分は良い子でなくてはいけないと思っっている節があります。あのままだといつか、心身共に壊れるかもしれません。もしあの子から心の内を話されたとき、どうか受け止めてあげてください。ここに居る子達は確かに強い、けどまだ女の子なんですから」

「・・・ああ、わかったよ」

2人で笑い話に花を咲かせるなのは達を見る。

「・・・俺は自分勝手だな、都合の良い時はあの子を良く出来た良い子として、悪い時はまだ幼い子として、あの子を見ていたのだから」

「俺は、まだ結婚もしてませんし、子作りをした事も無いので気持ちを理解できるとは言いません。でも、あなたの気持ちは普通の親なら誰もが抱くものだと思いますよ」

「ありがとう、ハハハ、楽しいパーティーのはずが俺達だけ何だかしんみりとしてしまったな」

俺はテーブルからグラス2つとワインのビンを数本持ってきた。

「どうです、飲み比べなんて？」

「たまにはいいかもね、よし！」

1時間後、人間対吸血鬼による飲み比べは吸血鬼が勝利した。

酒に対する耐久性も上がっているようだ。以前のように酔っ払う事は無かったぜ。

ちなみに、珍しい洋酒を飲んだ士郎さん、いきなり俺となのはの交際を認めると部屋どころか外にまで聞こえそうな大声で宣言した。絶対酔っ払ってるよなこの人。

しかも宣言したと同時に神速で夢の中に行った。

当然、矛先は俺に向くわけで・・・

「パトラッシュ、もう僕は疲れ「じゃあ、永久に眠りなさい！」うお！危ね！」

アリスが何処から取り出したのか、白木の杭とハンマーを持って殴りかかってきた。

「ハンマーで殴りかかるんじゃない、白木の杭の意味は無いと思うんですよ？」

「この世に残す言葉はそれでいいわね？この偏愛少女嗜好者！！」
「いいわけあるかよ！！」というか俺はロリコンじゃねー！！あとなのはとの交際は士郎さんが酔った勢いで言っただけだろ！？」

「せやで！」

はやて、お前は俺の味方をしてくれるのか。

「白衛さん、会ってすぐ私の首にキスしてきたんですよ」

味方と思ったら敵の援軍でした。

敵軍の士気がUP！敵の殺ル気がUP！！

「だから、あれは魔力を送るための「だ、だったら！」おい！聞いてくれ」

「わたしはお風呂で裸見られました！！」

「何であたかも俺が覗いたみたいなの言い方すんの！？」

さっきから周囲の視線がイテェ！

誰でもいいから俺に味方してくれー！！

第25話 俺は断じて潔白だ！・・・ってなんか汚職政治家みたいだな（後書き

白衛「どんどん俺が性犯罪者みたいな立場になってる気がするんだが？」

ドアノブ「ほら、そこは主人公の宿命ってことで」

白衛「そんな宿命はいらねえ！！」

第26話 俺、被害者のはずなのに最近踏んだり蹴ったりじゃね？（前書き）

ドアノブ「随分と日数が経ってしまい申し訳ありません&蒼様、書き方に対してのコメントありがとうございます」

白衛「コメントを貰ったのって随分前みたいだが？」

ドアノブ「仕事疲れの状態で執筆してたから感想を見る事をすっかり忘れておりました申し訳ありません」

白衛「数日前よりも仕事のハードさは緩和されてきたので、これから投稿の際には必ずチェックするように注意しますのでまた御意見御感想があればよろしくお願いいたします」

第26話 俺、被害者のはずなのに最近踏んだり蹴ったりじゃね？

アースラ 訓練室

パーティが終わった次の日、俺は囑託魔導師になるための試験を受けにアースラに来ていた。

筆記試験はなのはとフェイトが教えてくれたおかげで思ったよりもスラスラと問題が解けたよ。……正解してるかどうかは別の話しだがな。

儀式試験は決戦の日に使った加護の術を使って合格した。

で、最後に戦闘技能試験が残っていて、この前のプチリアル鬼ごっこでの罰ゲームでシグナムと対戦する事になっていたわけだが……

「なあ、クロノ」

「何だ？ 白衛」

チラリと対戦相手の方を見る。

「これって本当に戦闘技能試験か？ 私刑リンチの間違いじゃないのか？」

シグナムの他になのは、フェイト、はやて、アルフ、ヴィータ、ザフィーラが居た。

ガチンコバトル専門の連中が集結しやがった。

「君相手だとこれでも足りないくらいだと思ってるよ」

「評価してくれんのは嬉しいんだけどさ、一対多数という非常に面倒くさい戦いを強いられるこっちの身になれ」

それと昨日のパーティーの事を引き摺ってるのか3人娘からやたらと黒いオーラが漂ってる。あいつらの魔力波って色変えられるのか？

「魔力量測定でSSS相当の値をはじき出したんだ。おまけに戦闘慣れしているのは闇の書事件で分かっている。実力的にもこの戦力分けが妥当とされた。諦めてくれ」

「百歩譲ってそれは良いとしてだ、あの3人娘試験が終了しても戦闘を続けてきそうな気がするんだが？」

「諦めてくれ」

「イヤな予感的中！？」

俺って最近理不尽な扱いを受ける事多くないか！？
げんなりしてると、シグナムがこっちに来た。

「クロノ執務官殿、合図をよろしく頼む」

「戦闘に夢中になりすぎて訓練室を崩壊させないように十分注意してくれ、では、戦闘技能試験、受験者 刃清白衛対 試験官 シグナム以下6名、開始！」

宣言と同時にシグナムがレヴァンティンで斬りかかって来た。

「【覚醒召還】 コンセプション！フェンサー！！」

デュプレの刃で迎え撃ち、鏖迫り合う。

その間にシグナムの後方からなのはとヴィータが遠距離攻撃を放ってきた。

「アクセルシューター！」

「シュワベルフリーゲン！」

「チッ！やっぱりこの人数は苛めじゃないか！！」

シグナムが一旦退き、俺の周囲を魔力弾が包围する。
俺は片手を前方に出した。

「こんなもん、【重力の能力】重力増加!!」

周囲の重力を増加させ、魔力弾を地面に叩き落とした。
・・・？シグナム達の方見ると、はやてとフェイトの姿が無い。

「ブリューナク！」

「はやては其処か、で、もう1人が居ないってことは「ハーケンセイバー!!」」囧って訳か」

ブリューナクで攻撃し、注意をはやての方に向けている間に、フェイトが速攻。

はやてのブリューナクはフェンサーの装甲に当たると霧散し、フェイトのハーケンは俺が右手で掴んで止めた。

「悪くは無いけど、もう一捻り工夫が欲しいな」

「あたし等が居る事を忘れてないかい？」

「余裕があるのは結構だが、余裕が慢心や油断を生むと知れ」

ザフィーラが俺の左手を自分の左脇に挟みつつ、俺の左後方に周り
右手で俺の左肩を固定した。つまり関節を決めてきた。

その後アルフはバインドで俺の四肢と首に鎖を巻いてきた。

まあ、普通の奴ならこれで拘束可能だろうけど・・・

「これで、捕らえたつもりか？」

「えっ？」

「ぬっ！」

「そんなのありかい!？」

俺はバインドを引き千切り、ザフィーラの関節技を力で外し、フェイトとザフィーラをアルフの方にブン投げた。

「入れ替わり立ち代りじゃ不公平だ。こっちも人数を増やすぞ」

元の姿に戻り、剣状態の宵闇を握る。
宵闇を水平に構え、魔力を送る。

「さあ、お前たちの敵は己自身だ。【敵意に満ちた漆黒の鏡】^{ハステイル・ミラー}!」

訓練室全体に魔力が行きわたると、なのは達の影が動き始め、立体化し、それぞれの姿形となっていく。

「わ、私の影が!」

「こんなことも出来るやなんて!」

「気をつけろ!来るぞ!」

「偽者なんか返り討ちにしてやる!」

ヴィータ、そういうセリフを言うと大抵苦戦するから言わない方がいいぞ。

なのは達が驚きながらも、自身の影と応戦する。

まあ、自分と戦う事なんて無いだろうからやり難いみたいだな。

「白衛、私の影を立体化させなかったのは何故だ?」

振り向くと、シグナムが居た。

「お前はこの前の鬼ごっこの賞品で俺と模擬戦する事になってるだろ。今後に持ち越しすのも面倒くさいし、本当ならお前と1対1のはずだったんだから問題ないだろ？ 戦闘技能試験としてのパッシングラインはもう超えてるだろうし」

「フ、気を遣わせてしまったか、確かに団体戦も良いがやはり1対1も良いのが本音ではあるが・・・白衛よ、1つ聞きたい、お前の魔力測定時のあの数値はリミッターをつけた状態での数値だな？」
「何故そんな事を聞くんのだ？」

「お前が高ランクである事は誰の目から見ても間違いは無い、だが、今回の戦闘を見てどこか手を抜いているように見受けられたのだ。まるで相手を気遣うように、触れた瞬間に壊れてしまいそうなものを壊さないように慎重に触れようとするかの様にな。気を悪くするかもしれないが、触れようとする事に臆病になっているように見えた」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・こいつ良く見てるな。

正直に言ってしまうば、正解だ。

訓練はしているが俺の感覚と真祖の身体がまだ完全に一致していない。

軽く壁を小突いたつもりでも壁が粉碎することもあった。

「・・・お前の言っている事は当たってるよ。お前たちと出会って数日後の事なだけどさ」

高い木に登り過ぎて下りられなくなった猫を助けようとした事がある。

しかし、軽く掴んだはずの両手は猫の胴体を2つに分断した。

頭の中では猫を助け腕に抱くビジョンが浮かんでいたため、目の前

にあるものがなんなのか理解できなかった、そして理解したくなかった。

肉の塊となり眼が開いたままのそれと目が合い、途端に自分のとった行為の結果を理解し、俺は吐いた。

俺は、しばらく嘔吐と涙が止まらなかった。

人は生きているだけで他生物の命を食っている事は理解していた。が、実際に命を奪ってみるとこれだ。

気持ちが悪い上に、命を奪ったという事実が重く肩にのしかかる。生物差別をするわけじゃないが、猫でこの有様なんだ、もし人間だったらと思うと震えが止まらなかった。

その日以来、俺は宵闇から指導を受け自身の力の制御する訓練を始めた。

転生前の人生があっけなく終わったため、簡単には死なないようにとこの身体を望んだが、能力だけじゃなく、身体も自由に扱えるようにならないとダメだ。

多分、俺はこれから沢山の命を奪っていくんだろうけど、できるだけ奪わないで済むように、不意に命を奪ってしまわないように。

「宵闇は、甘いとか命を奪いにくる者なら殺せば良いとか言ってくる。けどさ、なるだけ無事の方がいいじゃん。俺が殺してしまった猫も、これから戦う誰かも、何処かの誰かにとっては、シグナムにとってのはやて（大事な存在）かもしれないだろ？」

「・・・お前は強いのに戦闘には向かんな。模擬戦の後に聞けば良かったと後悔している」

「大丈夫だぜ？文殊を使って力を何割か抑えておくからリミッターと掛け合わせてちょうどなのはより少し上ぐらいの力になるはずだ」「そういうことではないのだが・・・」

苦笑をしてどうしたんだ？
的外れな事言ってるやないよな？

「今後に持ち越したくはあるが、試験も兼ねている為そうも言っ
られん。始めるぞ」

「ああ、それと話を聞いてくれてありがとうな、気が向いたら模擬
戦に付き合おうよ」

「ふふ、後悔しても知らんぞ？」

「結構参ってたんだ。話を聞いてくれた札にしたら安いもんさ」

シグナムがレヴァンティンを、俺は宵闇を構える。

「どうやら、あっちも勝負が付いたらしいな」

「あ、ほんとだ。フェイトとはやて、ザフィーラが勝って、なのは
とヴィータ、アルフが負けか」

負けた影たちは本人の影に戻っていった。まあ、勝った影もそのう
ち戻るだろうけど。

あ、なのはの影が、本人に向かってVサインしてる。

おーおー、悔しそうな顔なこと。

「では、こちらも」

「ああ、戦闘続行！！」

なのは SIDE

白衛さんが出した私達の影は足元の影とひとつになって消えていき
ました。

去り際にVサインしてきたのがすっごい悔しい。

ヴィータちゃんも地団駄踏んです。

というよりも、自分の影を踏み続けてます。

「ちつくしょー！何で自分の影なんかに負けんだよ！！」

「戦ってみて分かったが、あの影は我らの戦闘力が最高潮時の状態で襲ってくるようだ。いくら自分自身とはいえ、気を抜くと痛手を喰らうことになるな」

「つまり、一番調子の良い状態ということかい？」

「自身と同じ技で威力が違った事に違和感があったのだ。初めは白衛が魔力なり身体強化なりを使っていると思ったのだが、その割には自分自身でも繰り出せる威力だったからな」

確かに、あまり力の差は感じなかったけど・・・

自分自身を相手になんてした事無いことに対する戸惑いと予想外に自分の攻撃が対処し難かったから負けちゃいました。

「まさか自分の影が襲い掛かってくるとは思わなかったわ」

「以前の手のお化けといい、ビックリする能力が多いねえ」

アルフさん、思い出させないでー！
ん？どうしたのフェイトちゃん。

「そういえば、シグナムは？」

「そういや、あいつは自分の影に勝ったのか？」

「いや、さっきまで白衛と話していた様だな」

何話してたんだろう？

「・・・なんか2人して笑うとるな」

「・・・戦闘技能試験だったこと忘れてるのかな？」

「・・・後でお話ししようか、3人一緒に」

「「うん」」

なのは SIDE END

何合か切り結び、互いに所々切傷を作っていく。
文殊も併用しているし、力の制御は上手く出来てるみたいだな。

「そろそろ、終わりにするぞ！」

シグナムがそう言うのと、カートリッジを1つ消費し剣を低く構えた。
構えたまま動かない・・・待ちか（カウンター）？
このまま、カートリッジの魔力が尽きるのを待つ事も出来るが・・・。

「シグナムに失礼だし面白く無いよな、それじゃあ！！」

敢て相手の土俵で勝負してやる。

・・・なんか俺までシグナムの戦闘狂が伝染ったか？

少し、戦闘が楽しいと感じている自分に驚くよ。

俺は突進し、宵闇の形を刀の形状に変化させた。

「・・・星火燎原の太刀！」

「紫電一閃・一颯！」

やっぱりカウンターだった。

初撃を防いだと同時に下段から剣が襲い掛かってきた。

俺は逆袈裟を斬られ、無理な体勢で放った2撃目が浅くシグナムに当たった。

3撃目を何とか当て後退する。

「早さには自信があったんだけどな、まさか初太刀を防がれるとは

思わなかったよ」

「こちらとしては読みが甘かった。連撃は予想していたが初撃を防げば連撃は防ぐ事が出来ると思っていたが、反撃をくらってもなお攻勢を解かないとは」

「引き分け・・・か？」

「そうだな、互いにこれから研鑽すべきものが見えたように思う」

その場に座り込み、笑い合う。

戦闘技能試験は戦いを見るものであつて勝敗は関係ないはずだし、問題なく合格だろ。」

「白衛、お前は主はやてを救いリインフォースも救ってくれた。我々はお前に大恩がある。もし困難な状況に陥ったのなら我々は必ずお前の力となるし、何か悩みを抱えているのなら話してくれ、我々でも力になれるかもしれない」

「ありがたいな、シグナム。これからもよろしくな」

リミッターの件、シャマルに話してみるか。

今以上に効率良く力を抑制できるかもしれないし。

・・・ゾクッ！

「・・・シグナム、何か今すごい悪寒を感じただけど？」

「・・・奇遇だな、私もなぜか冷たいものが背筋を走った」

2人で顔を動かさずに視線を巡らせると、魔王、死神、狸がもの凄いい黒い笑顔でこっちを見ていた。

「俺達って、あいつ等の気に障るようなことしたか？」

「いや、皆目見当が付かん」

《・・・何故、あの童女共が何故怒る理由が分からんのだ。主よ》

（お前は分かんのか？）

《・・・ふう》

神剣に溜息吐かれました。

第26話 俺、被害者のはずなのに最近踏んだり蹴ったりじゃね？（後書き）

ドアノブ「さうて、次回から少し管理局の仕事を利用して異世界で踏んだり蹴ったりの毎日を送ってもらいましょうか？」

白衛「異世界は純粋に楽しみだけど、もう少し俺への扱いに対して改善を要求したい！」

ドアノブ「オリキャラ考えてるからそこまでの余裕ナッシング」

白衛「誰か！俺に平穏をくれ！！」

第27話 悪役って成金趣味が多いの？（前書き）

ドアノブ 「どうも、一週間ぶりの投稿です」

白衛 「前よりは早く更新できたな。それでも遅いけど」

ドアノブ 「返す言葉もございません」

第27話 悪役って成金趣味が多いの？

嘱託魔導師試験の日から1週間が経ち、とりあえず日常的にも魔法関係でも何事も無く平和に過ごしている。

で、今日は日曜日でなのはと一緒に翠屋の手伝いをしている。

え？試験結果はどうだったのかって？

ちゃんと受かったよ。今はクロノがどんな仕事をさせるか思考中。

その間暇なわけで、翠屋の仕事に精を出してるわけですよ。

最近はマンネリ化したのか野郎共が今までのようにがつついて来なくなっただけだね。

「なんか、久しぶりに翠屋で働いてる気がするな」

「実際、宵闇さんがやってたわけですし、久しぶりであつてると思いますよ？」

そうだったな、宵闇、お前が居てくれて本当に良かった。

お前が居なければ俺はこのコスプレ喫茶になりかけている翠屋で働き続ける事は出来なかっただろう。

「すいませーん、会計お願いしまーす」

「あ、はい、白衛さん、私レジに行きますからテーブルを拭いて空の食器を片付けてくださいね」

「了解、わかった」

さてと、ピークもうすぐ過ぎるしもう一頑張りしますかあ。

カランカラン

おっと、新しい客だ。

「いらっしゃいませ、店内でお召し上がりでしょうか、お持ち帰りでしょうか・・・か？」

振り返り、接客しようとしたら居たのはクロノとエイミーだった。

「仕事中にすまない、君にどの仕事をまわすのか決定したから説明しに来たんだ」

「とりあえず立ち話もなんだから座席に座らせてもらえない？」

「女性客1名様入りまゝす」

「どういう意味だそれは！？帰れと暗に言ってるのか！？」

「まさか、お客様にそのような事・・・」

「だったらその犬を追い払うような手つきを止めたらどうだ！？」

しばらくはのんびりできると思った矢先に来やがって、空気読めん奴は帰れ！シッシッ！！

「せっかく仕事を持ってきたというのに！」

「いや、持ってきてくれんのは有難いよ？ただもうちょっと空気読んで欲しかったって言うか時間をあけて欲しかったって言うか」

「管理局は知っての通り人手不足だからねえ、人材が居ればすぐに起用すると思うよ」

まあ、人手が足りてるならなのは達が管理局に入ることなんて無いだろうしな。

「念のために聞きたいんだけど・・・」

「心配しなくても上層部からの物は無い。ミッドチルダを中心に周辺世界の最近起こった事件をいくつかをピックアップしてきた。簡単な任務だが、とりあえず初めは僕が同行するから仕事の雰囲気

覚えてくれ。明日になったら家に集合だ」

そりゃどうも、流石に仕事初心者に仕事内容教えて後は丸投げみたいな事は無いか。

つと、一応なのはのこと、注意しとくかな。

「わかった、それと、なのはの事なんだけど」

「なのはがどうかしたのか？」

「あいつが魔法世界に強い希望を持ってそれに励んでいるのは分かってる。けどな、あいつの魔法に対する入れ込みようは普通じゃない。少し前にリンディさんなのはの任務への志願件数を見てみたんだが、数は少ないが積極的に志願してる。おまけに日常生活には学校もあるんだ、いくらなんでもハードすぎる。俺からも注意してるけどクロノからも休むようにそれとなく言っておいてくれ」

「確かに、志願して却下する事は稀だし、なのはなら心配ないランクの任務だと受理してしまっていたな」

「今のサイクルだといつか取り返しの付かない怪我を負ってしまうかもしれない。その前に周りからでもフォローしとかないと」

「分かった、こちらも注意しておく」

まあ、あいつがそれで素直に休むとは思えないけどな。

あんまり無理するようなら、ベッドに縛り付けてでも休ませるか。

「それじゃあ、明日の9時に家来るように。遅れるなよ？」

「初出勤で遅刻なんてするかっ！」

翌日 AM 8:00 ハラオウン家

「随分早く来たな。まだ1時間も余裕があるぞ」

「何事も1時間前行動は基本だろ？」

「いや、てつきり時間ギリギリになって慌ててくるものとばかり」

「お前の中で俺は一体どれ程時間にルーズな人物なんだ」

遅れるなよって言うから早めに来たのに。

ガチャッ

「あっ白衛」

「よっ、おはよ、フェイト」

「おはよう、これから任務？」

「そ、初任務。フェイトは学校だよな？頑張って勉強しな、漢字を」
「うゝっ、どうして知ってるの？」

この子って理数系はなのと同じくらい良い成績なのに文系はかなりお気の毒な成績なんだよな。

「いやほら、別の次元世界に居たわけだし、日本の漢字は数百は数があるから覚えにくいだろうなっと思って」

「が、頑張る」

「頑張れよ、まゝ俺はお前らほど成績良くなかったし、言えた立場じゃないんだけどな」

ふ、要は赤点取んなきゃいいのさ。
やべ、言ってて悲しくなってきた。

「雑談はそれくらいにして行くぞ」

「了解、それじゃフェイト、車に気をつけろよ」

「うん、白衛、クロノ行ってらっしゃい」

で、転送ポートを使って違う世界まで来たわけだが。

「何なんだよ、この異常なまでの湿気は？」

「今の時期、この世界では全ての土地でこうなるそうだ。最近になって管理されるようになった世界らしくて詳しい地形や気候は街があるところしか分かってないらしいが、全ての街で同じ証言が取れた」

世界の文明レベルは見た目、中世ヨーロッパって感じだな。

でも所々、機械じみた物質や物体が目につくのは管理局が提供した技術か何かか？

そのおかげか、民家にカビやコケは生えてない。

「いや、それはこの世界に昔からあった物らしい。かなり古いものらしくて今じゃ何時の時代に誰がどのようなにして造ったのかも分からない有様だ」

ああ、だから彼方^{あち}此方^{こち}で壊れかけやスクラップになった物が放置されてんのか。

「使用方法は分かってるのに、中の構造は理解してない。何か危ないげだな」

「僕もそう思う。だから、管理局もこの世界の平和のために前々から交流するように交渉してきたんだ」

「・・・」

「?どうした」

「・・・いや、なんでもない。それでこれからどうするんだ?」

「今回の任務はこの世界に侵入した犯罪組織の捕縛及び連中の売り飛ばした盗難品の回収だ。まず連中の情報を集めないと」

「何でそんな簡単に足が付きそうな事してんだ？」

「それがそうでもない、管理局と交流が無かった世界だが別に他世界と交流が無かった訳じゃないんだ。他世界の工芸品や生活必需品、そういった物とこの世界の名産品やあの機械の廃材等を交換したりしていたらしい」

「なぐる。他世界から来る人間は沢山居るから隠れ蓑にはもってこい。おまけに他世界の品々を持ってきても珍しい事じゃないから見逃されやすい」

「そう言うことだ、初任務にしては随分長引きそうな事件に当たったな」

「あれ、選んだのお前じゃないの？」

「いや、母さ、艦長があてずっぽうで・・・」

良いのか？そんな人が提督やってて。

あの甘ったるい砂糖入りのお茶を飲みながら「どくれくにくしくよくおくかくな」と言ってるような姿が思い浮かんだ。

「じゃあクロノ、まず酒場に行くか」

「？何故酒場に行くんだ」

「こういう場合、まず酒場で聞き込みが定番だろ？まさか町人1人1人に聞き込みするつもりか？」

「いや、まずこの街の警備隊の指揮官にここ最近に珍しい物品を持ってきた一団が居なかったか聞く」

この街は決められた時間に警備隊が警邏しているらしい。

「無駄だと思うけどな」

「何故そう思う？」

「犯罪組織と軍や政府のお偉いさんの癒着なんてそう珍しい事じゃないし、癒着じゃなかったとしても他世界の物品なんて定期的に仕入れている物は別としてどれもこれも物珍しく映るだろ。その中で『珍しい物を持ってきた人達は居ませんでしたか?』と聞いても皆が『皆』って答えるだろうさ」

「何の手がかりも無いよりはマシだろう。少しでも有力な情報があればどう行動すれば良いかおのずと分かってくる」

分かった上で行くって事か。

まあ、嘔吐しているかどうかは能力を使えば分かるし。

「それじゃあ、まずは司令官の方に行くか、お宅の町を少し家捜ししますって断んなきゃな」

「君は・・・もう少し言葉を選んだ方が良いと思うぞ」

クロノに呆れられた顔をされ、何かムカついたのでエイミィの姿で頭を撫でてやった。もちろん怒ったよ。

「まったくもう、クロノ君たら照れ屋さんなんだから♪」

「さっさとその顔と口調を止めろ!」

冗談の通じない奴め・・・

街の市場を通り抜けるといかにも建てるのにお金掛けてますよと言わんばかりの建物が見えた。

内装も悪趣味と言うか、此処って兵舎だよな? さっき司令官の所行くって言ってたし。

何で床が全部絨毯なんだ? 階段の手すりが金ピカに光り輝いて見えるのは俺だけ?

「滅茶苦茶成金趣味だな」

「頼むから思った事をそのまま言わないでくれ」

「まあ、なんて芸術性の欠片も無く見た目だけで全く機能していない兵舎でしょうか、まるで黒船来航時、初めて外国人と会った日本人が見様見真似で着飾ったかのようなですねぇ」

「もっと酷くなってるじゃないか!!」

いや、マジでそう思う。

外国人はこんなものを着ている持っていると間違った情報を仕入れて疑わずに品物を飾って居るように見えるわ。

ン？誰か出てきた・・・なんで中世ヨーロッパ風味な世界なのに服装が旧日本軍将校のような格好なんだよ。ツルッパゲのサンタクロースのようなおっさんが向かいの部屋から出てきた。

「はっはっは、中々面白い感想を言われるお嬢さんだ。ようこそ、私がこの街の警備隊の指揮官を勤めていますゲンゼと申します」

「失礼しました、ゲンゼ指揮官。管理局執務官のクロノ・ハラオウンです。こちらは、嘱託魔導師の刃清白衛と言います。まだ新人で今回初めての任務と言うことで戸惑っているようです」

「別に戸惑ってはいないんだけどね」って言おうとしたらクロノがこれ以上喋るなど念話を飛ばしてきた。

「お忙しいところすみませんが、少しお伺いしたい事があります」
「何かね？こちらはいつも通りで何の異常も報告はされていないが」
「此処最近で、他世界の珍しい物品を持ち込んだ者達はいませんでしたか？」

クロノ、だからその聞き方だと。

ゲンゼは一瞬目を見開き、間を置いてから答えた。

「・・・さて、何しろこの世界は管理局の傘下に入る前から他世界と交流がありましたからな。他世界の物品はどれも我々にとっては珍しい物です。それに傘下に入りはしましたが、これといって世界交流の制限はされませんでしたし、いつもの様に様々な世界の様々な人種が行き来します。揉め事や国家を揺るがすような規模の危険物で無い限り警備隊は大抵の者や物を検分のみで門を通してしまいますので・・・」

ほれ見ろ、お決まりの返し言葉がきたよ。

「しかし、「分かりました、では今回はこれで失礼させていただきます。お忙しい時間に申し訳ありませんでした」白衛!？」

「さ、クロノ執務官、早く戻りましょう、まだ重要な案件が残ってるんですから。一応帰りに市場周辺を巡回しましょう。では失礼しました」

クロノの口を塞ぎ、腕を引っ張り兵舎から出る。相手方の返答も聞かずに。

当然、クロノがかなり立ててきた。

「何故引き下がった!!」

「しゅっ! 声が聞こえなくなるから少し声のボリュームを落としてくれ」

「何!？」

兵舎から50m、位離れた場所、市場の入り口付近で立ち止まり耳を澄ます。

「・・・何をしているんだ」

一応氣を使って小声で話しかけてくれた。

「俺は人間よりもずっと五感が良い。この距離からでもあのツルツパゲ独り言だって聞こえる。もし俺達が市場を巡回し始めたらきつと部下に尾行させるか、部下に街をうろつくなんて言うと思ったんだ」

「それは、ゲンゼが黒だという前提での話しじゃないか」

「それを今から確かめるんだよ、もし何も部下に伝えなければ白・
・かもしれない」

無能、またはただの生贄^{みがわり}という線もあるし白と断定はまだしないで
おく。

耳を澄ませるとゲンゼと数名の話し声が聞こえてきた。

兵舎内

『だから俺は反対だったんだ！管理局の傘下に入っちゃってから仕事
事がやりづらくなってしかたねえ！』

『もうしばらくの辛抱だ、管理局の上の連中に俺等の仕事は金にな
ると分らせる事が出来れば以前とは比べ物にならねえ位仕事はや
りやすくなる。そうなりゃ金だろうが女だろうがロストログアだろ
うが手に入り放題よ』

当たりかよ、様々な人種が行き交う世界なんだから防音なり対策し
とけよ。

『とにかく、探りを入れてきたあのクロノと白衛ってガキは邪魔だ。
幸い俺達が組織の人間だって事には気づいてねえみたいだしさっさと
帰ってくれるならよし。帰らねえなら行方不明ってことになって

もらう』

『市場の辺りを巡回するって言ってたな。両方がキだが片方は女、男の方も金持ちの好き者が高く買い取ってくれそうな顔だ。下っ端連中には顔は傷つけるなと連絡しておけよ』

『わーかってるって、此処で捕まっちゃったらせつかくの苦労が無駄になっちまう。っと、そういや、あの獣人の女どうなったよ?』

『相変わらずだよ、何とか鎖につないで檻にぶち込んだが、子供を守ろうとして近づくとももの凄い殺気で飛び掛ってきやがる』

『商品としては使んな、管理局が提供してくれるデバイスとやらの的になってもらうか、地下牢から出しておけ』

『怖いねえ、お頭、いやゲンゼ警備隊長様』

『フン!頭の悪いお前らのおべっかなんぞに何の意味も無いわ、さっさと行動に移れ、せつかく管理局の傘下には入れたんだ。上層部を後ろ盾にしてこの世界を裏から牛耳ってやる』

市場

「・・・だってさ、どうする?逃げるかそれとも返り討ちにして捕まえるか」

「本当に聞こえるとは・・・決まっている。奴ら全員の捕縛だ」

「だな、それに奴ら人身売買もしてるみたいだし、証拠を押さえれば何も言えないだろ」

「しかし、証拠を掴もうにも証拠はさっきの兵舎の地下にある。どうやって忍び込むか」

「俺が忍び込むよ。俺なら動物だろうが無機物にだろうがなれるし」

「では時間が無い、早速行動開始だ」

何か初任務なのに全然簡単じゃない物騒極まりない展開になってきたな。

第27話 悪役って成金趣味が多いの？（後書き）

白衛「まさかゲンゼがオリキャラか？」

ドアノブ「いや、ただのサブキャラ、まだ考え中」

白衛「せめて俺の負担になら無そうな性格にしてくれよ」

ドアノブ「却下♪」

友（仮）「もう少しまってね♪」

ドアノブ・白衛「あんたダレ？」

友（仮）「ひさしぶりに出たと思ったら存在すら忘れてやがったのか!？」

白衛「あ、少し性別が戻った」

ドアノブ「こんな感じの人どう？」

白衛「断固拒否する」

第28話 お前の罪が見える。見たくないものまで見える（前書き）

ドアノブ「ええと、まず言い訳をさせていただきたいのですが」

白衛「その前に謝れドアホウ」

ドアノブ「すいませんでしたぁ！前回の投稿から3日後に自宅（社員寮）のブレーカーが故障し、PC自体がイカレルという事態になりました！修理しようにもお金が無く、周辺にはネットカフェすらないこの状況、少しずつお金を稼ぎ新たにPC（兄貴のを中古で）を買いました！！」

白衛「一応更新不定期とは言ってたけど、もう少し何とかしろよ」

ドアノブ「こっちだって今日まで地獄だったのよ！？PCが無いから買っても出来なかったPCゲームが山のように！！」

白衛「その金をPC購入に回せばもっと早くPCを買えたらーが！！」

ドアノブ「甘いものと欲しいものは別腹です！」

白衛「・・・何と言うかもう色々ダメだなお前」

ドアノブ「とまあ、言い訳をさせてもらいましたがこれから細々と投稿させていただきますのでよろしくお願いいたします」

第28話 お前の罪が見える。見たくないものまで見える

兵舎内 地下

俺はネズミに化けて兵舎の中に居たチンピラにしか見えない兵士の後をつけた。

奥の部屋で地下へと続く階段を下りていったので、俺も入って獣人の親子を探している真っ最中だ。

《……主よ》

（ん？どうした宵闇）

《その頬っ被りには何か意味があるのか？》

（いや、悪党の屋敷に侵入した正義の味方はこの着けてるだろ）

○山の金さんとか○んばれ○エモンの○ビス丸とか。

《……かなり時代錯誤な正義の味方がいるものだ》

（まあ、ぶっちゃけノリと暇つぶしに着けてみただけなんだ）

だって広すぎだろ此処。

地上の兵舎よりも面積が絶対にあるぞ。

多分もう市場の下辺りまで歩いてるんじゃないか？

こんなに広いんじゃないや会話に出てきた証拠の獣人親子を探すのにも一苦労だ。

○ルネコの不思議なダンジョンみたいに階層の地図が分かる巻物でも落ちてないのか？

……ってそういえば能力使えばいいじゃん俺！

あまりにもマイナーなキャラで使用頻度の低そうな能力だったから

忘れてたよ。

「【透視能力】クレアボヤンス発動」

先に言っておくけど、絶対可憐の方じゃないからね？
詳しくわニードレス・ゼロツォ参照で。
っと、見えてきた見えてき……。

一壁向こう

『まったくお頭も人使い荒いよな、確かに頭悪いけど少しは良い目見せてくれたって良いじゃねえか、なあ？』

『じゃあねえだろ、お頭は自分の欲望に忠実だからな、俺達やそのための道具でしかねえんだろうさ』

『ま、愚痴はこれくらいにしてさっさと風呂入ろうぜ』

『地下に風呂なんて作んなくても良いだろうに』

『上はお頭以外使うなってよ、贅沢だよなあ』

《……無事か？主よ》

（……こ、この世で最も見たくないモノを見てしまった）

き、気を取り直して黙っ子はいないか探さないと。

……あ、いた。何だよ俺が下りてきた階段のすぐ右に行けば良かったのか。

反対方向に来てたみたいだな。

でも1人しか見当たらない、もう1人は別の部屋か？

（宵闇、多分もう1人居るはずだ、俺はもう一人を探すから、あの人を拘束を解いて保護しといてくれ）
《承知した》

宵闇を実体化させて、俺は他の部屋を探しに行った。

獣人の女 SIDE

どうしてこんな事になったんだろう。娘と山菜を取りに隠里から出て、しばらくしたら武器を持った人間達に捕まってしまった。

見慣れない杖のようなものを持っていて、何か呟いたと思ったら光の帯のようなものが私達を縛り付けていた。

私の種族は戦闘に長けた者が多く、実際私も里の中ではかなり強い方だ。なのにどんなにもがいても逃げる事が出来ず、娘と一緒に檻に入れられた。

「売られる・・・か」

里長から聞いたことがある。

私達はこの世界でも珍しい種族で、人間達には愛玩用に捕獲される事が大昔からあった。

そのため、人間は我等を捕獲しようとする。金を手に入れる為、欲望のはけ口が欲しい為に。

人間が踏み込めない森の奥深くに隠里を作ったのはそういった連中から逃れる為だと。

実際捕まえにやって来た人間達はみんな臭くて汚れた顔をしていた。近づいてきただけで鼻が曲がりそうだ。

1人頭の毛がない男は身なりを良くしていたが、目を見た瞬間に寒気が走った。

私達を見ているのに、まるで違う物を見るかのように笑っている。

『くくく、まさか、こんな希少種が手に入るとは、言い値で買い取ってくれる客は大勢居るだろうな』

売られる、きつと何処の誰とも知れない人間の屋敷に連れて行かれ首輪をつけられる。

私の娘も。そう考えた瞬間、私は暴れだした。

「結局、捕まってしまったが」

娘に手を出そうとした人間に殺気を放つと臆病にも奴らはすぐに逃げ出した。

しかし、あの杖から放たれる光の帯を出されるとどうしようもなかった。

いくら抵抗しても全く解けなかった。

しかも娘とは別々の部屋の檻に入れられてしまった。

娘は無事だろうか？変な事はされてないだろうか？ひょっとしてもう売られてしまったのでは・・・ダメだ。嫌な想像しか頭をよぎらない。

ガチャ

何度か見た覚えのある人間がやって来た。

だが様子がおかしい、何か焦っているように見える。

ほかの檻を調べ、最後に私の所にやって来た。

「答えやがれ！テメエのガキを何処に隠した！？」

「・・・何？」

・・・何を言っているんだこいつは？

娘ならお前たちが私から奪い他の檻に入れたではないか。

奪い返そうにもつけられた拘束が頑丈で身動きが取れない。

娘が居ない？何故？逃げたのか？わからない。

「む、娘が居なくなったのか！？どこへ！？」

「とぼけんじゃねえ！どうせテメエが隠してんだろ！！金になると思ったら親の方は凶暴すぎて商品に出来やしねえ、ガキの方だけは逃がさねえようにしてたってのに檻を見たら影も形もありやしねえ！ガキが逃げるとしたら親の居る此処しかねえだろ！！」

確かに言っていることは正しく思う。

此処は人間達の住む街の地下に作られた部屋だ。

森から随分離れているし、どの方角に行けば隠里があるのかさえ分からない。

おまけに地上は人間だらけ、年の割りに妙に落ち着いた所のある娘が地上に行くとは考え難い。

しかし、此処に娘は着ていないし、近づけば臭いですぐに分かる。

とはいえ、この男は何を言っても私が匿っているとしか受け取らないだろう。

私としても一刻も早く娘の安否を確認したい。

一体どうすれば良い！？自分が拘束されていることも忘れて娘の事を考えていたら扉の開く音がした。

「・・・その獣人、助かりたいのなら我に付いて来い」

緑がかった銀髪に蒼い瞳をした少女が入ってきた。

獣人の女 SIDE END

宵闇 SIDE

「テメエ、確か白衛とか言うガキじゃねえか！どうやってここに入りやがった！？」

「貴様の後をついて行っただけだ。自分達の城内とはいえ油断しすぎではないか？」

「どうやら子供の方が居なくなったらしいな。」

「まあ、主が探しているからすぐに見つかるだろう、今は目の前の方を助けるとうしようか。」

「それにしても、兵舎に入ってからゲンゼに会うまで貴様と会った覚えは無いが、何故我の名前を知っている？」

「え？あ、それは・・・」

面白いくらいに動揺しているな。

目があちこちに泳いでいる。

「おかし、いや、ゲンゼ警備隊長から聞いたんだ！」

「今思いついたと言わんばかりだな。子供か貴様は？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「と、とにかく、此処が知られたからには生かしておく訳にはいかねえ！」

懷からナイフを取り出した。

相手からすれば年端もいかぬ小娘に見えるのだろうが、神劍どころかデバイスとやらですらない鉄を研いだだけの物を向けていきがる姿は滑稽で笑いを誘う。

「・・・くくく」

「なんだあ！怖くておかしくなったか！？今更命乞いしたって遅いぜ！！」

「・・・ナイフ程度でそこまで粹がれるというのも凄いな、とりあえず邪魔だから眠っている」

ドムッ

「ゲッフウ！」

鳩尾に軽く拳を抉りこんで気絶させた。

「さて、確認するが貴様が捕われた獣人の片割れだな？」

「・・・」

こっちを警戒してるのか返答はない。

ふむ、見た目人間と変わらんな、人間が見たら何処が獣人なのか分からんだろうな。

「・・・貴様はこの男の仲間ではないのか？」

「笑えぬ冗談だな、我は主の願いで貴様を助けた。正直に言えば貴様の生き死に等どうでも良い。ただ主の願いを守るために我は居る故に貴様を助ける」

「・・・人間は信用できん。それは身をもって知った。貴様の言葉も信用しない」

我とて主以外の者と長々と話すつもりはないのだがな。強引に連れ出す事は容易いが、抵抗されても面倒だ。

「どうすれば、我を信じる？」

「何をしようが、何を言おうが無駄だ。人間は我等を金かペットとしてしか見ていない。今ではそれが十分に分かる」

「それは理解している。その上で我を信じるか否かを決めよ。じきに貴様の子も主が見つけるだろう」

「!・・・何が目的だ？貴様に何の利益がある？」

「先程の話をもう忘れたか？ただ貴様ら親子を救う事を主が願ったから我は動いているだけだ。利益と言えば、主の願いが果たせる。それだけだ」

「では主の方には何の利がある？」

「時空管理局と言って、世界を管理する組織に属している。主の上^ク司^ロの言を借りるなら平和の為に戦う崇高な組織らしい」

「ふん、ようするに仕事を成功させて出世がした・・・グウ!？」

それ以上は言わせない、影を伸ばしこの女の首を締め上げる。

「・・・主を侮辱するようなセリフは許さん、貴様は2つ勘違いをしている。1つ、主は出世云々に興味は無い、知り合いの為に不本意ながら組織に属しているだけだ。もう1つは貴様と我は対等ではない、貴様の意志にかかわらず拘束し、主の元に行けば我としては十分。しかし、それは主が望まれる形ではないから説得してやっているのだ」

影の力を話が出来る程度に弱める。

咳き込みながらも此方を睨んでくる。

「この建物の連中は全員主が捕らえる。貴様等を不正の証拠としてな。事が終われば貴様らの自由だ。それまでは従え」

「・・・言葉が偽りだった場合、または失敗した場合はたとえこの牙届かずとも永劫に貴様を呪い続けてやる」

「フン、信じる信じないは好きにしろ。我と主が居るのだ、人間如

きに遅れなど取らん」

宵闇 SIDE END

白衛 SIDE

時間は前後して30分程前。

能力を使ってあたりを探しているにもかかわらずまだ見つからない。

「埒が明かないな、手下1人1人捕まえてボコッて居場所を吐かせるか?・・・ん?」

こうして探しているよりも時間が掛かりそうな事を考えながら次の部屋を透視する。

すると、獣人は居なかったものの気になるものが見えたので部屋に入った。

「・・・酷いなこりゃ」

部屋の内装は他の部屋と一緒に牢屋が幾つもある。

他と違う点は生き物だった者達の残骸がそこかしこに散らばり、壁の至る所に血がこびり付いているということだ。

「・・・この惨状はいったいどういうことだ?」

宵闇に念話で話しかけた訳じゃない。今は別行動中だし当事者じゃない宵闇に聞いても無意味だ。

他の人間が見ていたなら随分危ない奴と思われるだろうな。

俺は、一番奥の牢屋に向かい、誰も居ないのに話しかける。

「・・・成る程な、実験半分遊び半分だと。・・・俺は立場上殺しは出来ないし、殺せない。だが、あいつらには生まれたことを後悔するくらいの恐怖を味あわせてやる」

話しかけた相手は半ば遊びで殺された者達。

人買い、人狩り、返せない借金^の代わり、etc.

この部屋を透視した瞬間、物凄い数の死者が蠢^{うごめ}いてるのが見えた。地下に牢屋がある時点でなんとなく想像はしていたが、胸糞ワルイっतरらない。

俺は死者たちに話しかけた。

俺と一緒に復讐^{ふしゅう}しないか？

命を奪われたのに、殺されたのに殺し返せないのは心残りだと思う。だけど、殺してあいつらをお前たちの同類^{なにかま}にしても面白くないし癪^{しゃく}だろう？

ならせめて、顔をグシャグシャに歪^{ひね}め、醜^{みにく}く涙を流して謝罪し、許しを請う姿を見て高笑いしてやろうじゃないか。

「・・・上等、さあ、俺と一緒に崇^{たか}りに行ってやろうぜ」

同意の意思を確認し、皆を引き連れて次の部屋に向かう。
随分と大所帯になったな。

「っと！そういうええ聞きたい、獣人の子供を搜^{さが}してるんだけどお前たちは知らないか？」

何人かが反応し、自分達の骸^がの山の方を指差す。
するとが山が少し動いた。

「・・・そっか、そこに隠れてたのか、ありがとう、教えてくれて」

「・・・誰ですか」

俺と同じ位の身長の女の子が出てきた。
黒く短い髪に黒を基調としたゴスロリを着ている。売られる予定だから身奇麗にさせたのかな。

「俺は白衛、時空管理局って所で仕方なく働いてる。主な仕事は悪人ブツ飛ばしてその被害者を助ける事・・・かな？」

ま、俺がやる事はこんなところだろ。
少なくとも、なのはなら絶対敵に向かってブツ飛ばすだろ、魔法を。

「・・・ノエルです。さっき誰と話してたのですか？此処には私以外誰も居ません」

「手遅れになった被害者達と。俺には普通の奴には見えないものが見えるんだ」

「・・・その人たちを連れてどうするんですか？あの人たちは魔法を使います。死者を連れていようと何も出来ません」

「魔法くらい俺も使うよ、それにあいつらなんて目を瞑っていても倒せる」

半信半疑といった表情でこっちを見つめてくる。

まあ、いきなり部屋に入ってきて、1人で喋ってた奴の言葉を信じるかと聞かれれば即NOと答えるだろ。

「・・・それは仕事だから？」

「それも理由の1つ、俺はね、結構自分本位でね。自分的に納得のいかない連中が嫌いなんだ」

「言っている意味が分かりません」

「例えば、『我々は正義のために戦っています。正義のために多少

の犠牲、一般人の犠牲なんて仕方ない事』って言う連中や、正義面して裏でこういうことしてる連中は嫌いなもの」

大抵そういう連中は、自分が被害者側に回りそうになると逃げるか仕方なかったとか言いやがる。

「理由は分かりましたが、そんなこととして貴方に何か得があるんですか？」

「仕事をこなすと、友人の自由に繋がる事、生活に必要な給料が手に入ることも……あつ、後気に入らない奴の顔ブン殴ってすっきりした気分になるから」

「……」

……俺、ひょっとして言葉の選択間違えた？

何か、すごい静まり返ってる。

……ウォイ、被害者の皆さん、なんだその「空気読め」とか「こいつマジ信じらんねえ」と言わんばかりの顔は？

幽霊達を睨んでみると、クスクスと小さく笑う声が聞こえてきた。

「ふふ、面白い人。とりあえず納得しました」

「何で納得したのか気になるけど、とりあえず一緒に来てくれる？君のお母さんも俺の仲間が保護してるはずだからここから出るよ」

微笑みながら差し出した手をギュッと握ってくる。

よし、これで後は連中をふんじばってボコるだけだな。

白衛 SIDE END

ゲンゼ SIDE

兵舎 地上1階

「まったく、獸人のガキ1匹連れてくるのに何を手間取って居るのだ。あのバカ共が！」

以前から使えんと思って居ったが、此処までとは・・・本当に使い捨てにした方が今後の為になりそうだ。

どうせあのバカ共の代わりになる奴らなど幾らでも居る。

苛立ちながら考えていると扉が開き兵士の格好をした部下が2人やって来た。

「馬鹿者！ノックをしろとあれ程言ったのにまだ分かんのか！！」
「す、すいやせん、でも獸人のガキをやっと連れてきたから報告をと・・・その方が安心すると思って」

「ガキ1匹逃がした挙句、捕まえるのにも手間取っておいて何を言うとするか使えん奴め！さっさとガキを置いて持ち場にもどれ！！」

「う、ういっす。おい、そっち持てよ」

「ああ、わかった」

部下2人は小さな檻に入れられた獸人の少女を部屋の中に入れ部屋から出て行った。

あれで気を利かせたとでも言いたいのか？出来て当たり前の事が出来ていないのだから怒るのは当然ではないか。

まあいい、こいつを売ってしまえば物凄い額の金が入る。

そうなれば、部下の総替えなんて容易い事だ。

「ふふふ、できるだけ金持ちで趣味の良い奴に売り飛ばしてやるかなあ」

「・・・何故売り飛ばすの？」

正直驚いた、こちらが何を言っても今まで無言で睨んでくるばかりのガキが初めて喋ったからだ。

「決まっているだろ。色んな物が欲しいからさ、金も女も珍しい物品も、土地も世界も、金さえあれば色んな物が手に入る。この世界には無い技術や魔法、もしかしたら不老長寿や不老不死の方法だって手に入るかもしれん。とにかく、金になるものが欲しいのさ!!」
「・・・この街の人達はみんな貴方の手下？」

「フン！兵舎内の連中だけださ。使えん連中だが欲望に素直なだけあって思い通りに動いてくれるよ。と言っても逃げて助けを求めようなんて思うなよ？なんせワシは警備隊長だからな、質の悪い獣人が紛れ込んだと言えば皆警戒してお前の言葉なんぞ聴きやせんだろうさ」

「・・・そう、大体分かった」

「くくく、母親と違って物分りが良いじゃないか、安心しろ母親も殺さずに何処かの好事家に売り飛ばしてやるよ」

母親は今日中にあの世行きだ。どうせ会うことは永遠にない。だが少しは生きる希望を抱かせておかないと商品価値が下がってしまうからな。

絶望に満ちた表情よりも何があっても希望に縋ろうとしている表情の方が受けが良いしな。

「へえ、デバイスで魔法の的にするんじゃないかったのか？」
「は？」

一瞬誰が喋っているのか分からなかった。
このガキが喋っているのは間違いない、だがさっきとはまるで声が違う。

ワシが混乱していると獣人のガキの身体が黒く膨れ上がり、形を変

え少し前に尋ねてきた管理局の白衛とかいう女の姿になった。

ゲンゼ SIDE END

白衛 SIDE

いやゝ、面白いくらいに上手くいったな。

いきなり姿が変わったから奴さん驚いてるよ。

「し、白衛さん！？ 貴様、いや貴方どうして此処に！？」

「今更言葉を丁寧にしたって無駄ですよ？ あんたがどういう人間かは分かってますから。元から疑っていましたけど、1度兵舎を出た後あんた達の話し声が聞こえたから逆に捕まえてやろうと思って、ああ、獣人親子ならとつくにクロノ執務官が保護したよ」

「なっ！」

「野望を抱くのは結構けどもう少し自分の身の丈に合った野望にした方が良かったな。後、手下呼んでも無駄だぞ？ 今頃自分の犯した罪の罰を受けてる頃だ」

「バ、バカを言うな！ 此方には大勢の部下と武器があるんだぞ！？ 貴様等だけでそんな事が出来るものか！！」

いや出来るだろ。

少なくとも俺なら出来るし。

クロノもこいつ等に比べれば強いし、宵闇には絶対勝てないだろ。

「出来る出来ないはどうでもいいよ、どうせ後で出来るんだって思う事になると思うしな。それよりも、少女誘拐及び賄賂その他諸々でしょっ引くから逃げん n・・・早いな、オイ」

喋ってる途中で逃げやがった。

仕方ないから追いかける。

人間にしては早いけど、おっさん運動不足じゃね？すぐに追いついた。

面倒だから降参してくれない？

「こ、こんなことで終わってたまるか！今までどれだけ苦労してき
と思っとなるんだ！ワシはこれからずっと金を手に入れるんだ！そ
れをこんなガキに邪魔されて終わりだなんて納得できるか！！」

諦め悪いやつだな。

さっきちよろっと倉庫にあったデバイスを見たけど、旧式のスト
ージデバイスしか置いてなかった。

こっちとは戦力的にも実力的にも違うってことが分らないのかね
え？

おまけにこのパチモンサンタ、腰のサーベル以外何も持って無さそ
うだし。

しばらく追いかけてっことを続けていたが、まあ当然おっさんの体力切
れで決着が付いた。

で、今クロノと一緒に兵舎前に簀巻きにした連中を並べてます。

「白衛、これで全員だが一体何をするんだ？」

何をするかって？決まってるじゃんクロノ君。

約束は守り通す主義だからな。

「コラァ！縄解けや！！」

「警備隊にこんなことしてタダで済むと思ってるのか！？」

「俺達が何したってんだ！アァ！？」

状況の分かってない変装盗賊A・B・Cが居たので名誉ある最初の

犠牲者を決定した。

俺は足元に転がってる奴らのストレージデバイスを1つ手に取り、へし折った。

見た目が華奢な俺だから皆驚いてる。

「あんたらさ、いろんな生き物捕まえては売り飛ばすか、戯れに殺してたろ？地下の牢屋から血の臭いが染み付いてたぞ。ああ、言い訳は言わなくてもいい、証人が居るからな」

「証人だあ！？んな奴居るんだったら連れて来いよ！居るわけねえけどな！！」

「違いねえ！俺達や無実だぜ！！ギャハハハ、ギャツ！」

ゲラゲラと笑っていた仲間が突然悲鳴を上げて倒れた。

何事かと倒れた奴を見ると完全に白目をむいて気絶している。

「て、てめえ、何しやがった！？」

「俺は何もしてないぜ、俺はな。お前たちが無実だって言うなら彼らもこれ以上何もしないだろうさ」

「か、彼ら？」

「見えないなら見せてやるよ、お前たちの罪をな」

第2の視覚発動

セカンドサイト

能力の発動と同時にあたりの景色が一変した。

あたり一面亡者の群れで犇めいている。

さっきまで笑っていた連中は笑顔のままフリーズしている。

「自分の侵した罪の重さを理解しな。彼らも気が済めば開放してくれるさ」

「ま、待ってくれえ！こいつ等何とかしてくれ！！」

「助けてくれ！俺は悪くないんだ！！」

「ワ、ワシのせいじゃない！こいつ等が勝手にやった事だ！！怨むならこいつ等を・・・！」

しばらくの間、兵舎から悲鳴が止むことは無かった。

1時間後、ゲンゼ達に話しかけてみた。

「返事が無い、ただの屍のようだ」

「君が気絶させたんだろう、見ろ、恐怖のあまり白髪になってる奴まで居る。・・・恐ろしい能力だな」

「フン、後ろ暗い事をしている奴らにはちょうど良い仕置きだろう。こやつ等ほど滑稽と無様と言う言葉の似合う連中は居まい」

宵闇の奴、合流してからやけに不機嫌だったけど何かあったのか？同情する気は無いけど、連中に対する感想まで酷いな。さてと、これで一応初任務は終わりかな？

「ま、これで少しは懲りたろう。後は管理局の連中が連行してくれるんだろ？」

「ああ、連絡はしておいたからすぐに来るだろう」

と言う事は、残る問題はこの親子だけか。

「住んでた村に帰そうと思うんだけど場所はわか「無駄だ」何でよ？」

「我らの種族は確かに森で暮らしているが、人間の獣人狩りを避けるため里ごと移動している。同じ場所に里を建てる事はまず無い。それに数日里に帰らなかった者は里に入れてもらえない掟になっている。どんな理由があれ、死亡扱いとなる」

「じゃあ、どうする？この辺りじゃ住み難いだろうし、クロノの家に厄介になるか？」

「おい、厄介な事は全部ハラウン家が持つと思ってないか？僕の家にはすでに1匹^{アルフ}居るから無理だ」

そんな迷惑そうに言わんでも。

「だったら君が家を買って、そこに2人を住まわせればいいじゃないか。妹に近づく少し毛色の変わった虫が来なくなつて一石二鳥だ！」

「ほっほう、そんな事を言いやがりますか。以前言っていた貴様のゴスロリ姿の写真を管理局中にばら撒く日も近いなあ！！」

連絡を受けて到着した管理局員が話しかけてくるまで不毛な言い争いは止まらなかった。結局、獣人親子の件は保留となり、とりあえずアースラまで同行してもらった。

第28話 お前の罪が見える。見たくないものまで見える（後書き）

ドアノブ「実際、家買って住まない？」

白衛「戸籍も無いのにどうしろってんだよ？今だってなのはとフェイトとはやての家をローテーションでお泊り生活でなんとかしてるって状況だぞ」

ドアノブ「その辺どうしようか考えます」

第29話 これ任務って絶対言わねえ！（前書き）

ドアノブ「今回かなり短めっス」

白衛「何故、舎弟語？」

ドアノブ「いんや、特に意味無い」

白衛「・・・ま、今回は後日談でこれから書く日常編のための区切りのつもりです」

ドアノブ「仕事の休憩時間にネタ考えてますが、1話1話が短くなるかもしれないっス」

白衛「ウゼエからその言葉使い止めろ」

ドアノブ「ラジャ、そしてリトラ様、励ましになるお言葉ありがとうございます！マジで嬉しいです！！」

白衛「内容も作者もグダグダですが、今後とも閲覧していただけたら幸いです」

第29話 これ任務って絶対言わねえ！

「それじゃ、自己紹介してもらえるかしら」

相変わらず超が付くほど激甘なお茶を飲みながらリンディさんが名を尋ねる。

この人糖尿病の心配しなくていいのか？

「リマ・ノウマードだ。此方は娘のノエル」

「はじめまして、ノエル・ノウマードです」

現在アースラにて報告を済ませ、獣人親子をどうするかっていう議題になっている。

当初の予定通りハラOWN家に住み込む・・・と思っていたが親子が拒否。

人間とあまり関わりたくないらしい。

「でも困ったわねえ、この世界もこの艦も9割近く人間だし」

「それじゃ、逆に2人に聞きたいんだけど、どうすれば納得する？」

エイミィに聞かれ顔を見合わせると、リマが答えた。

「白衛と同じところなら構わない」

「というわけで、後のことは頼むぞ白衛」

「お前それでも執務官か！？丸投げしてないで最後まで責任持てよ」

「!!」

「でも、2人の希望を尊重するとそうなっちゃうのよねえ」

そうは言うものの、俺はこの世界で戸籍も無く家を買うほどの金も無い。

色々話し合った結果、俺がはよての家の近くにある一軒家を購入する事になった。

金はリンディさんが工面してくれるんだが戸籍の事はどうするのか聞くと。

「お金で何とかなるわよ、いざとなれば魔法を使って誤魔化すから」
♪

・・・最近俺の周りに居る女性が戦闘狂か腹黒のどちらかだと思っ
のは気のせいだと思いたい。
で、このことに最も反対していたのは・・・。

「「「「はんたーい!はんたーい!」」」」

3人娘+ヴィータとシャルだ。

リンディさんに講義するが、ことごとく論破される。

「家もフェイトちゃんとはやてちゃんの家も3人分くらいの余裕な
らありますよ!」

「でも彼女達は人間に不信感を持ってるじゃない?しばらくは信頼
できる人と一緒に居て徐々に周囲に慣れていった方がいいと思うの
よ」

「で、でも白衛も仕事が・・・」

「彼は嘱託だしそこまで頻繁に任務が来るわけじゃないわ。それに任務も研修期間の意味を込めてランクの低いものを出していくつもりよ、翠屋での仕事もあるしね」

「むう、理に適ったところから反論できへん」

「白衛が来ないとあたし等がシャマルの料理食わなきゃなんねーじゃねーか!!」

「お前反対する理由は身の安全の為かコラ！」

「だって白衛ちゃんしか料理味見してくれないんですよ！誰も食べってくれなくて」

「だからまず食わせる前に自分から味見しろよ！」

「しましたよ！私は大丈夫なのに、他の人が食べると何故か体調を崩すんです・・・」

「どう料理すりゃそんな事起きんだよ・・・」

そして、そんなもんを俺に食わすな！

閑話休題

話がそれたから元に戻そう。

俺は2人に1ヶ月間みっちりこの世界の知識を教え込み、体験させる事を任務とされた。

教え方は俺に一任するって言ってたけど、何故だろう？

『面倒だからお前が世話しろ』って押し付けられたような気分が残る。

なのは達の不満については、任務が終了したら週に3日、1日づつそれぞれの家に泊まることで妥協された。・・・そこに俺の意思が無いのは言うまでも無く。

1ヵ月後

あっという間に1ヶ月が過ぎた。

リマとノエルは最初は環境や文化の違いに戸惑ってはいたが、すぐに慣れて適応し始めた。

すぐに人と触れあうことは出来ないが、なのは達とは打ち解けて話すようになってきた。

見知らぬ人に声を掛けられると、ノエルは俺の後ろに隠れて睨みつけ、リマなんて威嚇するけどね。

誤解を解き謝罪する行為を1ヶ月間数えるのも馬鹿らしくなる位繰り返した俺の苦労を誰か労わり褒めてくださいマジで。

子育て若しくは愛犬の躾の苦労にまみれた1ヶ月が終わり、これですばらくはゆっくりできるわい。

「そう思っていた時期がありました」

「君は誰に何を言ってるんだ？」

予想外だったのは1ヶ月2人の世話をしている間に俺への仕事の依頼が大量に来ていたことだ。

「何でこんなに依頼が来てんだよ？管理局はどこまで人手不足なんだよ？」

「この前の任務の報告に記載したんだが、君の変身能力は魔法ではないから魔力察知されない。それに魔法解除の術式にも引っかからないから利便性が高い。そのためミッドチルダに在住の要人達から護衛、影武者の依頼が殺到してるんだ」

「思いつきり民間協力者がする仕事じゃねーよなそれ・・・」

「まあ、ランクが高いからその分報酬は跳ね上がるけどね、受けるかどうかは君が決めてくれ」

「多少は受ける。金銭的余裕は欲しいし、けど前も言ったけど上層部関係者がらみは誰であれ却下」

例え裏で何もしていない人物でも、その人の依頼を受けた事を理由に他の連中が依頼してくるかもしれないし。そういうウザったい事はごめんだ。

「わかった。そう報告しておく。さてと、とりあえずこれからの任務はこんなところか」

「じゃあ、俺は帰るぜ。はやて達と買い物に行く約束なんだ」

「白衛君、この1ヶ月の間にめっきり主夫になったよね」

そりゃあ1ヶ月あれば嫌でも身に付く。

しかもあの2人、買ってきた魚や肉に鉄串で串刺しにして焼いて食おうとする。

それ以外の料理のレパートリーも出身世界にしか無い材料を使ったものだったから料理を任せるのは不安すぎた。

消去法として俺が料理を担当するようになったんだ。

元から家事は一通り出来たが、今じゃ料理も凝った物も多少は出来るようになってる。

「必要に迫られれば上手くなるさ、それじゃな」

白衛が出て行き、クロノとエイミイだけが部屋に残る。

「エイミイ、君も少しは家事の練習をしないか？」

「私はちゃんと出来てるじゃん？」

「得意満面な顔で言っているが、料理をしてみると数時間掛けてできたものがインスタントラーメンだったときは流石に怒りたくなかったぞ」

「じゃあこれからはクロノ君が料理を作ってね♪」

何処までが本気で何処までが冗談なのか分からない上に他力本願まっしぐらなオペレーターだった。

第29話 これ任務って絶対言わねえ！（後書き）

ドアノブ「これから、2，3話くらい日常編を書くつもりです」

白衛「ハッキリ言って怖いことになる。俺が」

ドアノブ「次回、白衛君は犯罪に走ります。走らなくても無理矢理走らせます」

白衛「かなり無理があるからマジ止めろ！」

第30話 魔法があるからって無茶苦茶しすぎだろ!?!あと私情入りすぎ!!

白衛「マジでやりやがったよコイツ」

ドアノブ「いやほら、人間欲望に正直にならないと心と身体に毒じやん?」

白衛「今まさに俺が毒をくらってんだけど」

ドアノブ「そこは・・・まあ主人公ってことで諦めて」

白衛「無理に決まってるだろ!」

第30話 魔法があるからって無茶苦茶しすぎだろ!?!あと私情人りすぎ!?!

「（精神的に）疲れたー！クロノ、今回はそっちの落ち度なんだから報告は無しって方向でよろしく」

「そんな訳には行くか！落ち度があったのは悪かったが最後まで仕事しろ！」

チツ融通の効かん奴め。

今回の任務は以前依頼のあったミッドチルダの要人の娘の影武者をする事だ。

最近はこの手の依頼が多い、大抵企業や政府のお偉いさんが依頼してくる。

今回の依頼者は娘さんの父親、ところが、依頼書や契約書には確かにこの親父さんの印やIDナンバーが使用されていたんだが、実際に仕事の依頼を頼んだのは娘さんだった。

「父は仕事が忙しく、私が代理で頼むように言われました」

管理局員やクロノには、そう言ったらしい。

確認をとろうにも要人なだけあって秒刻みのスケジュールで動いていてアポ無しでは念話を入れることすら出来ない状況だった。

で、少々（かなり）釈然としないが娘さんのところに行くこと。

「貴方が便利な変身魔法を使う人？では早速私の姿におなりなさい、貴方は何も聞かず喋らず私が連絡を入れるまで机に向かって勉強をしている振りをしていて頂戴な」

何でしょうね、この手の甲を頬に当ててオホホと高笑いしそうな高

ビー女は。

2、3発デコピンを喰らわせた気持ちになりながらも、要望通りに変身して、本棚から目に付いた本をとって見ていた。

本物は「それじゃあ、よろしく願いしますわ」とか言って何処かに行った。

今更ながら、この仕事って依頼終了の時間ってひょっとしてあの高ビー女が（何時か分かんが）帰ってくるまでか？

ずっとこうしてんのか？風呂とか寝る時間になったらどうすんだ？食事のテーブルマナーなんて俺知らんぞ、後トイレ何処だ？

先行きが不安になりあれこれ考えていると背後のドアからノックが聞こえてきた。

だが、此処で俺の正体がばれた。

「お嬢様、お茶をお持ちいたし……ガッシャアアン！」

執事服を着たガタイの良いお爺さんが俺の姿を見て、持って来たティーセットを落とした。

どうしたのかなと思っていると。

「偽者じゃあああああ！あの勉強嫌いで頑なに机に座らんかったお嬢様が今日に限って行儀良く勉強しとるなんぞ有り得んわああああ！」

なんつー信頼のされ方してんだろうね、あのお嬢様。

こっちはてつきり使用人連中も影武者のことを知っているのかと思っていたので対応に困った。

聞いてみると、お嬢様の父親から影武者の用意をすると言う話は無かったらしい。

つまりあのお嬢様が屋敷を抜け出て好き勝手に街を歩きたかったから、俺が呼ばれたわけだった。

流石に父親のIDを使うのはやり過ぎと判断され、非常用の回線を使って我仨お嬢様の父親に連絡を入れると親父さんは大激怒。

屋敷の使用人を総動員して、街で遊んでいた諸悪の根源を捕縛し屋敷の書斎まで連行。

親父さんに書斎で説教されていた・・・最初の方だけな、後半に入るとお嬢が泣き出して仕事ばかりで最近家に居ない親父さんを困らせたかった、怒られても良いから会いたかったと理由を話した。

これに対して親父さんはショックを受けて出来るだけ家に帰るよう
に約束。

泣きながら名前を呼び合い抱きしめあう親子が数時間ずっと目の前に居た。

「ム、まだ居たのかね？まあ君には少し迷惑を掛けてしまったみたいですすまなかったね。報酬は払うから帰りたまえ」

数時間も人を待たせておいて第1声がそれかよ。

帰るときに執事さんや使用人が本当に申し訳無さそうに謝って来たのが印象的だったな。

「というわけであの親子を1回ブッ飛ばしたくなりました」

「そんな事報告書に書けるか！！」

「子供の悪戯に引っかかるぬるい管理局の体制に不満を覚え「もつと書けないだろ！！」

「まあまあ、今回は此方にも落ち度があったの事実なのだから、依頼の受理に対して改善を求めるように報告しておくわ」

「了解です、あとリンディさん、頼まれてた写真、今週中には届けますから」

「まあ、ありがとう。楽しみにしてるわ♪」

リンディさんの仲裁が入りとりあえず任務終了、護衛の任務はこれから続ける方向で決着した。

え、何の写真かって？クロノが悲鳴を上げる写真とだけ言うておこう。

ガチャ、ボタン

少し疲れた顔をしながら退出する白衛を見ながらエイミィは2人に尋ねる。

「・・・艦長、クロノ君」

「なにかしら？エイミィ」

「例の件について言わなくても良かったんですか？」

「大丈夫よ、なのはさんのお兄さんが説明してくれるらしいから」

「白衛も管理局と翠屋で仕事の連続だし、良い休憩時間と思えば本人も了承するだろう。こっちの目的も達成できて助かるし」

本人の与り知らない所で、何らかの陰謀が進められているのを白衛

はまだ知らない。

翠屋

「つてことがあってさ」

「さ、流石にイヤだね、お疲れ様、白衛」

ムカつく任務も終わって今日は客として翠屋に居る。

今はなのは、フェイト、はやて、ノエル、ヴォルケンリッターと楽しく談笑の真っ最中だ。

話題はさっきの任務の話。

「あたしなら絶対アイゼンで殴ってるな」

「最終的に空気扱いされるのって嫌やなあ」

「でも最近その類の任務ばかり来てますよね。こっちでも翠屋の店員をしてるんですから無理しちゃダメですよ？」

「なのは、そのセリフはそのままお前に返したいんだけどな」

「え、えーと、キヲツケマス？」

「何故疑問系で返答すんだよ」

言った途端に首が明後日の方向を向きやがった。

まあ、最近口すっぱく言ってるし、無理してるって自覚が出来ただけ少しはマシになったか？

カランカラン

「あ、お兄ちゃん、お帰りなさい」

客かと思ったら恭也さんだった。

ただ何故だろう、ずっとこっちを睨みつけてくる。

「……………白衛、話があるから来てくれ」

「？」

口を開けば罵詈雑言を放つのに、どうしたんだ？

あれか？学生でいうなら、放課後に体育館裏まで顔貸せやってやつか？

とりあえず、席を立ち奥の厨房まで移動する。

「えーと、話して一体なんですか？」

この人に怒られるのはしょっちゅうだが、今日は店員じゃないし怒られる理由が見当たらない。

「白衛、お前確か姿を自由に変えることが出来るんだったな？どれだけの間変身できる？」

「まあ、長時間は無理ですが、カロリーの補給をすれば1日は持続します」

「……………そうか、よし、白衛、唐突で極めて不本意ではあるがお前に頼みたい事がある」

ポン、とではなくガシッと肩を掴んでくる。
本当に頼むのが嫌そうな顔だな、そんなに嫌なら他の人に頼めばいいのに。

「白衛、聖祥学園に編入しろ」

「……………は？」

えーと、うん、耳は正常だな。店の外の通行人の会話も聞き取れるし。

「恭也さん、もう1度さっきのセリフをお願いします」

「だから、聖祥学園に編入しろ」

「知ってると思いますけど、俺20歳ですよ！？年齢詐称、文書偽造は犯罪なんですけど！？」

そもそもなんでこの歳で小学生しなきゃなんの！？

どんな罰ゲームだよ。

ばれたらこの前戸籍作ったばかりだったのに社会的に死んじゃうぞ。新聞の見出しはこうか？『心は永遠に幼いまま！？年齢経歴偽り変態男小学校編入！！』

……………マジで笑えねえな。

「大丈夫だ、父さんと母さん、それとハラオウン家のリンディさんとクロノ君も了承済みだ。あとはお前のサインだけだ」

随分と無駄に手回しがいいなオイ！

「っていうかなんで小学校に編入しなければならないんですか？」

「・・・実は最近、なのは達にちよっかいを出す男子が出始めてるんだ、好意があるがどう接すれば良いか分からず意地悪をしてしまふんだろうが、思春期の子供はやる事が過激だ。フェイトちゃんやアリサちゃんが居るとはいえ、正直これ以上変な虫ゴミが付くのは避けたい」

虫ゴミって言ったときにこつちを睨む目がより一層鋭くなったよ。

それよりも思いつき私怨が入ってるよな？

良く承諾したなあの2人。

いや、クロノならやるか。

「任務や翠屋の仕事は・・・ああ、これも仕事って訳ですね」

「理解が早くて助かる、カロリー補給は昼食に高カロリーの食べ物を食べればいいだろう」

仕事、仕事、また仕事、このままじゃ俺がなのはみたいになっちゃうそうだ。

撃ち落されるのは俺か？

「分かりました、とりあえず編入の書類「大丈夫よ、あとは白絵ちゃんの制服のサイズ合わせだけだから♪」・・・何時から居たんですか桃子さん？」

そして何故編入の承諾書類に俺の印鑑が押されてんの！？

「魔法って便利よね、学校には家の遠い親戚ってことにしてあるし、

リマさんを母親にしておいたから」

人と会ったら唸り声を上げて威嚇するあいつが母親設定だなんてミ
スキャストもいいところだ。

とはいえ他に良い具合の年齢者がいないし、居ないよりも居たほう
が何かと融通が利くだろう。

結局俺とついでにノエルと一緒に編入する事になった。

編入について3人娘は大喜び、任務についてもなるべくなのは達と
一緒に任務に就くことになった。

翌日

「白衛————！！！！」

翠屋で制服のサイズ合わせをしてたらクロノが顔を真っ赤にして駆
け込んできた。

ちなみに、なのは達もサイズを新調するため一緒にいる。

「やあ、おはようサイボーグクロちゃん」

「僕は身体の何処も改造してない！！」

「うん、知ってる、此処にきた用件も大体想像付くけどあえて言お
う、何か用？」

「お前、アースラ中に僕の写真をばら撒いたな！！」

突きつけてきたのは男が着るのは躊躇われるような服を着たクロノ

の写真だった。

「当たり前だ！あとから聞いた話だけど、お前リンディさんと桃子さんが編入届けを記入した時性別欄に女の方に丸ふったの知ってスルーしたろ！！」

その仕返しとしてゴスロリ服とメイド服を着たクロノの写真をアースラ中にばら撒いたのだ。

「乗組員がなんとも言いがたい目で見て来たからなんだと思えば！！」

「これから数年間女子の制服着させられるこっちの身にもなりやがれ！人の噂も75日、短いもんだろが！！しばらくは女装執務官の汚名を被れ！！」

「クロノ君、見ない振りはいけないと思うの」

「だからってこんn「・・・クロノ」フェ、フェイト、君からも何か言ってやってくれ！」

「流石にこの服は無いと思う・・・」

「これを着たのは僕じゃ無————い！！！！！！」

しばらく、アースラ及びミッドチルダではクロノ執務官の人気、好感度、信頼度などが右肩下がりになったらしい。

第30話 魔法があるからって無茶苦茶しすぎだろ!?!あと私情入りすぎ!?!

白衛「ああ、これから小学生に逆戻りかよ」

ドアノブ「授業は簡単なんだからいい休みと思えばいいじゃないか」

白衛「宿題がウザそうでいやだ」

ドアノブ「マア、ガンバレヨ」

白衛「心籠ってないにも程が無えか?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8149k/>

酷い死に方をした転生者（自業自得だけど）

2010年10月10日14時54分発行